
封印聖女

檜高 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印聖女

【Nコード】

N0430Y

【作者名】

檜高 黎

【あらすじ】

青年は、居合大会に軽々と優勝する程の剣の才能を秘めているが過去の出来事により、心に深い闇を宿していた。

大会からの帰路、不慮の事故に遭い、気が付けば深い森の中に倒れていた。

そこで遭遇する驚愕の事実、刃を通して共感できる相手を見つける。しかしそれは彼にとってこれから先に起こる出来事の序章でしかなかった。

序章一起源（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

序章 一起源

時は戦国時代――――

『一本の刀に纏わる奇聞』

要塞と化した建物は、周囲を甲冑を着込んだ集団に包囲されていた。

その集団の中に一際、身分の高そうな人物がいた。

「チッ！ 信長め。手間取らせてくれる！！ この際、刀は後でかまわん。まずは信長を炙り出せ！ 討ち取ってからでも問題なからう。疾う疾うに火を放て！」

指揮官の合図により寺は包囲されている。全軍一斉に火が点いた弓を構える。

「全軍用意っ、放て！！」

指揮官の合図に従い、家臣達は一斉に弓矢を解き放つ。弓は弧を描き、寺へと突き刺さると一斉に燃え上り炎上する。

燃え盛る火の海で舞うように戦う人物がいる。辺りは朱色に染められ、炎の灯りにより人影が映し出される光景はあたかも、一枚の絵画の様だ。

白い着物を身に着けて戦う人物は、襲い掛かる敵をヒラリツとかわしては右手に持つ刀で一刀の元に葬り去る。

刀は複数の斬撃を受け刃こぼれしていた。

「御館様、もう此処は駄目で御座います。せめて御館様だけでも落ち延びて下さい」

傍に控えた女性の様な風貌の小姓が厳しい顔で言った。

「蘭丸、楽しいよのう。この信長今宵程高揚した日はないぞ!」

振り返り楽しそうに笑みを浮かべ起つ人物の着物は、所々朱色に染まっていた。

「光秀が謀反を起こす事は、当に解っておったが、まさか今宵だとはなあ。露にもおもわなんだ! 人生何が起こるか分からぬ処が実に愉快よのう」

その表情は、本当に現状を理解した上での恍惚の笑みを浮かべている。

白い着物を纏った人物は、刀を床に突き立てると、小姓の言葉や周囲の状況など気にも留めず力強く両手を叩いた。すると、奥の襖が開き一人の武士らしき人物が姿を現した。

何処か妖艶な雰囲気纏ながら膝を付き頭を垂れている。

あだちろうくろうひめただ
「安達六郎姫忠是に」

眼光鋭い眼差しで、安達六郎姫忠を見つめる。

突き刺した刀を、引き抜くと姫忠の目前まで来ると腰をおろし、気のせいか、悲哀満ちた顔した様に見えた。

威厳のある顔で、姫忠の両手に刀を託すと微かに笑った。

「姫忠、この刀を持って逃げろ。決して光秀や家康に奪われる様

な事は遭ってはならぬ！ よいな！！」

姫忠は、涙を堪え命令に従いその場を後にすると、裏口から包囲された外へ足早に出て行った。

安堵の表情を浮かべ、白い着物を着た人物は、火に覆われた部屋の中、声高々に小姓に言った。

「蘭丸、鼓を持てい！ この信長、生涯最後の舞を舞おうぞ。地獄に往くには少々辛気臭い、人間死する時でも華やかでなくてはいかぬ！」

小姓は今にも溢れそうな涙を堪えながら愉しそうに笑った。

「御館様のお好きな敦盛で宜しいでしょうか？」

小姓の言葉に満足気に相槌すると、火の海と化した庭にくるりと顔を向け、扇子を右手に持ち構える。

扇子が開くのが合図の様に、小姓の手により鼓から音が響き渡ると、白い着物を纏った人物は静かに舞い始める。

「人間五十年ゝ。下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなりゝ！ 一度生を得て滅せぬ者はあるべきかゝ」

鼓の音と一体となり舞い終えた。

白い着物を着た人物は、小姓に一度も見せたこと無い貌で微笑む。

「蘭丸、好い鼓を奏でおる。今宵、極上の舞を舞えた事にこの信長、心底満足しておる」

その言葉に小姓の瞳から堪らず涙が、雫となって頬を伝わり落ち

る。

「勿体無き、お言葉、恐悦至極に御座います・・・」

静かに小姓に近づき、膝をおろすと微笑し、遺言を告げる。

「蘭丸、儂の亡骸を誰の眼にも晒す事は決して罷り（まかり）ならん。よいな？」

そう告げると、小姓の腰帯びに結び付けたある短刀を引き抜き、燃え盛る庭園に堂々と起ち、腰を下ろし胡坐あぐらをかくと着物の襟を両の手で開き、短刀を腹部に突き刺した。

「ぐう！・・・まだまだ、これしきでは、死ねぬよなあ」

愉しように貌を歪ませ、再度腹部に向かい短刀を振り下ろすと真横に掻っ捌く（かつさばく）。

四度程繰り返し、ようやく着物の主は頭を垂れ微動だにしなくなつた。

天を仰ぐように燃え盛る火の海の中、小姓は主に近づくとき帯刀している太刀を主の首へと振り下ろした。

その顔は涙で歪んでいた。

「御館様っ！ 御免仕る！」

主の首はごろりと転がった。

刀をその場に突きたて、主の手から血に染まった短刀を持ち、四肢を跡形もなく千々に裂いた。

空ろな瞳で、鬚を掴むと誰の者か判別がつかぬように、幾度も刃

を突きたて粉碎していく。

機械の様に全てやり終えた後、主の遺体を大事そうに抱えると最も炎の勢いのある場所へ大事そうに投げ入れた。

部屋中央に正座し、着物の襟を両の手で開くと自ら短刀を腹部に突き刺し真横に掻っ捌く（かつさばく）と、最後の言葉を呟く。

「この蘭丸。御館様の傍に仕えられて誠に・・・勿体ない位幸せ者でした・・・」

言い終えると小姓は息を引き取った。すかさず、天井から火柱が崩れ落ちる。

まるで全てを覆い隠すように。

／

その頃、御館様の命により、姫忠は闇の深い森を刀と風呂敷を携え逃走を試みていた。

もう三十人は斬っただろうか？いずれにせよこのままではいつか捕まると観念した姫忠は、本来の姿に戻る事を決意する。

「御館様申し訳御座いません。この姫忠、御館様に拾われ育てて頂きましたが、御館様の刀と血筋を守る為に女に戻る事をどうかお許し下さい」

茂みに隠れ、鎧を無造作に脱ぎ捨てると着物に着替えた。

刀片手に迫り来る敵を迎え撃つ。

数人の武者に囲まれた姫忠は一人、また一人と一刀の元に葬り去る。

全身血に塗れた姿で舞うように踊ると、左小指で血の口紅を引く、そして嬉しそうに嗤う。

「わらわは、鬼女^{きじよ}じゃ！ 食われない者はかかってまいれ！ 今宵は喉が渴いて堪らぬ、もっと鮮血をわらわに飲ませてくれぬかう？」

武者達は得たいの知れない恐怖に身動きが出来なかった。

ある者は、真っ白く青ざめ、齒をカチカチ鳴らす者もいる。

まるで蛇に睨まれた蛙の様だった。

余りの恐怖に、武者達は我先に逃げ出した。

深い闇の中に取り残された姫忠は安堵した後、刀と共に何処か（いずこ）に姿を眩ました。

一五八二年。世に言う『本能寺の変であつた』

雷光の矢に貫かれし者（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

雷光の矢に貫かれし者

『本能寺の変』から四百と三十年の時が過ぎた一現代

居合大会に出場する為、彼は京都に居た。

三日に亘る競技を無事に終了し、彼の優勝で大会の幕は閉じた。百年に一人の天才と周囲から言われる彼だが、そこに彼の感慨はない。

公式、非公式であっても彼には関係のない無縁の話だった。

彼は、もうこんな処に用はないと言った感じで着替えると会場を急ぎ後にする。

会場から外へ一步出ると、紅葉やつつじ等が大地に根づいて、葉をキイロやアカに染め上げている。

一般的にそんな移り行く季節の感動を目の当りにしたのなら、きっと多数の人がアカとキイロで織り成す光景に心をとらわれただろう。

だが、ある時から彼の世界は一変した。

今の彼の現実、虚像の様な世界だった。

感動などと言う感情は彼の心には飛来しない。

そう。

ガランドウの世界。

彼は、俯き一瞬だけ足を止め独り言を呟いた。

「その天才がこの様か・・・」

そして宿泊しているホテルへと静かに歩み出した。

薄暗くなった空、ビルと言う森に囲まれた街をひたすら歩く。
雑踏の中、淡々と歩みを進める。

時折すれ違う人は、恋人達か、友人同士だろうか。

目抜き通りを楽しそうに歩く人達の姿は、彼には別世界の人間に見える。

突然、薄暗くなった空から雷鳴が鳴り雨が降り出す。

先程まで楽しそうに歩いていた、彼等も急ぎ飲食店や閉店した店の軒先に避難する。

しかし、彼だけは違った。

雷鳴や雨など、気にも止めず淡々とホテルへの道を突き進む。

「あの日も雨が降っていた・・・」

立ち止まり、空ろな瞳で空を見上げる。

一瞬、呆とした後、静かに正面に向き直しホテルまでの道を再び踏み出す。

周囲の人達は彼を、奇異な眼差しで見ていた。

人の目など気に留めず、彼は歩いた。

やがてビルと言う大木が群生する、目抜き通りで一番大きな交差点に差し掛る。

彼は渡ろうとしたが、歩行者信号は赤になり歩みを止めざる得ない。

向いに信号待ちをしている人が大勢いた。

当然、傘を差してない彼は、滝に打たれたかの様にびしょ濡れだった。

雨で学生服は水気を帯び、肌に張り付いている。

少し長めの漆黒の髪からは、水滴が髪を伝いアスファルトへと吸い込まれていく。

そんな彼の姿を見てか、一人の若いOLが後ろから話し掛けて来た。

「ねえ君、傘くらい差さないと風邪を引くわ」

優しそうな声に彼は振り返った。そして・・・

「構いません。雨に打たれたい気分なんです。そんな気分の時も貴女にもあるでしょう？」

女性へ言葉を返すと、悲しげに笑う。

彼は分かっていた、きっと本当に心配してくれてるのだと。

だからこそ遭えて疑問で投げ返したのだ。

普通なら相手のOLも好い気はしなかっただろう。

だが振り返った、彼を見た瞬間OLは思わず見惚れてしまった。

切れ長で二重の瞳、スツと通った鼻筋、少し厚めのやらかそうな

の下唇をした端正な顔立ちをした青年に。

OLが見惚れて呆^{ぼう}としてる間に、信号は青に変わっていた。

突然雷鳴が轟く！ OLは我に返ると俯き加減に小声で呟いた。

「そうね・・・そんな日もあるわね」

頬を薄いピンクに染めて、足早に横断歩道を走り去っていった。降り頻る雨の中、何事も無かった様に横断歩道を彼は歩きした。横断歩道の中央部分に差し掛かった頃、信号は青から赤へ変わった。だしていた。

点滅する信号と共に雷鳴が響く、まるで共鳴するかの様に。

何かのスクランブルの様に。

誰かを待っていた様に・・・雷鳴は咆哮をあげた。

暗雲を切り裂き、閃光が槍のようにビルと言う大木を避け、狙いを定めると迷う事なく獲物を捕らえる。

空から落ちた蒼き落雷は、彼の姿を閃光の彼方に一瞬にして覆い隠した。

眩い程の閃光に人々は一瞬にして、視界を奪われた。

人々が視界を取り戻す頃、雨は止んでいた。

周囲は騒然とし、混乱していた。

丁度真向かいの店の軒下から見ていた、中年のサラリーマンが声を荒げた。

「おい！ 人が落雷に撃たれたぞ！ 俺は救護に行くから誰か救急車と警察を呼んどいてくれ！」

男性が、急いで店を出ると落雷が落ちた場所駆け寄る、アスファルトが焼け焦げる匂いと煙で辺りはよく見えなかった。

急ぎスーツのポケットからハンカチを取り出すと口の周り覆う。

男性は、どうにか落雷の落下した場所へとたどり着いた。

周辺はアスファルトは熱を帯び、靴を履いている状態でも熱を感じる事ができた。

落雷の落ちた現場は、半径一メートル程の穴が顔を覗かせた、穴を縁どるように煙が立ち昇っていた。

現場を目にした男性は驚き、その場に呆然と立ち尽くし叫んだ。

「確かに落雷が人に落ちたはずだ！ 何で誰も居ないんだよ！！」

程なくして救急車、警察が到着すると周辺は警察の手により立ち

入り禁止のテープが貼られ、落雷の周囲をかこみ、興味本位で見物に来る人々を遠ざける。

それでも辺りは、騒然として野次馬が絶えなかった。

その場で、警察により現場検証と目撃者の事情聴取も行われた。

目撃証言も多数あり、警察も手を焼いているのが現状だった。

この落雷の事故は、各種マスメディアに取り上げられ、翌日の朝TOPニュースとして流される事となった。

警察の記者会見では、少年らしき人物が、落雷に打たれた事は目撃証言からも紛れも無い事実であると言う見解であり、激しい落雷により、全てが蒸発したと報道された。

蒼き騎士の剣戟（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

蒼き騎士の剣戟

気が付けば彼は鬱蒼とした森の中にうつ伏せに倒れこんでいた。起き上がり周りを見渡す、周囲には人の気配は全くなかった。

「ここは何処だ・・・？」

何が起きたのか分からなかった。

懸命に記憶を手繰り寄せる。居合大会からの帰り道、ホテル向かって歩いてたはず・・・

「そうだ。目抜き通りの交差点で、確か雨が降ってて・・・今まで感じたことのない衝撃が体に走ったのは憶えてる」

雷にでも打たれたのだろうか？あの時、雷鳴が鳴ってたから。

少し指先を曲げる、指は動く様だ、次は両の手のひらを何度かひらいては握りかえしてみた。

特に異常はない事に彼は、安堵の表情を浮かべて呟いた。

「指先や腕に異常がなかったのは良かった・・・」

深緑の隙間から木漏れ日が漏れている、鳥の泣き声が耳に届いてきた。

「都会の喧騒とは大分違うけど、こっちの方がいい・・・」

彼は、大きく空気を吸い込み瞼を閉じた。

耳から伝わる小鳥のさえずりを聞きながら、この雰囲気を楽しむ締めていた。

自分でも可笑しかった、事態がわからない状況の中で、心はこんなにも落ち着いていたからだ。

暫くすると、近くで馬の走る音が聞こえてきた。

馬の軍勢が勢いよく、こちらに向かい走ってくる。

彼を取り囲むと、体躯のいい、全身鎧姿の男が叫ぶ。

「全員、止まれ！」

次の瞬間、甲冑を着用した軍勢は馬から降りると彼を取り囲んだ。体躯のいい銀の甲冑と蒼の外套を纏う姿の人物が話し掛けてきた。

「貴殿は何者か？ 何処から来た？ 見慣れない服装だが、身分を明かしてもらおうか。場合によっては捕縛する事になるが、正直に身分を明かしたほうが身のためだぞ」

何が起きてるのか理解できなかった。突然現れた銀の甲冑姿の男達、全員、手に武器を持っていて兜で顔を覆われている。その事がかえって、不気味だった。

そんな状況に置かれても彼は、落ち着いていた。彼は立ち上がると興味をなさそうに話しかけた。

「何か用ですか？」

一瞬にしてその場の雰囲気張り詰める、どうやら怒りを買ってしまったみたいだ。

「貴殿は、我らを愚弄してるのか？ 聞いているのはこちらだな。それとも貴殿は、ここを何処か知らぬのか？」

体躯のいい男が、この隊の指揮官である事は把握できた。

さらに怒りを買う事を承知で、指揮官に問いただした。

「ここは・・・何処なんですか？」

その場にいた指揮官以外の騎士は酷く激昂し、武器に手を掛けた。彼は、武器に目を向ける、剣や槍を携えていた。

「本当に分からないんです！ 此処が何処か知ってるなら教えて下さい」

指揮官は呟く。

「此処はな、ブリテン国の王。アーサー王の領地だ」

「アーサー王？」

「そうだ。よもや知らんわけではあるまい？ ブリテンに住んでる者ならば知らぬ者はおらんぞ」

「今、俺に分かるのは、ここが元いた俺の世界ではない事だけです」

指揮官は腕を組み少し思案してるようだった。

「ならば、貴殿はこことは違う世界の者か？」

「恐らくそうなると思います。落雷で打たれて、気が付いたらこの場所にいたんです」

「そうか。貴殿も武器らしき物を携えてるようだが、異界の者な

らば、遠慮はいらぬな」

指揮官は、手を掲げて、二人の騎士に合図を出す。すると剣携えた騎士と槍を持つ騎士は、素早く臨戦態勢に入った。彼は表情を強張らせた。

「まさか・・・」

「そのまさかだ、試させて貰うぞ。」

彼は焦る、刀は手元にあるが居合袋の中入ってるからだ。刀を取り出してる時間はない。何とかして刀を取り出す時間を稼がないと考えてると、剣士が切り込んで来た。

片手で剣士の手元を押さえ込み素早く足元を払いのける、剣士は倒れこみ転がる、その間に袋から素早く刀を取り出す。

指揮官は、一瞬驚き、笑った様に見えた。

彼は刀を両手に持ち問いかけた。

「本当にやるんですか・・・？」

「無論だ、生死は貴殿次第だな」

その言葉に、彼の中に熱い物が込み上げてきたのが分かった。今まで真剣での稽古もしたが、唯の一度も高揚した事が無かったからだった。

彼は興奮を抑え切れそうに無かった。

次の瞬間、体勢を立て直した先程の剣士の一人が、上段から斬り突けて来る。

彼は瞬時に抜刀し、剣士の刃を右に避けると、刀の物打ちで押さえ込んだ。

背中にゾクツと悪寒が走る。

背後に回った槍士が、突きを繰り出していた。体が瞬時に反応する。

槍士の突きを鞘で軌道を受け流す。

槍の矛先は彼を逸れ、大地に沈んだ。

彼の動きを見て他の騎士達は呆然とし、目の前の出来事に驚いてる様だった。

平静を装い彼は、指揮官に静かに呟く。

「今のは手加減しましたけど場合によっては・・・斬ります」

その言葉に指揮官の目の色が変わったように感じた。

「さすが異界の者。そんな戦い方は今まで見た事も聞いたこともない、我が精鋭をこうも簡単にあしらうとは見事な腕だ、お前達は下がってなさい。私が直接相手をする」

指揮官は、外套を先ほどの剣士に投げつけると、大地に沈んだ槍を抜く。

そして素早く臨戦態勢に入った後、冷めた声で言い放つ。

「その腕前、殺すには惜しいが、湖の騎士ランスロットが貰い受ける！」

彼の体に今まで感じた事の無い緊張感が疾走し、本能が危険を知らせてくる。今まで感じたことの無い高揚感が溢れてくる。

彼はランスロットに刀の切っ先を向けると冷静に話しかける。

「本気で殺しに来ないと・・・貴方が死にます」

一瞬で場の空気が冷たく重く張り詰めた。互いに間合いを取って動かない、どれ程時間が経ったろうか、長くも無く、短くも無い、近くで鳥が飛び立つ音がした。

その瞬間、ランスロットが喉元を目掛けて突いてきた、瞬時に刀で槍を左へと受け流す。

刀と槍から凄まじい金属音がこだまする、彼は心の中で呟く。

（なんて重い突きだ！ 受け流すのが精一杯だった）

一方ランスロットは、素早く体勢を立て直し、彼に向けて驚きを口にする。

「本気で突いたんだがな・・・まさか防がれるとは。異界から来たと言うのは、虚言でない様だ」

彼の本能は、先程より強く、ランスロットは危険だと警告してくれる。

本気で掛からないと死ぬのは自分だと認識を改めると、覚悟を決めた。

「今まで本気で抜いた事ないんですけど、本気で行きます」

彼は刀を鞘に納めた。

「どうした？ 臆したか」

「違います。この技でないと貴方には敵いそうにない」

「それは、お褒めに預かり光栄だ。だが剣を鞘に収めた状態で繰り出す剣戟等聞いたこともないが？」

「そうですね、貴方の言う異界の技ですから」

彼は爽やかに笑う、彼の目にはランスロットも笑っている様に映った。

互い距離を保って間合いを取る、不用意に間合いに入れば、双方どちらかが死ぬと互いに予感していた。

ゆつくりと円を描き螺旋状に間合いを縮める、互いの間合いが重なる瞬間。

ランスロットの渾身の一撃が、彼の心臓に向かって突き出された。彼は瞬時に抜刀し体の位置を右斜めに入れ替え八相に構え、流水の如く体を捻り、ランスロットの突きを紙一重で避けると、ランスロットにめがけ疾走する。

「何だと!!」

ランスロットは驚いた。

一瞬にして己の間合いに入り込まれた事もそうだったが、真に驚くべきはその体捌き。

（こいつは・・・とんでもない拾い物だ）と心中で呟き瞬時に体を反る。

彼は、下段からランスロットの顔面を目掛け切り上げた、切先は兜を掠め空を切る。

互いにすぐさま体勢を立て直し、間合いを取り直す。

「見た事もない剣技を捌くなんて、貴方は化け物ですか？」

「その台詞はそのまま貴殿に還そう、兜をしてなければこちらが傷を負わされていた」

二人の間に静寂が流れる、傍観していた騎士達は信じられないと感嘆の言葉を口にする。

「ランスロット様と、互角に戦う者がいるとは・・・」

突然、深緑の森の中、声が響き渡る。

「氣に入った!」

ランスロットはそう言うのと先程までの殺氣がまるで嘘のように無かった。

彼は表情を変えず、呟いた。

「氣に入った・・・?」

ランスロットは持っていた槍を、槍兵に渡すと馬を連れて来るように命じた。

そして彼の目前に立ち、兜を脱いで素顔を曝け出した。

「我が主の城に着いたら、審議に問われるが、身の安全は必ず保障する」

兜を脱いだランスロットは、黒く長い髪、碧い瞳に端正な顔立ちをしていた。

彼は一瞬心を奪われた、だがその姿に違和感を感じた。

口から思わず言葉が漏れる。

「綺麗だ・・・」

ランスロットは笑った。

「貴殿は、男が好きなのか？生憎私にはその気はないぞ？」

「俺もないよ・・・本当にそう感じたから言葉に出してしまったただけだ」

まだ笑っているランスロットを横目に、彼は酷く後悔した。

「貴殿の名を伺いたいのだが？ 久々に血肉が踊った相手だ、名を知らぬとあっては騎士の恥だからな」

「綾瀬 九郎・・・」

「アヤセクロウ・・・？」

ランスロットは難しい顔をしている、どうやら言いにくそうだった。

「クロウでいい、異界の言葉は発音しにくいだろうから」

「ではクロウ、我が主の城キャメロット城に誘おう」

騎士が目の前に馬を連れてきて声をかける。

「どうぞ、クロウ様」

「え？ 様なんでつけなくていいですよ」

「ランスロット卿が認めた方に敬意を払うのが騎士の務めです。」

事実、私共は貴方様の技量を見て感嘆してしまいました」

クロウは困りながらも馬に乗り、兵士に向かって言葉かけた。

「ありがとう」

兵士は膝を着き、会釈する、ランスロットはその光景を見てクロウは大物になるかも知れぬと感じていた。

「では、クロウ用意は良いか？」

「馬に乗るのは久々だけど、何時でも出発できる」

「そうか、では皆よ、私に続け！ 城に戻るぞ！」

出立の合図と共に馬は走り出した。

クロウはこの時、これから先、己がどうなるのか想像だにできなかった。

こうして運命の輪はグルグルと静かに回りだした。

翠の騎士と真偽（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

翠の騎士と真偽

鬱蒼とした森を一人の騎士が馬に跨り疾走していた。

いかにも騎士らしい勇猛さを兼ね備え翠の外套を風になびかせるその騎士は、深緑で囲まれた森の中、疾走する騎士団が目に残った。

「察するに、あれはランスロットの騎士団か？　しかし最後尾にいるアレはなんだ」

一見普通の騎士団の様であったが、最後部に全身漆黒の姿をした騎士には見えない人物が見えた。

「何か好くない事が起こりそうだな、一刻も早く帰還せねば」

手綱を強く握り、馬に鞭を入れた。鞭の合図と共に馬は先程より加速し森を駆けていった。

その頃、深緑に囲まれた森をランスロット一団は疾走していた、馬の駆け走る音が鈍い響きを轟かせる。

「皆、城が見えてきたぞ！　王に失礼が無きよう準備を怠るな」

クロウは困惑していた、準備を怠るなど言われても、この世界の礼儀なんて全く知らない事。王に謁見して今後の自分の行く末がどうなるのかも彼は不安で落ち着かなかった。

「どうしたクロウ？ 顔色が悪いようだが？」

「ランスロット、俺はこの世界の礼儀を知らない」

そう言ったクロウに対しランスロットの言葉は、実にのんびりとしたものだった。

「当然ではないか、クロウは異界の者だ。礼儀を知らないのは当たり前だろう。何かあれば我等がフォローに回るから気をやむな」

「我が王は寛容な方だ、心配するな」

クロウはランスロットの言葉に安心した。

馬上で会話をしている間に、森を抜け城に到着していた。

一様に馬の速度を落とし、緩やかに城門の前で停止すると、城門の前には兵士が門を挟んで立っていた。

ランスロットは兵士に向かい命令する。

「開門せよ」

兵士は開門の合図と共に門を開く、ランスロット先頭に次々と門をくぐってゆく。

クロウが門を潜ろうとしたその時、一人の兵士が槍をクロウに向ける。

「待て！ 貴様は何者だ！ その様な姿で、我等が城内には入れさせぬ」

すると異変に気づいたランスロットが憤慨する。只事ではないと城内の民で野次馬が出来た。

「その者は、私が認めた者だ。文句があるならば私に言うべきではないか？」

兵士は驚き慌て、すぐ様跪いて許しを乞う。

「ランスロット様、御無礼申し訳ございません」

兵士の言葉にランスロットは更に、憤慨する。

「許しを乞うのは私ではなく、クロウにではないか！」

兵士は我に返り、クロウに向かい直し跪く。

「クロウ様、ご無礼の数々をお許し下さい」

クロウは、嫌な顔一つせず、兵士に向かって話しかける。

「お立ちください、貴方はアーサー王の仕事を忠実に実行したのです。城を護るのが兵士の務め、何を恥じる事があるんです。もし私が本当に不審な輩であるなら尚の事。貴方達がこうして忠実に務めているからこそ、城の安全が保たれてるのではないですか？」

城門を護る兵士達、民衆は感嘆した。

兵士は面をあげ涙を流していた。

「クロウ様の優しき、お言葉在り難く存じます。どうぞお入り下さい」

城内は騒然としている、先程の一部始終を見ていた者によって、

すぐさま城内に噂が飛び交う。

「なんでもランスロット卿が認めた方らしいわよ」

「一部始終見てたを見てた奴の話じゃ騎士らしい振る舞いをしてらしゃったとの話だ」

「全身漆黒で気味が悪い」

「城に災いをもたらすんじゃないかしら」

良い噂もあれば悪い噂の飛び交ってる様だった。

騎士団は城に向かい城下を馬に乗り闊歩している、周囲は民衆で溢れていた。

ランスロットは難しい顔をしていた、クロウはランスロットに近づき小声で囁く。

「何で難しい顔してるのさ？」

「クロウ、今はあまり城内を騒がせなくなかったのだ、これから審議にかけられるクロウを目立たせたくないかったのもあるが、クロウが言ったことは間違ってはいなかった。少しあの兵士に言い過ぎた事もある。そう言うこともあってな・・・」

ランスロットは反省してる様子だった。

「俺は事実をいったまでだよ、それに俺は頭を下げられるような身分でもない」

「しかし、クロウが言った言葉は真に騎士らしい言葉だったぞ。」

これが良い方向に向いてくれると良いのだがな」

ランスロットと話をしていると城下の大広場に突き当たった、唯一、城下で一番大きな場所だった。

クロウが上を見上げると少し離れた所に城はみえていた。

「此処から見ても大きな城だな、本当に此処は元いた世界じゃないんだな」

改めて自分がどういう状況に置かれているのか、クロウは認識し直すと頭を痛める。

大広場に視界を戻すとそこには素朴で大きな噴水があった。

噴水からは水が滾々と湧き出ている。

先頭に行くランスロット騎士団の後をついて行くクロウは、噴水を横目に城へ向かう。

大きな噴水だなあ、これだけ大きいと鯉でも飼えそうだなと考えていると、ランスロットの声が響き渡った。

「皆、止まれ！」

クロウも慌てて馬を止めて、城の方角へ視線を向けると、城への道を一人の騎士が塞いでいたようだった。

「これはガウエイン卿。何用ですか？ 我等は今から王に謁見しにいく所なんだがね」

ランスロットの顔は強張っていた。

クロウはランスロットの横に馬をつけた。

「クロウ、非常にまずい事になりそうだ。よりにもよってガウエイン卿が出てきた」

「ガウエイン卿？」

「ああ、説明は後だ、どうかガウエイン卿を説得せねば城まで辿り着けない」

少し離れた場所から対峙するの騎士は猛々しく咆哮をあげる。

「ランスロット卿、貴公は下がっていてもらおうか。私が用があるのはその漆黒の者のほうだ、その様な輩を王に謁見させるわけにはいかんであろう」

「ガウエイン卿、事の経緯は審議の場で尋問するのが一番良いではないか。王や他の騎士の手前もある」

「ランスロット卿、城への道を通るのはこのガウエインを倒さねば通れないと言う事が理解できぬのか？」

ガウエイン卿が一度言い出すと梃子でも動かない事を知っている、ランスロットは顔を歪める。

「ならばガウエイン卿、貴殿の相手は私がしよう」

「くどいぞ。ランスロット卿！ 用があるのは貴殿ではない！ その漆黒の者だ！」

互いに睨み合いが続いている、ガウエインは痺れを切らし始めていた。

クロウは、ガウエインの様子を見て、ランスロットへ話しかけた。

「ランスロット、庇わなくていい。あのガウエインって人、道を

始めから譲る気は無いようだ」

「クロウ本気で言ってるのか？ ガウエインはお前を殺す気でいるんだぞ！」

「分かってるよ。ああいうタイプは言葉で説得するより、刃を以て説得するのが早い」

そう言うときクロウは馬からを降り立つと、ガウエインの前へと歩を進める。

クロウの様子をみるなり、ガウエイン卿も馬を降り、外套を外すと馬の背に投げ、クロウに向かい歩みだす。

「クロウ！！」

必死に呼び止めるランスロットの言葉を、クロウは聞き流した。

クロウとガウエインの距離が互いに縮まってゆき、手を伸ばせば互いに触れられる距離まで近づいていた。

只事ではない様子に当事者達の周りは、多くの民衆で完全に壁が出来上がっている。

「あの漆黒の者死んだな、ガウエイン卿に敵う訳がないだろう」

「ランスロット卿が認めた方だぞ、ガウエイン卿にも劣らないだろう？」

野次馬の間では様々な意見が飛び交っている。

クロウとガウエイン卿は互いに見つめ合う、そしてガウエイン卿が言葉を発した。

「漆黒の者、大した度胸だ、それだけは認めえてやろう。このガウエインの前に何の策もなく出てくるとは、余程の愚者か、大器の者か、果たしてどちらか？」

ガウエインは獰猛な笑みを浮かべている。

「ガウエイン卿、そんな事俺にはどうでもいい事だ、貴方を退けないと王に謁見できない。だから貴方と対峙してるだけだ、理由はそれだけで十分だ」

ガウエインは笑う。

「このガウエインを前にして大口を叩くか、今だ臆せずにいられる事は褒めてやろう。が貴様は前者だな。愚者は王に謁見せず到此処で死ぬことになるだろう」

「此処で死ぬかどうかは、それは貴方が決める事じゃない俺が決める事だ」

ガウエイン卿は剣を抜いた。

「我が愛剣ガラティーンよ、愚者に神罰を下せ」

一閃、ガウエイン卿は横一文字にクロウを斬りつけていた。クロウは土煙と共に、地面を滑る様に吹き飛ばされた。

「クロウ！！」

ランスロットは叫んだ。

「あっけない物だ、度胸の割には他愛も無い、どんな物かと思えばやはり唯の愚者か」

やがて土の粉塵の中に人影が映し出される、粉塵は収まり、皆一様に目を見張る。

クロウは片膝を着いて、鞘から少し刀を抜き刀身で剣を受け止めていたようだった。

「今のを防いだか、普通ならば体ごと切り裂いているんだがな」

言葉とは裏腹にガウエインは、内心驚いていた。秘蔵の愛剣の技を防がれたからだった。ガウエインはクロウに問う。

「漆黒の者よ、どうやって今のを防いだ？」

「それを聞いてどうする、教えた所で貴方には使いこなせない」

クロウの大口を聞きガウエインは歓喜をあげ、笑い出す。

「ふははははははは！ 実に見事だ！こんな所で強者に出会えるとは、ランスロット卿が認めたのも嘘ではないか」

ガウエインはクロウを指差すと話しかける。

「今の技を防いだのはお前で二人目だ、一人はそのランスロット卿、二人目は漆黒の者お前だ！」

そう言い放つとガウエインはクロウに追い討ちをかける、クロウは今だ片膝を付き微動だにしない、

ガウエインはクロウに向かい走り出す、そして真上からクロウ目

掛けてガラティーンを振り下ろす。

瞬間クロウは鞘から刀を引き抜き、両手を使い刀身で受け止める。甲高い金属音がこだまする。

「くっ！」

余りの重い剣戟にクロウは、歯を食いしばる。

ガウエインの剣に一層力が増す、このまま押し切るつもりの様だ。クロウは焦った、このままでは刀が折れてしまう危険性があったからだ。

しかしクロウは、溢れ出る高揚感で思わず笑わずにいられなかった、クロウの口元が緩む。

「一日に2度も化け物に会うとは思わなかった。ついてるのか、ついてないのか」

クロウは刀身で受け止めるのをやめる事にした。

だがこのまま刀身を支えてる手を離せば真っ二つになるのは確かだった。

「どうした？漆黒の者。守ってるばかりでは勝てぬぞ！」

クロウはこの状況を打破にはガウエイン卿の力を利用する事にした。

どうせこのままならば真っ二つだと悟っていたからだった。

「たかがこれしきの事で勝った気になってもらうと困るなガウエイン。貴様の力はこの程度か？」

その言葉にガウエイン卿は激昂する。全力で剣に力が注がれる。

刀と剣からは火花が出始めている。 クロウは、内心、いつ刀身が折れるか肝を冷やしていた。

「今度はこちらから仕掛けるとしようか、ガウエイン」

「何を言うこの状況では仕掛けようもあるまいに」

「ガウエイン卿、挑発に乗ってくれて感謝する」

「何だと!」

一瞬にしてクロウは刀身を左斜めに傾ける、力の込められたガラティーンは刀の刀身を滑ってに大地に突き刺さった。

その刹那、クロウは刀を引きガウエイン卿の喉元へと刀の切先を突きつける。

「貴様! 最初からこうなる事を計算してたのか!」

「最初からって言うのは間違いです、ガウエイン卿、貴方は力に頼りすぎです、俺が膝を付いていたのはガウエイン卿の最初の一撃が効いて立てなかったからです」

「付け加えて言えば、ガウエイン卿が真上から打ち込んでくれた事が活路を見い出せたる要になりました。事実いつ刀身が折れるか冷や汗物でした。」

「ふん! 小僧が一人前に講釈を垂れおって!」

そう言うときガウエイン卿は無骨に愛剣ガラティーンを鞘へと収める。

クロウも刀を引き、鞘へと静かに納刀した。

ガウエインは兜を脱ぎ素顔を晒す。

その素顔は肩にまで届きそうな、白髪交じりの茶髪を後ろで一つに束ねている、瞳は薄い青で、顔は彫りが深く、ゴツゴツとしていた。

一見、無骨そうに見えるのだが決して下品ではない品格を備えていた。

「認めざる得まい、その決断力と判断力、何より死を恐れる胆力。漆黒の者、名を教えてくださいまいか」

クロウはランスロットとの事を思い出した、この世界ではクロウで通す事した。

「クロウと言います、ガウエイン卿」

「見事な腕前だ。ランスロット卿が認めたのも頷ける、私もお前を認めよう、クロウよ」

「有難うございます、ガウエイン卿」

終始を見守っていた、ランスロットを始めとする騎士、民衆はクロウとガウエインの決闘が終わったのと同時に歓喜した。

「おいおい！あのクロウとか言う漆黒の剣士、ガウエイン卿に勝利したぞ！」

「だから言ったじゃないさ、ランスロット卿に認められた方だつて！」

「馬鹿言うなよ、クロウ様が負けるって言ったのは誰だ！」

民衆や兵士達は口を揃えて勝手に言い合いをしている。

クロウとガウエインが居る場所へ馬に跨ったランスロットが降り立つ。

「久しいな。ランスロット卿」

「ご無沙汰してます、ガウエイン卿」

「ランスロット卿、クロウは何処の出だ？　この様な戦い方は初めて見る」

「今わかる事は、クロウは異界の者だと言う事、そして類稀なる剣技、事実ガウエイン卿も体験済みでしょう。我々では判断しかねるのでアーサー王に謁見を願うつもりだったのです」

「それは無粋な事をした、だがこの年になって再び、血肉が踊ると思っても見なかったぞ」

ガウエインとランスロットは互いに目を合わせ、視線をクロウに向ける。

「どうかしたんですか？」

ランスロットとガウエインは目を合わせ口々に述べた。

「クロウ、我等に認められたのだぞ、もっと堂々としていいのだ」

ランスロットがそう言うのとガウエインが続けて言う。

「もっと気丈に振舞え、ではないと我等も困るであろうが」

二人から小言を言われながらも、自分に父と兄がいたらこんな感じだったのだろうかと思って、クロウは少し嬉しかった。

「ランスロット卿、このガウエインも共に往こうぞ、クロウがこの様では審議が心配になりおるわ」

「ガウエイン卿、心遣い感謝します、有難く頂戴いたします」

ランスロットは騎士団に向かって号令をかける。

「ガウエイン卿と共に城に向かう、全員準備は良いか！」

兵士達は一同に素早く馬に跨り指示を待つ、ガウエイン卿も準備を終えていた。

ランスロットとガウエイン、兵士達が声を揃えてクロウに言う。

「クロウ？」 「クロウ！」 「クロウ様！」

ハッと我に返ったクロウは慌てて馬に跨る。

「ランスロット卿よ、クロウを見てると孫が出来たように思える」

「ガウエイン卿、私は息子が出来た様に思えます」

二人の卿がニヤついてるのをクロウは無視することにした。

ガウエインは、ニヤ付きながらも、遠い目でクロウを見つめていた、まるで若き日のアーサー王を彷彿させるこの若者を。

こうしてランスロット率いる騎士団とガウエイン卿、クロウは城へ向かって走り出した。

赤き王の審議（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

赤き王の審議

深緑に囲まれた、小高い山の上、威厳を放ち鎮座する豪華な城がある。

ランスロット一行は城門の前にたどり着く。

「さあ着いたぞ、クロウ。此処が我が主、アーサー王の居られる
キャメロット城だ」

クロウは、呆然としていた。

呆然としているクロウを見て、ガウエイン卿が話しかける。

「どうしたクロウ？ しっかりせぬか！」

ガウエイン卿の言葉に我に返ったクロウは、問い返す。

「これって本物の城・・・？」

ランスロットとガウエイン卿は、怪訝な顔をする。

ランスロットはクロウが異界の出であったのを思い出した。

「なんだ？ クロウ、城と言う物を見たことないのか？」

「実物を見るのは初めてだよ・・・立派過ぎて声もでない」

それを聞いたガウエイン卿は、自分の事のように喜びを声にする。

「そうだろう！ クロウ、この様に立派な城は他国にはないぞ！
何せ城下に一つ、城にも城門が一つつあり二重構造になっている

のだ。他には類をみまい」

「兎も角だ、此処で立ち往生していても仕方あるまい。ガウエイン卿、クロウ。場内に入るぞ」

そういうとランスロットは馬を降り、城門の兵士に願ひ出る。

「すまないが至急、アーサー王に、ランスロットが謁見を願いたいと言付けてもらえぬか」

「ハッ！了解しました、ランスロット様」

城門の兵士は、他の兵士に開門の合図を送ったあと、急いで王の元に走る。

「ランスロット卿が帰還なされた！開門せよ！」

ギイイイ——と音を立て木の柱でできた城門の扉が天を仰ぐ様に上っていく。

ランスロットは、今後の指揮執った。

「兵士は兵舎に戻り、各自の任につけ！騎士は王との謁見の際、クロウの証言者になってもらう」

兵士と騎士達は一同にランスロットに膝を付く。

「了解致しました、ランスロット様」

そう言うのと兵士達は、場内に入り全ての馬を厩うまやに連れていく。

「では、ガウエイン卿、クロウ参るとしよう」

ランスロットを先頭に、右にガウエイン、左にクロウ、その後ろを騎士達が城門をくぐり、王宮へと歩を進める。王宮へと続く道は赤いカーペットが引かれ、中庭には美しい木々は大地に根を下ろしていた。

ランスロット一行が、宮殿へ向かい歩を進めていると、すれ違う、侍女、騎士、兵士達は片膝を付き、皆一様に頭を下げる。その光景を見て、クロウは驚いていた。

「ランスロットとガウエイン卿って・・・こんなに凄いんだ」

その言葉にランスロットとガウエインは互いに見合う。

「その騎士と五分に渡りあったのだ、臆せず自身を持てクロウ」

「負け惜しみではないがなクロウ、ワシは本気は出しておらんぞ」

二人の励ましに、クロウは穏やかで暖かい気持ちになった。今まで自分を理解しようとしてくれる人が周囲に居なかった為だった。

そう心の中で想いながらも、負けじとガウエイン卿に言い返す。

「ガウエイン卿、俺も本気を出してない」

ランスロットを挟み、お互い睨み合う、その様子を見てランスロットは困った顔をしている。

「やれやれ、まるで本当の親子の様だ。ガウエイン卿、御子息が増えて良かったですね」

ランスロットは苦笑していた、ガウエイン卿は不機嫌そうだった。一行は、中庭を抜け、吹き抜けになった広い廊下を早足に抜けて行く。

やがて、王宮の扉に突き当たる、そこには扉を守る騎士が二人、扉を挟み両側に立っている。

騎士がこちらに気づき、ランスロット一行に、膝を付き頭を下げる。

「ランスロット様、アーサー王より承っております。どうぞお入り下さい」

扉が開かれた。

床は一面、豪華な赤い絨毯が敷かれ、王宮を支える柱が6本、その柱の本数分、騎士が柱に沿って立って居た、他より一段高くなっているその場所に、王と王妃が玉座に鎮座していた。

ランスロット一行は玉座の手前まで進み、片膝を付き礼をする、ランスロット、ガウエイン卿は共に、一歩前に出て、王と王妃に挨拶をする。

「アーサー王、グイネヴィア王妃、只今帰還致しました」

アーサー王は二人に向かい、話しかける。

「大儀だった。ランスロット」

「ガウエイン、久しいな、元気になっておったか！」

アーサー王は立ち上がりガウエイン卿の肩を両手でバンバンと叩く。

「この通り、無事元気で暮らして居りますぞ！　アーサー王」

「そうか、それは良かった、病にでも遭ってたならと心配してたのだ」

「もう御主も若くないのだからな」

アーサー王はそう気さくに笑った。

その顔立ちは、少しだけ彫が深く、瞳は薄い緑色をしていた、赤い外套を纏い、銀色の鎧を纏っている、金色の髪は肩に届きそうな位だ。

頭の上には王冠を乗せている。

クロウの目には、アーサー王が、王様って感じには見えなかった。威厳があるのだが、親しみ深い感じがしたからだだった、クロウの思う王様のイメージとは少し掛け離れていた。

突然、アーサー王は思い出したかのように声をあげる。

「おお！　そうだったな、ランスロット。昨夜、落雷が落ちた場所に付いて聞こうと思ったのだ」

「その事でアーサー王に相談があつたのです、落雷の落ちた場所に向かった所、私の後ろにあります、青年が倒れていたのです」

「そうか、しかし風変わりだな。髪の色から瞳の色、身に着ける物まで。漆黒とは変わっておるな」

「アーサー王、風変わりなのは、姿だけではございません。異界の剣技を使います」

そう述べたランスロットを、アーサー王は見つめる。

「ランスロットを疑う訳ではないが、俄かに信じがたい」

一人の騎士が、片膝を付き顔を伏せ、アーサー王に向かい願いでる。

「失礼ながら申しあげます、アーサー王。ランスロット卿が述べた事は、真の事でございます」

アーサー王はどうしても信じれなかった、そこにガウエイン卿が申し出る。

「アーサー王、ランスロット卿とその騎士が言う事は真の事ですぞ。不覚にもこのガウエイン後れを取られました、年には勝てませんな」

ガウエイン卿はそう述べたあと豪快に笑った。

アーサー王はクロウに近づいていく。目の前までやって来て、観察する様に見つめる。

「真に不思議な髪と瞳と顔をしておる。よく見れば、女性の様な顔をしておる」

「私はこのキャメロット城の君主、アーサー・ペンドラゴンだ。貴殿の名はを伺いたい」

クロウは緊張しながらも言葉を絞り出す。

「アーサー王、お初に御目にかかります、名はクロウと申します」

「クロウか、真に名も漆黒だな、しかし、未だに信じられん。どう見ても背丈といい、骨格といい、女性とそうは変わらぬぞ」

「クロウ。ランスロット達を打ち破ったのは真か？」

「はい。アーサー王」

アーサー王は、窓辺に立ち、考え込んでいる様だった。暫くして、クロウには信じられない言葉告げられた。

「国と民を思えばこそ、クロウには地下牢に入ってもらおう。名も姿も漆黒、剣に至っては、円卓の騎士と同格。城内をうろつかせる訳にはいかぬであろう、城内の混乱も避けねばならん」

「ランスロット、ガウエイン。貴公らには申し訳ないが、クロウは当分間、地下牢にいてもらう事とする」

ランスロットとガウエインは即座にアーサー王に申しでる。

「アーサー王、お考え直し下さい、このような仕打ちは余りではないですか！」

「どうか、私の顔に免じて地下牢だけは勘弁していただけぬか」

アーサー王は窓辺から離れ、玉座に座り言葉を述べた。

「ランスロット、ガウエイン、如何なる肩入れも許さん、王たる者、一番に国と民衆の事を考えねばならぬ、私も本音を言えばその様な事はしたくない。国を想えばこそだ、分かってくれぬか？」

ランスロットとガウエインは苦虫を噛んだ表情をしている。互いに刃を交えた強者が地下牢行きに成るのが納得できないでいる様だ。クロウは愕然としていた、ランスロットやガウエイン卿の助力も虚しく、地下牢行きになったのが信じられなかった。

アーサー王は立ち上がり、騎士に命じる。

「クロウを地下牢に連れて往け」

ランスロットとガウエインは声を上げ、立ち上がる。

「クロウ!!」

二人の卿の声も虚しく、クロウは地下牢に入れられる事になった。

ある騎士と地下牢（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

ある騎士と地下牢

クロウは深緑に囲まれた、小高い丘に鎮座するキャメロット城の地下牢へと、幽閉される事となった。王命により、クロウは騎士達に連れられ、王宮から出される。

王宮から出て、吹き抜けになった広大な廊下の角には、地下へと降りる階段があった。

騎士達に連れられ、石段を下りて行くと、周囲を石で囲まれた、牢屋への出入り口が鉄格子になっている牢屋が無数にあった。

牢屋への入り口には、鉄格子で柵が設けられていた。

鉄格子の前には、二人の牢兵が槍を携え立っている。騎士達がクロウを連れて降りてきた事に気づき、素早く姿勢を正す。

「ご苦勞様です、今鍵を開けますので、少しお待ちください」

鍵を回す金属音が鳴り、鉄格子の扉が開かれる。牢に入る間際、牢兵が話しかけて来た。

「申し訳ないのですが、武器を預からせて頂きます」

クロウは、刀を見つめて、一瞬戸惑うと静かに牢兵に受け渡した。もう一人の牢兵の案内により、騎士達は一番奥の牢屋に連れて行かれる。

クロウは無数にある牢に、囚人が居ないことに気が付き、騎士に問い正した。

「この牢には俺以外の、囚人はいないのかい？」

クロウの質問に、一人が騎士が答える。

「此処は、身分の高い者が罪を犯し幽閉される場所です」

「そうか」

騎士と会話をしてると牢屋の最深部に着き当たる。

牢兵が鉄格子の鍵を開ける。

クロウは黙って牢に入る。すると王宮でアーサー王に申しでた騎士が話しかけてきた。

「クロウ様、申し訳ありません。何の力添えもできず・・・」

騎士は、長めの黒髪を後へ流し、中性的な顔立ちをしていた。深みのある碧眼から涙が零れ落ちている。

クロウは、騎士に優しく語りかける。

「泣かないでください。最悪の結果を考えてなかった訳ではないですから平気です。それに、当分の間と言ってましたし、アーサー王は俺を身分の高い者として配慮し、扱ってくれますから」

クロウは牢に入れられた事よりもこの騎士が泣いてる事が気になった。

「正直に言うと、貴方が俺の為に泣いてくれるのが不思議でなりません」

騎士はその問いに答える。

「クロウ様、私も貴方と刃を交えた一人だからです。兜で顔を覆っていたので、覚えていないのも無理ありませんが、出会った時、

最初に貴方に斬りつけたのは私なのです」

その言葉にクロウは思い出す。

「あの時の・・・剣士の方ですか」

「はい。ランスロット様と戦うクロウ様の姿を拝見させて頂きましたが、クロウ様の剣技は逸脱しています。故に他の者には、理解しがたい物でしょう」

「一瞬ではありましたが、この身で刃を受け、私なりに感じました。才あるが故、常に孤独、深い孤独を彷徨う刃で御座いました」

「僭越ながら申しあげる所。クロウ様は、何故我等を斬らなかったのです？」

「人を斬るのは、覚悟が必要です。強いからと言って無闇に人を斬りたくは無かった」

「ですが、あの時私は、殺す気でクロウ様に剣を向けました。敵同士であるなら当然の事ではないですか？」

「相手が、本当に敵であるかどうかは、刃を交えただけではわからないでしょう。意見が食い違ったとしても、全てが自分と相容れないとは限らないですから」

「クロウ様は、お優しいすぎます。このままだといつか命を落とす事となります」

「心配してくれてありがとう。好かったら、貴方の名前を教えて

頂けませんか？」

「私はパーシヴァルと申します。以後お見知りおきを」

そう述べるパーシヴァルは牢兵に申しつける。

「毛布を持ってきてくれないか。夜間は寒くなる、クロウ様に何かあつては、心配するランスロット様とガウエイン様に申し訳が立たない」

牢兵は急いで牢屋に置いてある毛布を持って来た。毛布をパーシヴァルに受け渡す。

「夜間は、冷えるのでお使い下さい。何かあれば牢兵に言つて、私を呼んで下されば、出来る限りの事をしますので」

クロウは毛布を受け取り、壁にもたれ掛かった。

「ありがとう・・・パーシヴァル・・・それと二人に俺は大丈夫だと伝えて・・・くれ」

パーシヴァルに告げた直後クロウは、深い眠りに落ちていった。そんなクロウを見て、パーシヴァルは余程、疲れていたのだろうと察した。牢へ入りクロウの手から毛布を取り掛ける。

「今日一日、見知らぬ土地で、このような扱いを受けられては疲れて当然だろう」

牢から出て牢兵に鍵を掛けさせると鉄格子の入り口を通り抜ける。そして、二人の牢兵に言い放つ。

「クロウ様は、ランスロット様とガウエイン様に認められた方だ。何か遭ったら只ではおかぬ」

／
パーシヴァルは二人に言い含めると、騎士達と共に石段を登っていった。

一方、王命であれ、納得できない。二人の卿は憤りを隠せないでいた。

「アーサー王の言う事も、我等も分かる。だが幽閉する事もなからう！」

「ランスロット、アーサー王はどうしたのだ？ 昨夜の落雷にしても、高が落雷。貴公の騎士団を出してまで詮索することもなからう？」

二人の卿は、府に落ちないでいた。

「クロウはどうしてるかの・・・」

ガウエイン卿が心配するのも、無理はないとランスロットも思っていた。

「夜になると、牢屋は一段と冷えるからな。風邪でも引かなければよいが」

二人が心配していると、扉越しから声が聞こえた。

「ランスロット様、パーシヴァルです。クロウ様から伝言を託っております」

「入室を許可する、入れ！」

「失礼致します」

パーシヴァルは二人の卿の前に歩み出て、片膝を付く。
ランスロットは心配した顔で、パーシヴァルに問いました。

「クロウの様子はどうか？」

「気丈な方です。牢に送られたと言うのに、お二人に大丈夫だと伝えておいてくれと、託っております」

「そうか・・・」

ガウエインは困った顔をして言う。

「気丈か、頼りないんだか頼りになるのか分からん奴だな。クロウがそう言うなら我等は待つしかあるまい」

「そうだな、暫くは様子見だな。パーシヴァル、クロウの監視を怠るな！」

「ハッ！」

返事をし、パーシヴァルはランスロットの部屋を後にする。

「ガウエイン、我等も寝るか」

その言葉にガウエインも同意する。

「今日は、色々あり過ぎて疲れたわい。特に地下牢にいるクロウのお陰でな」

「確かに、年寄りには荷が重かろう？」

「まだ現役で入られるわ！ 今日体調が悪かったのだ」

ランスロットは冗談交じりにガウエインを弄んでいる。冗談に付き合うガウエインにも、クロウを通して、いつの間にかランスロットとの絆が生まれ始めていた。

「では、ランスロット。ワシは寝るぞ」

「ああ、また明日な、ガウエイン」

ガウエインは、部屋から出て自室に戻って入った。

ランスロットも、ベットへと体を投げ出すと、

「今日は、クロウのお陰で本当に疲れた・・・」

独り言を呟きながらランスロットも、睡魔に誘われ眠りに入ってしまった。

少女と粉雪（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

少女と粉雪

深夜を向かえ地下牢は、先程までとは違う顔を見せる。
余りの寒さにクロウは、目が覚めた。

「地下牢行きを宣告されてから、こうなるのは予想してたけど、想像以上に冷え込むな・・・」

寒さで目が冴えてしまつてクロウは寝付けないでいた。
毛布に包まる様に、横になる。

寒さに震えるクロウの目の前に、光の粒が落ちてくる。
体勢をぐるっと真逆に入れ替えて廊下に目を向ける。

どうやら、地下牢の突き当たりにある、大きな鉄格子の窓から入つて来てる様だった。

蛍の光に似た、光の粒は鉄格子の窓を通り抜け、空中を浮遊している。

「綺麗だなあ・・・それにしても尋常じゃない数だな・・・」

光の粒は、クロウの居る、牢屋の鉄格子をすり抜け、ゆっくりと人の形を形成していく。

クロウは、目の前で何が起きてるのか理解できなかった。

光の粒はやがて、人の姿に変わって行く。

一瞬、眩い光を放つ。クロウは眩しさの余り瞬間的に瞳を閉じた。
そしてゆっくりと開く。

そこには自分と同じ位の年の純白のドレスを纏った、可愛らしい女の子が立っていた。

床まで根を下ろしそうな、真直ぐに伸びる金髪の髪。綺麗に整った眉、高くも低くも無い、鼻筋の通った小さな鼻、唇は厚めで瑞々

しかった。

クロウが特に気になったのは、赤と碧の左右非対称の瞳だった。少女は、こちらを見つめる。

「こんばんわ。クロウ」

「君は、誰？何で俺の名前を知ってるの？もしかして幽霊？」

彼女はクスクスと笑った。

「違うわ。クロウには秘密よ。それに質問の数が多すぎるわ」

クロウは、恥ずかしくなって頬を染める。まるで子供だ。

「じゃあ一つだけ。君の名前を教えてください？」

彼女は、困った顔して恥ずかしそうに答える。

「じゃあ、特別にクロウだけに名前を教えてください」

「私の名前は、ヴェルフィーユ」

「こんばんわ、ヴェルフィーユ」

挨拶を交わして、互いに少しの間、沈黙が流れる。

ヴェルフィーユはクロウの目の前に座り、突然、息が掛かりそうな位、顔を近づける。

「クロウの瞳は、漆黑なのね。でも透き通っていて、とても綺麗」

ヴェルフィーユが、突然近づけて来たので、クロウは驚き頬を真赤に染める、なんとか離れようとする。しかし後ろは完全に壁だった。

「ヴェルフィーユ、少し離れて・・・顔が近い」

「どうして？」

「どうしてって・・・ヴェルフィーユが凄く可愛いから」

ヴェルフィーユは頬を染め、恥ずかしそうに言う。

「クロウ、もしかして、私を口説いてるの？」

クロウは絶句し、高速で首を左右に振る。

「ム！ 何でそんなに、強く否定するのよ！ これでも私凄くもてるんだからね、引く手数多で、困るくらいなんだから！」

ヴェルフィーユは怒ってる様だった。

「ヴェルフィーユ、君は可愛いし、綺麗だとも思う」

ヴェルフィーユは機嫌を直し、恥ずかしそうに頬を染めてる。

「だけど俺には、人を好きになるとか、そう言う感情がわからないんだ」

「どうということなの？」

ヴェルフィーユは不思議そうに見つめてくる。

「言葉そのままだよ。感情が無いに等しいとでも言ったほうが早いかも知れない」

「俺には何も無い、あるのは刀だけだから」

クロウの瞳に影がさすのをヴェルフィーユは見逃さなかった。
ヴェルフィーユはさらに距離を詰める。

クロウは逃げ出そうとした。後ろは壁で身動きが取れないの思
い出す。

「しまった！」

二人の距離は先程より、更に縮まっていた。互いの唇が触れそ
うなほどに。

互いに見つめ合う。

「クロウ怖い？」

「怖い物なんてない」

「嘘。本当は、怖いんでしょ？」

「何が？」

「人と触れ合うのが、怖い癖に強がってる様に見えるわ」

その言葉にクロウは感情を露にする。

「怖くないって言ってるだろ！」

「クロウ、貴方はこのままでは闇に沈む事になるの。それだけは絶対させないわ」

「貴方は、私の運命の人。だからこうして貴方の前に現れたの」

「だからお願い。動かないで静かにして」

ヴェルフィーユは、クロウの額に自分の額を押し当てた。そして目を閉じる。

ヴェルフィーユの口から聞き取れない言語が紡ぎだされる。

「T U B D S O * D H K D D D J K L * J G D D S F H K L * J
I L L K * * *」

言葉を紡ぎ終えた途端、クロウは意識を失った。

／
ヴェルフィーユは宙に浮かび、俯瞰するように湖に降り立つ、水面から浮いた状態でヴェルフィーユは周囲を見渡した。

「此処がクロウの精神世界なの？」

湖を除いてそこは、白色で統一された、見渡す限り何もない世界。

「何もないなんて異常だわ。普通の人なら何かしら世界を構築して広がってるのに・・・」

ヴェルフウィーユは湖を見下ろす。

「一度、入ってしまったからには、クロウを見つけたら帰れないわ」

気合を入れるように両手で自分の頬を叩く。

「きっと、この湖の中にクロウはいる。助けなきゃ」

ヴェルフウィーユは、目を閉じ、そして、静かに湖へと足をつけた。体はゆっくりと水面へと沈んでゆく。

足先から頭まで、水に浸かった感覚に覆われる。そしてヴェルフウィーユはゆっくりと目を開けた。

ヴェルフウィーユは、驚き思わず声にする。

「綺麗。こんなにも水の中が透き通ってるなんて、でも・・・生き物がいないなんて不自然だわ」

「兎に角、潜ってみないと分からないわ、つべこべ言わずやるの。ヴェルフウィーユ」

「そう言い聞かせるとヴェルフウィーユは、体を反転させ水面を蹴る。勢いよく水中を潜ってゆく。その姿は、まるで人魚の様だった。もう、随分と潜っただろうか。一向に、水中の風景は変わらなかった。」

「本当に、クロウがこの湖の中にいるかわかんなくなって来るわね」

水中で立ち往生していると、少し先に、何かが見えた。

ヴェルフィーユは、勢いよく加速すると、やっとの思いでその場所へたどり着く。

内部はドーム状になっていて、空気の膜が張っている様だった。ゆっくりと膜を抜け内部へと降り立つ。

目の前には大きな鉄製の扉が見えた。ヴェルフィーユは近づき、力一杯押してみたが、びくともしなかった。

「もう！ クロウの馬鹿！ こんな重い扉、どうやってあければいいの！ 私だって、他人の精神世界に入るの初めてなんだから！」
ヴェルフィーユは、瞳に涙を浮かべ怒りだした。

突然。涙を浮かべ怒るヴェルフィーユの頭上に、粉雪が降り注ぐ。粉雪は旋風を巻き、雪の塊へと変化していく。雪の塊はやがて女性性の姿へと変貌する。

見たことも無い服を着た女性は、優しい顔でヴェルフィーユに語りかける。

「こんにちわ。ヴェルフィーユちゃん」

ヴェルフィーユは涙を拭った。

「貴女は誰？」

女性は困った顔をしながら優しく答える。

「私はこの子の大切な人の残留思念。貴女が困ってるみたいだから助けに来たの」

「クロウの大切な人？」

「そうね、でも、それは私じゃないんだけど、私でもあるわ」

「そう。クロウの心の中に深く眠る大切な想いのね」

女性は優しく微笑んだ。

「ヴェルフィーユちゃん、この子を助けてあげられる？ 私も長い歳月を懸けて助けようと試みたの。でも、私では助けてあげられないの」

ヴェルフィーユは強く頷いた。

「この先は、酷く過酷な物を見ることになると思うわ。その覚悟はある？」

「精神世界に入ると決めたときから覚悟はできてるわ。クロウを助けないと私も出れないもの」

「それに・・・どんな事でもいいからクロウの事もっと知りたいから・・・」

頬を赤く染めながら初々しく話す。ヴェルフィーユを見て女性は優しく微笑した後、少し残念そうに微笑んだ。

女性は、ヴェルフィーユの手を取ると、扉の前まで歩き出した。胸ポケットから小さな鍵を取り出しと鍵穴に鍵を差込み回した。小さな金属音を立てて、扉が開く音がした。

女性は扉を少し開けてヴェルフィーユの頭を優しく撫で、扉の向こう側へと送り出す。

「ヴェルフィーユちゃん。これからは貴女が、クロウの傍に居てあげてね」

「貴女・・・もしかしてクロウの・・・」

女性は優しく微笑むと、粉雪の様に舞って跡形もなく散っていった。

ヴェルフィーユの足元が崩れ落ちてゆき、闇に吸い込まれてゆく。落ちゆく最中ヴェルフィーユは呟く。

「さよなら、クロウのお母さん」

幸福と喪失（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

幸福と喪失

ヴェルフィーユは目をゆつくりと開ける。木で囲まれた天井が視界に入る。

見たことの無い草が敷き詰められた部屋に寝ていた。

「・・・此処は・・・何処?・・・」

ゆつくりと体を起こすと、突然、男の子が飛びついてきた。

「えっ!」

男の子は、ヴェルフィーユの体に抱きつき嬉しそうに笑う。

「よかった。おねーちゃん目が覚めたんだね!」

そう言うのと脱兎の如く階段を下りて行く。

「おかーさん! おねーちゃんが目覚ましたよー!」

「そう良かったわね」

「おかーさんもおねーちゃんに会ってよ、凄く綺麗なおねーちゃんなんだよ」

「わかったわ。おかーさんも行くから慌てないの」

ヴェルフィーユは狼狽ろっばいした。

「このままじゃ見つかつちゃう！」

何処か隠れるところはないか部屋を見渡すと、紙で作られた扉を見つける。起き上がり扉を開けようとする。

「なんで開かないの・・・どうして？」

迷ってる時間はない、ヴェルフィーユは魔法で扉を通り抜ける。

「もう！　なんて狭いの！　でも此処ならきつと、見つからないわ！」

階段を上がって来る音が聞こえるに連れ、ヴェルフィーユの鼓動は早くなる。

「おねーちゃん！・・・あれ？　いない」

「九郎の自慢のおねーちゃんは何処かな？」

優しく九郎の肩を抱き、微笑む顔の見覚えがあった。
ヴェルフィーユは驚きを隠せなかった。

「あの男の子がクロウなの？　それにクロウのお母さん！」

クロウは、何かに気づき押し入れへと駆け出す。押入れの隙間からヴェルフィーユの髪が零れ落ちていた。

「おねーちゃんみーつけた！」と同時に襖ふすまが開く。
ヴェルフィーユは心の中で呟く。

「クロウの馬鹿あー！」

クロウの手によって押入れは開かれた。

「ほらおかーさん。おねーちゃん居るよ！」

ヴェルフィーユは涙を滲ませていた。

「九郎。お母さんには、見えないわ」

「どうして？」

「そうね。九郎は心が綺麗だから妖精さんが見えるのかもね。大人になると善い事も、悪い事も知ってしまうから、お母さんには見えないのかも知れないわね」

そう言うときクロウに優しく微笑み、頭を撫でる。

クロウは不思議そうな顔で、聞いている。

「九郎には、ちょっと難しすぎたみたいね。すぐ夕飯だからお風呂に入りなさい」

「うん！」

そう言うときクロウのお母さんは階段を降りていった。

ヴェルフィーユは安堵した。そうよね普通見えるわけ無いもの。

見えるクロウのほうがどうかしてるわ。

ヴェルフィーユが押入れから這出ると、クロウが勢い良く抱きついてくる。

「きゃ！」

クロウが抱きついた衝撃で尻餅をつく。

「おねーちゃんは妖精さんなの？」

ヴェルフィーユの胸に顔を埋め、クロウは上目使いでこちらを見上げてくる。

一瞬、凄く可愛いと思ったヴェルフィーユは抱きしめそうになる衝動を必死に堪える。

「そうよ、おねーちゃんは妖精さんなの。でもクロウにはどうして私が見えるの？」

「妖精のおねーちゃん。どうして僕だけ見えておかーさんには見えないの？」

質問を、質問で返されたヴェルフィーユは決めた。逃げようと。

「クロウ、おねーちゃんもそろそろ夕飯だから、妖精の国に帰らないといけないの。助けてくれてありがとう」

「えー！ 帰っちゃうの？」

「ほら。クロウもお風呂に入らないと、ね？」

「うん！」

そう言うとヴェルフィーユは魔法を詠唱する。

「H L D U ; P U N K * * D S E U , W R K P *」

光の粒に姿を変え、空気に溶けていった。
後に残されたクロウは、階段を下りて行った。

「おかーさん、妖精のおねーちゃん帰っちゃった」

「残念、お母さんも見たかったわ。九郎は今からどうするのかな？」

「お風呂に入るー！」

「偉いわね、早く入ってきなさい。ご飯出来るわよ」

ヴェルフィーユは、下から聞こえてくる親子の会話を聞きながら、疑問に思っていた。

「不可視の魔法をかけないと誤魔化せないなんて、クロウの目は一体どういう目をしているの・・・」

「それに、無邪気なクロウを見ると、この後何が起こったのかも気になるわ。このまま様子を見るしかないわね」

ヴェルフィーユは、背中を壁につけ座ると、暫しの休憩を取ることにした。

外は霧が、立ち籠めていた。霧の中から黒いローブを纏った、男とも女とも判らない人物が現れる。

工事現場の電柱に拠りかかり寝ている、会社員風の男性に近づく

と額に人差し指を着け、聞き取れない言葉を発する。

会社員風の男は一瞬、目を見開いた。

ローブを纏った人物は、満足そうに微笑むと、再び霧の中へと隠れて姿はそれっきり見えなくなった。

謎の人物が霧と共に去った後、会社員風の男は、静かに起き上がった。

そして激しく咆哮する。

男は、手元に転がっている鉄パイプを持つと、視点が定まらない空ろな瞳をして、覚束無い足取りで静かに歩き出した。

／

ヴェルフィーユは、異様な雰囲気を感じて目を覚ます。

「何？ 今何か、酷く嫌な感じがしたわ。もしかして・・・クロウ達に何あったんじゃない・・・」

目覚めたヴェルフィーユは、浮遊する様に急いで、階段を降りて行く。

階段を降りて行くと玄関が見えた。

玄関を背に細い廊下を浮遊する様に疾走する。

「クロウ、何処にいるの！」

焦る気持ちを抑え、クロウ達を探していると、右側の部屋から声が聞こえる。

ヴェルフィーユは、扉を通り抜ける。

「今晚から、明日にかけて雨が降る模様です。外出の際には傘を忘れないように気をつけて、お出かけ下さい。では、次のニュース

です」

ヴェルフィーユは、四角い箱の中に居る小人を見て問いたです。

「ねえ、貴女、クロウ達を見なかった!」

焦る表情で、四角い箱に収められた、小人に話かける。

「質問に答えなさい!」

プツン——!

小人は漆黒の闇に消えて行った。

「ちょっと、逃げるなんて卑怯よ!」

ヴェルフィーユが憤慨していると、背後から声が聞こえた。

「もう九郎ったら、テレビを消しなさいってあれ程言ったのに、困った子ね。で、テレビを消し忘れた犯人は何処にいるのかな?」

ヴェルフィーユは呆気に囚われている。

「えっ・・・テレビ? 小人じゃないの?」

ヴェルフィーユは恥ずかしさの余り、俯き加減で頬が桜色に染まる。

「さっささ・・・最初から解かってたわ!」

眩きながら、クロウの母親に目を向ける。

クロウのは母親は、したり顔でこたつに近づくと、これでもか！
と言う具合にこたつ布団をめくった。

「ふふふっ！ 犯人はここね！・・・あら？」

テレビを消し忘れた犯人は、コタツの中で気持ちよく眠っていた。

「もう！ あれ程コタツの中で、寝ないように言ったのに。本当
困った子ね」

クロウの母親は、呆れた貌をしているが、顔の口角は上がっている。

当たり前の様な親子の関係を見て、ヴェルフィーユは安堵の表情
を浮かべ心を落ち着かせた。

クロウ母親は、壁掛け時計に見上げる。

「もう夜の11時なのね」

こたつからクロウを抱き起こすと、クロウを抱き抱え、階段へ向
かい二階に上ってゆく。ヴェルフィーユも後を追うように一緒につ
いていく。

階段を上がり、クロウを畳に寝かせると、押入れから布団を出し
引き始める。クロウを見つめると独り呟いた。

「あの人が、居なくなつて7年も経つのね・・・本当に大きくな
ったわね。私の大切な可愛い宝物」

クロウの母親は、愛おしそうに寝ているクロウ見つめている。

突然、下からガラスの割れる音が聞こえてくる。

クロウの母親とヴェルフィューは、慌てて階段を降り様子を見に行と、そこには、玄関を破壊し、片手に鉄パイプを携えた、空ろな目をした男が立っていた。

「クロス、クロス、クロスクロスクロス！」

呪文の様に唱えながら玄関から二階へ向かい歩きだす。

クロウの母親は急いで、階段を駆け上がる。

大きな物音に、目を覚ましたクロウは母親の元へと駆け寄る。

「おかーさん……」

クロウを抱き寄せ、覚悟を決めた顔で、静かに話し掛ける。

「九郎はいい子だから、お母さんの言う事、何があっても守れるわよね？」

「おかーさん。どうしたの？ 何かあったの？」

「九郎、いい子だから聞いて！ 絶対に押入れから出たら駄目よ！
いいわね！？」

「うん……」

クロウを抱え、押入れへ、急いでクロウを押し込むと男は階段を上がって来て、静かにその姿を現す。

「何か家に御用かしら？ こんな深夜にセールスなら間にあつて
るわ！」

クロウの母親は気丈に立ち向かう。

男は、奇声をあげ咆哮する。

「どうやら、話の通じる相手じゃないみたいね・・・」

ヴェルフィーユは、どうにか助けようと、魔法を詠唱する。

「AKLH*SONG+*JZIBSO*+WUNC*++
ASPR***」

男に向かい魔法を放つ。男を通り抜け魔法は消えていく。

「クロウの過去に起きた事は、どうして変えられないの!? どうして! クロウには干渉できるのに!」

ヴェルフィーユは困惑し、絶望した。唯、黙って見ているしか出来ない自分に。

男は奇声をあげ、鉄パイプを大きく振り上げ、クロウの母親に襲い掛かる。

「こんな事したくないけど、少し痛い目見てもらおうわよ!」

そう言い放つと、クロウの母親は男に向かい突っ込んでいく。

男が鉄パイプを振り下ろす、僅かな隙を突いて、一瞬で間合いを詰めると、男の顎を掌低で真上に打ち抜く。

異質な音と共に、男の顎は砕け、歯が飛び散る。

男は仰け反り、ゆっくりと、クロウの母親へと向き直す。振り下ろした鉄パイプを持ち直すと、片手でクロウの母親の首を掴み取り、軽々持ち上げた。

「うっ！　なんて・・・怪力なの・・・もうこれは人間の力じゃないっ」

クロウの母親を、壁向かい投げつける。壁に叩きつけられ崩れ落ちる。

「どう言う事?!　普通なら起ってられないわよ・・・」

その光景を襖の隙から見ていたクロウは、母親を助けようと出て行こうとする。それに気づいたクロウの母親は、悶え苦しみながら、クロウを凝視する。

?絶対に出てきては駄目っ!九郎!?

残酷なまでに瞳は告げていた。

ヴェルフィーユは、母親の視線に気づくと、素早く襖を通り抜け、クロウを抱き寄せた。

クロウの背後に周ると包み込む様に両目を覆い隠す。

「クロウ、見ては駄目!!」

男はゆっくりと母親に近づくと、力一杯、鉄パイプを叩き付けると無惨にも男の手から、幾度も鉄パイプが振り下ろされる。

血が飛び散る音、骨が碎ける音を聞きながら、幼いクロウに分かることは、母親が、悲鳴一つ漏らす事なく死んだと言う事だった。

それは母親の自分への精一杯の思いやりだったのも分かった。クロウの母親が息絶えたのと同時に、男も糸が切れた人形のように、その場に倒れ込んだ。

ヴェルフィーユは、クロウを襖から向き直し見ると、そこには以

前のクロウは居なかった。

「して・・・やる・・・ころ・・・して・・・やる・・・いつか絶対に僕の手で・・・殺してやる・・・」

空ろな瞳でヴェルフィーユを見上げる、瞳にはもう何も映ってなかった。

溜らずヴェルフィーユは、クロウを抱きしめると頬から涙を伝わせる。

「ごめん・・・なさい・・・何もしてあげられなくてごめんなさい・・・！」

クロウを抱きしめるヴェルフィーユは、突然、記憶の狭間から現れた、緑の手により狭間へと連れ去られた。

内包する闇（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

内包する闇

惨劇の事件から10年と言う歳月が流れていた。幼い無力な男の子は、青年へと成長していた。

青年は、あの痛ましい出来事を、一度として忘れてはいなかった。寧ろ、あの出来事を糧に生きてきたと言っても過言ではないだろう。事件の後、青年は母方の祖父に預けられて育った。

当初、誰とも話さない少年を、祖父は厳しく育て上げた。ある時は真冬に外へ放り出し、井戸から汲んで来た冷水を浴びせたり、竹刀で叩いたりしてどうにか言う事を聞かせた。

抜け殻の様な少年を、見かねた祖父は自分の流派である居合を少年に教え込む事にした。

少年は、居合を習い始めてからと言うもの、一度として稽古を休む事は無かったのだ。自ら進んで稽古に明け暮れては、毎日深夜まで木刀を振り続けた。次日が休みならば、学校から帰宅すると、すぐに着替をすませ、明け方まで一心不乱に木刀を振り続けた。例えば雨の日や、台風の日で遭ろうとも絶対に休むと言う事はしなかったのだ。

常軌を逸した稽古の末、元来、青年が持っていた天賦の才を開花させる事になった。才能が開花すると青年は、祖父に実践での訓練を頼み込んだ。真剣での実践は危険だと判断した祖父は、条件を出す事にした。

居合大会に出る事を条件に、真剣での実践を許可したのだ。青年は二つ返事で承諾すると、居合大会へと進んで参加した。気が付けば、その道で青年を知らない人はいない位になっていた。

青年に取って大会で優勝する事は意味のない物となっていた。居合大会への参加、それは、復讐を成し遂げる為の通るべき道でしかなかったからだ。

一つの目的を達成するため、青年は己の全てを刀に捧げた。

どんな時も、青年の心は、平穏を取り戻す事はなかった。青年の心には、常にあの晩の出来事が渦巻いていたからだだった。

「母さん・・・必ず、母さんを殺した奴をこの手で裁いて見せるから・・・」

青年はそう呟くと、祖父の家を出て学校に向かい歩き出す。いつもの見慣れた通学路。

周囲は、生徒の掛け声で賑やかに賑わっている、そんな事を気にも止めずに淡々と学校へ向かう。

学校と言う場所に関して言えば、青年は全く興味が無かった。ただ祖父が行けと言うので仕方なく行っていただけだった。青年からすれば、寧ろ、学校に使う時間を実践練習に使いたかったのだ。

それだけ青年にとって、学校なんてどうでもよかったのだ。

学校の門を潜り、下駄箱へ向かう。

下駄箱を開けるとそこには、いつもの様に何通かの手紙が入っていた。

「毎度の事とは言え、いい加減にして欲しいな・・・色恋沙汰には興味が無いんだ」

青年はそう呟くと、手紙を持って教室へと向かう。

教室に入ると、真っ先にする事は、ゴミ箱の前に向かう事だった。そんな青年を見てか、皆好い印象はなかった。青年は学校で孤立していた。

誰とも話す事もなく、誰からも理解されない。青年にとってそれは当たり前前の事だったのだ。

いつしか生徒の間に噂が流れた。

「面倒なことに巻き込まれたくないなら、綾瀬には近づくな」

生徒達の間ではすでに暗黙の了解になっていた。
午後の授業が終わり、青年は屋上に呼び出された。
屋上に行くと毎度の様に、不良達が青年を囲みこむ。

「おい！綾瀬、テメエ調子に乗ってんじゃねーよ！俺の妹の手紙捨てたんだってなあ！」

「手紙？ ああ。下駄箱に入ってた手紙か、読まずに捨てたけど何か問題でもあるの？ いつもの事だろ？」

「テメエ・・・俺の妹の気持ちを考えた事あんのか？ 今日こそは勘弁しねえ！」

「妹の気持ち？ 幹久の後ろにいる妹の事？ 用があるなら直接言ってくればいいじゃないか？」

幹久の妹の姿は不良達に紛れて確認できなかった。

「それができないのが女ってもんだろが！ お前は人の気持ちがわからねえのか？ あ？」

「興味ないね。もういい？ 用がないなら帰るけど、あるなら早くしてくれないか？」

不良達は、完全に頭に来ていた様子だった。

「綾瀬、今回ばかりは頭に來たぜ！ ぶっ殺してやる！」

そう言うとき幹久は、ポケットからナイフを取り出し青年に突きつ

ける。

「俺を殺すのか？ 君が？ 無理だよ。人を殺すのには覚悟がいる」

「うるせえー！」
ナイフを持って襲い掛かる、幹久の腕を掴み、力一杯握り込む。

「いつってええ！ 放せ！ コラ！」

「だから言っただろう？ 君じゃ俺を殺せないって、どうして解らないんだよ」

「人の命を奪うって事がどれだけ、重いことか解ってる？ 簡単に出来る事じゃないんだよ！」

そういうと青年は踵かかとを返し、教室へ向かおうと方向を変える。

幹久達は、背後から一斉に襲い掛かる。

次の瞬間、彼等は地面に倒れていた。

倒れこんだ幹久達は呻き声を上げて苦しんでいた。

「挑発したのはいいけど、呆気なさ過ぎて訓練にもならないな・・・」

そういうと青年は階段を降りて行こうとした。急に後ろから呼び止められる。

「綾瀬先輩！ あの時・・・そのですね・・・実は前から先輩の事が好きだったんです！ 私と付き合ってもらえませんか！」

声の主は可愛らしい女の子だった。

「ごめんね。君の気持ちには答える事ができないんだ、こんな俺の事好きになってくれてありがたいんだけど・・・」

「先輩、どうしてですか？ 他に好きな人がいるからですか？
いるなら教えてください。私・・・先輩の事知りたいんです」

青年はゆつくりと女の子に近づくと耳元で囁く。

「俺の母親。十年前、殺人鬼に殺されたんだよ。俺は母親が殺される所を目の前で見ちゃったんだ。それからずっと母さんを殺した奴を探してる。だから・・・無理なんだよ。もう辞める事はできないから」

話を聞いた女の子はショックで声が出ない様子だった。

「酷い事言っでごめん。幹久が言った事は良く解ってる。本当、妹思いのお兄さんだね。こんな真直ぐな奴そういないよ。起きたら刃物は止めとけて伝えてくれるかい？ 俺の様になったら戻れなくなるからさ」

そう女の子に託けると青年は階段を降りていった。残された女の子は、唯泣く事しか出来なかった。青年振られた事にではなく、冷たい態度ではあるけれど、他人を気遣う優しい心の持ち主。過剰なまで自分を責めて生きる青年を思うと涙が止まらなかったのだ。

／
青年は学校の正門を出て足早に家路に着こうとしていた。何かを

思い出したかのようにピタリと足を止める。ああ。そう言えば今日は新調してた武道着が出来上がってる日だったなあと呟いて踵を返す。

歩いてきた道を逆に辿りながら駅の方へ向かう。

駅へ向かう途中、屋上であつた幹久の妹とすれ違った。彼女は青年を見るなり、今にも泣き出しそうな瞳をし顔を伏せて駆けていった。

「随分と嫌われた物だなあ。近寄らなくなっていていいか・・・」

そして、何も見なかった様な顔をして駅へと歩みを進める。

駅に着くと学生やサラリーマン、OL等で混雑していた。青年は人込みを避けるように駅を通り抜け、ビルとビルの隙間の路地に足を踏み入れる。

新幹線が、頭上を通過する高架下は街の不良達の溜まり場となっていた。

知らずに足を踏み入れたのだろうか？

若い女性は、不良達に追いかけているようだった。

女性は息を切らしながら、こちらに向かって駆け寄ってくる。

「助けて・・・お願いだから助けて！」

その顔からは、血の気が引き、蒼白く氷ついていた。

不良達は、女性に追いつくとまるで壊れた玩具のように笑う――。

「残念でした！ お姉さんは俺達と今から楽しいことする事が決定しちゃった！」

女性は、不良達に捕まり、路地裏へとその姿を消してゆく。

リーダー格の男が近づいてきて、青年を上から下まで舐める様に観察した後、寧猛に嗤う。

「お前も、見たからには同罪だな。ふーん、結構な美少年君だな。あっちの人に人気が出そうだ」

まるで子供が新しい玩具を、買ってもらったようにはしゃぐ、その姿は一般人ならば、戦慄を覚えただろうか。

だが青年にはこいつらの、異常さはまがい物にしか見えなかった。青年が黙って見てるとリーダー格の男は、舌打ちをし数人仲間を呼びつけた。

「普通、ビビッて土下座やら有り金出して、跪いて許しを乞うもんだけどなあ。お前の眼はよ、俺と同類の眼してやがるのに、自分は特別みたいな眼しやがって、気にいらねえんだよ！」

あっと言う間に青年は、四人に囲まれていた。

「少し、お仕置が必要だな！　なあそう思うだろ、お前等もさあ？」

リーダー格の男の問いかけに、仲間も嬉しそうにケタケタと嗤う。一瞬、寒気がした。仲間の一人が、青年の背後からナイフで斬りつけてきた。

青年は軽く受け流すと相手の腕を掴み、力一杯捻り投げる。投げられた仲間は手首を押さえ、転がり泣き叫ぶ。

「腕があああああ！　俺の手首折れてるう！！」

もがき苦しむ仲間を見てか、数人の顔が硬直する。

「覚悟も無く刃物を持つ奴は、簡単にメッキが剥がれるな。そういう物を持つって事は、自分の命も天秤に賭けるって事だと理解してんのか」

「こいつ・・・イカレテやがる・・・」

リーダー格の男を除いて、囲んでいた不良達は、畏怖の眼で青年を見つめ逃げ出した。

「チッ！ 腰貫け共が！ お前の言う通り、半端な奴に人殺しは無理だろうな。でも俺を連中と一緒にしてもらうと困るなあ。生憎、俺はもう経験済みだ！！」

リーダー格の男は、自慢そうに嗤うと臨戦態勢に入った。
そのスタイルを見て青年は言い切る。

「ボクサー崩れか・・・」

「ご明察！それから俺は、気が付けば、此処にいたってわけ！」

「事故で誤って人を殺したお前と一緒にするな。お前は逃げ出しただけだろう」

「知った風な口をほざくな！お前、もういいから死ね！」

リーダー格の男は、間合いを計る。

次の瞬間、男の左手からジャブが繰りだされる。

青年は手の甲でジャブを捌くと、男は、薄い笑みを浮かべ、即座に青年の顔面へ目掛け、親指を突き出した右ストレートを放った。
が、男の放った右ストレートは空を切る。

「！！」

男が右ストレートを放った瞬間、体ごと男の間合いに入り込み、体を沈めると下から軽く体重を乗せ掌低で顎を打ち抜いた。

男が気が付いた時にはもう遅かった。体は宙に浮き、糸が切れた様にその場に沈み込む。男が沈み込んだ場所には鮮血で、小さな水溜りが出来上がっていく。

「ご丁寧にサミング付きか。気が付いたら前後の記憶は無いだろうけど、暫く寝てろ」

女性が消えた、路地裏へ急いで走り出す。細い丁字型の路地裏を右に曲がると、やがて、突き当たりにぶつかった。

そこは死角になっていて人目につかない場所だった。

その隅に、数人の男達に囲まれ女性は居た。

見れば、服を破かれ何箇所か、肌が露出していた。男達は女性に馬乗りになり四肢を押さえつけていた。

すでに女性はに空ろな瞳で、空を見上げている。

その光景を眼の辺りににした青年は、今まで必死に押さえつけていた自分の中に潜む、黒い殺意に飲み込まれた。

理性と言う枷を忘れた殺意は、青年を闇へと引きずり込んだ。

馬乗りになった男へと、疾走すると背後から頭部に向けて中段蹴りを食らわす。

蹴られた男は吹き飛ばされ、ベシャツ——と音を立て壁へ張り付くように崩れ落ちる。

最早、青年には相手の生死など関係なかった。

異変に気づいた男達は、次々とナイフや金属バットを持ち出し、青年に襲い掛かる。

男の一人が青年の胸部に向かってナイフを突き刺す。青年は素早

く腰を少し下ろすと、左手で腕を掴み、捻ね上げると、右手で男の顎を真横に打ち抜く。

ナイフの男は吹き飛ばされるように転がり込むと微動だにしなくなった。

背後にいた男は、即座に金属バットを青年の頭へ打ち下ろす。

青年は一瞬で、右足を軸に左足を下げると、体を位置を素早く反転させる。金属バットは硬いアスファルトに叩きつけられた。

金属音が空気を伝い耳の奥まで響き渡る。

青年は瞬時に跳びあがると、相手の側頭部を目掛け、右足を振り下ろすと異質な鈍い音がした。

男はそのまま、眼から鮮血を流し崩れ落ちた。

青年を中心とした境界線の外側は、血の海と化していた・・・やがて女性の瞳に、光が戻る。

周囲を見渡すと、先程まで自分を押さえつけていた男達が、鮮血に染まり倒れていた。

青年は、静かに女性に歩み寄ろうとした。カチカチと歯を震わせ、女性を青年を拒絶すると、

「来ないで・・・!!!!」

鮮血の水溜りの中、青年は足を止める。

ピシャリッ！——

青年は初めて気が付いた。自分の足元が血の湖になっている事に。女性が、恐怖するのもおかしくはなかった。

そこに居たのは先程までの青年ではなく、どこか殺人鬼の雰囲気漂よわせる・・・何かがいた。

女性の表情を視て。

正気を取り戻した青年は、静かに女性に近づくと上着を脱ぎ、露

出した肌に学生服を纏わせた。

女性は、恐怖で凍り付いていた・・・

「同類か・・・」

一言呟くと、青年はその場を後にした。

慈悲と報復（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

慈悲と報復

その日の夕方、幹久は電話越しに妹に小言を言われていた。

「お兄ちゃん、本当に解ってるの？ 綾瀬先輩の事、悪く思わないですよ！」

「先輩は、お兄ちゃんの事を思ってたんだからね！ それに私、お兄ちゃんに綾瀬先輩に暴力振るってなんて頼んでないんだから！ 解ってる？」

「ああ、解ってるって！ こっちも忙しいだよ！ もう切るからな？」

電話を切ると、幹久は無造作に携帯を上着のポケットにしまい込む。

口を開けば綾瀬、綾瀬と幹久は腹が立っていた。

「くそ！ 綾瀬の野郎！ 妹に心配掛けさすなよ！」

駅前を歩きながら、いつもの様に路地裏を奥に入っていくと、女性が生が壁の隅に持たれかかり震えていた。

幹久は何が起きたか理解できなかった。顔なじみの奴等が、血塗れで倒れていたからだった。

「おい！ しっかりしろ！ 生きてっか？」

その声に倒れていた奴等は何とか返事を返す。

「その声は・・・幹久か・・・俺等生きてる？」

「ああ・・・まあ骨は逝っちまってるかもな・・・それより何があつたんだよ！」

「・・・お前と同じ高校の・・・制服着た奴が、俺らをこういう風にしたんだよ・・・」

「なんでだよ！」

「俺等がそのねーちゃんと楽しもうとしてたらこうなった・・・アイツは完全に逝っちまってる！」

「馬鹿か？ お前等何してんだよ！俺でも怒るぞ！ ちょっと待ってろ。救急車すぐ呼ぶからよ！」

幹久は電話を取り出し急いで119番に電話掛ける。

「こちら119番。事件ですか？ 事故ですか？」

「ああ、事故。急いで宮寺駅の新幹線が通ってる高架下まで来てもらえないっすか」

「了解、至急救急車を向かわせます」

幹久は、電話を切ると、女性が羽織ってる学生服に目がいく、女性に近づき話しかける。

「ねーちゃん、少し聞きたいんだけど、この上着着てた奴。どんな奴だった？」

女性は、幹久に対して脅えてるようだった。女性の気持ちを察して幹久は言葉を掛ける。

「安心しろよ、こいつらみたいにあんたをどうにかしようなんて全然ねーからよ」

その言葉に安心したのか、女性は幹久に事情を話し始めた。

／

「へえ。そう言う事か、まあこいつ等が一番わりーわな、でもねーちゃんも悪いんだぜ。この辺りはな、地元の奴なら絶対近寄らない場所なんだからよ」

「しかし、このまま行くと面倒な事になっちまうわなあ・・・どうすっかな？」

「ねーちゃん此処で見たことは全部忘れちまいなよ。面倒事に巻き込まれるの嫌だろう？」

そういうと女性は、黙って頷く。

「じゃあよ、今すぐ此処から離れろ。と言ってもその格好じゃな・・・」

幹久は再び電話を取り出し、急いで知り合いに電話を掛ける。

「ああ、俺っス。事情説明してる暇ないんで、女物の服すぐ持って来てもらえます?」

程なくして一人の女性が鞆を携えやってきた。

「幹久。あんたに頼まれた服持って来たけど、こりやどうなってるんだい?」

「すいません、真菜さん。実は、こいつ等がその女性に暴行してたらしんですけど、返り討ちに遭っちゃったみたいで。面倒な事になる前に女性だけ逃がそうと思ってね」

女性は呆れたような顔をして、倒れてる連中を、一瞥する。

「当然の報いだね。寧ろこいつ等やった相手がどんな奴かは興味あるわ」

そう言うとき真菜と言う女性は、幹久に鞆を投げて渡し、帰ろうとする。

「真菜さん、今度こいつ等返り討ちにした奴、紹介しますよ。真菜さん気に入ると思いますよ?」

そう言うとき真菜は振り返り、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「本当に! 美少年?」

幹久は、顔を引きつらせる。

「ええ・・・まあ。ムカツク奴っすけど・・・その代わりと言っちゃなんすけど、この女性と一緒に目抜き通りまで出てもらえます？これから救急車来るんで」

真菜は二つ返事で承知すると幹久に向こう向いてなと眼で合図する。暫くすると女性は着替えが終わったようだった。

「おし！ 幹久！ 後頼んだよ。私はこの子を目抜き通りまで送るからさ。例の約束忘れんなよ！ ああ！ それと表でうちの組の馬鹿が倒れてたから下っ端に命令して、車で組まで運ばせといたから安心しな」

そう言うのと真菜は喜び勇み、女性を連れ大通りに出て行った。

「真菜さんこの状況で嬉しそうだな。どういう神経してんだよ・・・」

「おい！ お前等まだ生きてっか？」

「・・・おう・・・幹久・・・」

「なんだよ。気絶してたのか情けねーな！ まあいいや、救急車来るまで暫く寝てろよ。あとよ、何聞かれても同士討ちって答えとけよ！ 真菜さん命令だかな！」

「おう・・・」

幹久は女性が置いていった学生服に眼をやる。学生服の裏には『綾瀬』と書いてあった。

「戻れなくなる・・・そう言うことか。あの馬鹿野郎！ 妹が泣

いたらどうすんだよ！」

幹久がぼやいていると、表からサイレンの音が聞こえる。

「もう着やがったか。まあいい頃合いだな」

幹久は自分の着ている制服の下に、綾瀬の制服を着込み、上から自分の制服を着て覆い隠した。

「こいつ、本当に小っせいなあ。加えてあの顔じゃ妹じゃなくても惚れるわな」

救急車が到着すると、次々と怪我人が担架で運ばれていく。そのうち警察も来て、対応で幹久は忙しくなった。

夕闇が迫る頃、雑踏を覚束無い足取りで街を当てもなく徘徊する青年は、駅の方角に向かう救急車を見かけた。鼓動が早くなる。隠れるように、路地裏へと歩みを進めるとフェンスにもたれ掛かり、崩れ落ちる。

「俺は・・・彼等に・・・何をした・・・？」

青年は混乱していた。

青年がはつきり覚えている事は、女性が殺された母親と重なって見えた事だった。

あの光景を目の当りにした青年は、殺意に自我が飲み込まれて行った感触を思い出す。

恐ろしくなって、歯がカチカチ、カチカチ、と鳴る。

いつまた正気を失うか解らない自分が、怖くて仕方なかった。

青年は、あの路地裏の事も、理解していた。自分の中に内在する、抑えきれない衝動を、抑え込む為に、敢えて危険な場所を足を踏み入れていたのだ。少しでも渴きを潤す為に……

「感情を殺せ！……じゃないと潰れるのはお前だ！！」

そう自分に言い聞かせるとフェンスからゆっくりと起き上がる。そしてまた覚束無い足取りで、暗闇に点々と螢火を灯す街へと向かい歩き出した。

まるで、何かを求めるように街を彷徨う。青年の瞳にはすでに光がなく、死人の様な眼をしていた。

通りを行き交う群集の中、青年は大型家電スーパーの前で歩みを止める。

陳列されたテレビからは、夕方のニュースが流れていた。

雑踏の中、足を止めた青年は、ニュースが終わるまでテレビを呆と眺めていた。

「もう、戻れないか……いや元から戻る場所なんて俺にはなかったんだ……あの時からずっと」

感情の無い貌をし、静かに歩き出す。

もう何処へ向かうのか自分でも解らなかった……

それから青年は何処をどうあるいたのか覚えていない。

気が付けば、漆黒の闇に包まれた閑静な住宅街を歩いていた。

そして、意識を失い倒れた————

／
次に意識を取り戻したとき、ダンボールで出来た簡素なベットに

寝ていた。

周辺を見渡すと、河川敷だった。外は雨が容赦なく打ち付けていた。

濡れない所をみると、どうやら高架下したの样だった。

「目が覚めたかい？」

薄汚い男が話しかけてきた。風貌から察するにホームレスだった。

「あなたが、俺を助けてくれたんですか？」

「ああ、驚いたよ。道路の真ん中で倒れてたからね・・・」

そう言う男は焚き火に、拾ってきた小枝に投げ入れる。

「何か事情があるんだろうが、帰れる所があるのなら早く帰ったほうがいい・・・」

その言葉に、青年は言葉が出ない。

「・・・・・・・・」

薄汚れた男は、小枝を投げ入れると静かに語りだした。

「こんな話がある、昔一人の男が、酒に酔って殺人を犯した話だ・
・酒に酔った男は、若い女性を鉄パイプで殺害した。それから刑務所に送られた。刑務所を出所した男が、その後知った事は、自分の家族が世間やマスコミ、親類縁者から蔑まれた後、自殺した事だった・・・」

「男は、当然の報いだと思った。人の命を奪ってしまったのだから……だが家族を巻き込んでしまった事、被害者の家族にも決して忘れる事のできない傷を負わせてしまった事を考えると男は死ねなかった」

「その後、男は女性に男の子がいた事を知った……その後、男はその男の子を捜した……」

青年は、感情を押し殺し問いただす。

「その男は何処にいる……」

「君の目の前にいる」

青年は押し殺した感情を解き放つと薄汚れた男に飛び掛った。

「お前が母さんを殺したああ!! お前さえ居なければ……!!」
「！」

倒れこんだ男の襟を掴み、顔面を殴打する。そこには一匹の獣がいた。

幾度も、幾度も、叩きつける……

「殺してやるっ!!!!」

薄汚れた男は、夥しい（おびただしい）血を流し、意識が無かった。

青年が止めを刺そうと渾身の一撃を放つ刹那――
顔面に衝撃を受けて青年は転がっていく。

「何とか間にあったかの・・・この馬鹿者が!!」

番傘を差して歩いてきた人物は、薄汚れた男を抱え上げ怪我の具合を見る。

「まあ何箇所か骨折れてるが命には問題はなからうて。最後に一撃を貰ってたら死んでたじゃろうがな・・・」

静かに体を起こすと、青年は荒らしく声をあげる。

「九郎、いい加減にせんか！ 事件の事はもう終わった事じゃ、早く忘れい!!」

「邪魔するな!! そいつは俺が殺すって決めたんだ！ 邪魔するなら爺さんでも許さねえ!」

そう言う青年は祖父に殴りかかる。

祖父は、青年の拳を右手で円を描く様に払い上げる、体を崩された青年の顎を左手で真横に打ち抜くと瞬時に左手を引き、腰を下ろし、右手で顎を真上に打ち抜いた、そして浮き上がった側頭部に回し蹴りを叩き込んだ。

「やれやれ・・・怒りで戦い方すら忘れなんだわ」

青年はグシャリと音を立て地面転がり、這いつくばる。

「爺いさん・・・そいつは・・・俺が殺す・・・んだ・・・」

「九郎・・・もういいんじゃない・・・起つな・・・」

「嫌だ・・・そいつは俺が・・・！」

「九郎！　今のお前の姿を見て雪子はどう思うかわからんか！！」

「・・・」

「悲しいのはお前だけじゃない！　儂も一度として忘れた事はない！　そして九郎、お前が殺そうとした男もまた苦しいじゃ・・・心優しいお前が一番よくわかつとうろー！！」

「爺さんは・・・そいつを・・・許せるのか？・・・俺は・・・そいつを殺したい・・・」

青年は、這いながら体を起こすとゆっくりと構える。

「小さな時から根性だけは、一流じゃな。全く面倒な事じゃ」

祖父はそう言うと、青年に襲い掛かった。

青年は、祖父の左拳を右手で払うと瞬時に五指を腕に掛ける、そのまま腕を捻り上げる、祖父はその場で一回転して捌くと左手を素早く引き抜く。

「九郎。儂の腕を折る気じゃったの。そんなにこの男が憎いか？」

「当たり前だ！　その為なら・・・」

「儂がお前に武道を教えたのはな、精神を養ってほしかったからじゃ。人を殺す様に教えたつもりは毛頭ないんじゃがな」

「・・・」

「お前の中には闇が潜んでおるの、暫くそいつと向き合ってみるとええじゃろう」

そういうと祖父は踵を返し歩きだす。羽織から電話を取り出すと救急車を呼んだ様だった。

「爺さん・・・まだ話は終わって・・・ない！」

青年は疾走すると背を向けた、祖父に向かって中段蹴りを放った。祖父は右手で足を掴み取り脇に抱え込む、遠心力を乗せた左手で青年の顔に裏拳を放った。瞬時に抱え込んだ足を離す。

青年は顔面を殴られた勢いで転がり込んだ。

倒れた青年に祖父は語りかける。

「九郎、毎年、事件の日に雪子の墓前に花を添えてくれてるのはその男じゃよ。お盆もそうじゃ、墓前で涙を流しながらずっと謝る姿を、僕はこの目でみてきたんじゃ、それに比べてお前はどうかじゃ？墓前にも顔を出さず、復讐の為に、毎日明け方まで稽古しては飯も食わずに寝るだけじゃろう」

「俺は、母さんの為に！」

祖父は呆れた顔をして言い放つ。

「九郎は勘違いしとるの？ 雪子がいつそんな事頼んだ？」

「・・・・・・・・」

「兎に角、一旦この男の話を聞いて見る事じゃな、そこから見え

て来る物もあろう」

祖父はそう告げると、到着した救急車に男の付き添いとして乗り込む。

残された青年は、母親が亡くなって以来、その晩初めて泣き叫んだ。

実休光忠と母の残り香（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

実休光忠と母の残り香

青年が、母親を失ってから初めて泣いた夜から、数日がたった。

あの日の晩から刀を振るう事を止め、右手に刀を握り、壁にもたれ掛かりながら、膝を抱え、自室に籠っていた。

「爺さんが止めてくれなかったら、きっと俺はアイツを殺していた。アイツは無抵抗だった。俺が母さんの子だと知っていたんだ・・・」

青年は刀を見つめながら、祖父が言ったことを口にする。

「俺に武道を教えたのは、人殺しをさせる為でなく、精神を養って貰う為か・・・」

青年はその言葉を、口にしながら呟く。

「アイツを許せない、今でもそう思う。だけどアイツは母さんの墓前に毎年、花を供えて墓前で泣いて謝っていた。アイツにだって家族がいたんだ。俺は母さんが死んでから、一度も墓に出向いたことは無かった。唯、復讐の為にひたすら技術を磨くだけで、結局、目的の為に武術を利用したんだ・・・」

「俺が本当に許せなかったのは、無力な俺自身だったのかも知れない・・・他人と接触を拒んできたのも自分が嫌で・・・仕方なかったんだ。母さんの死から逃げて、爺さんの武道を踏みにじり、他人を傷つけて・・・逃げていたのは結局俺か・・・最低だな・・・」

青年はそう呟くと刀を壁に投げつけた。刀は重い金属音を響かせて壁から転がり落ちた。

「アイツを殺してたら、きっとアイツと同じ苦しみを背負ってた。爺さんはそれを俺にさせまいと止めにきたんだ。・・・きっと母さんがそんな事望んでないと解ってたから・・・間違ってたのは、俺の方だったんだ・・・」

そう言うのと静かに立ち上がり障子を開け、部屋を出る。

青年は、コの字型の長い縁側を歩き出すと、居間へと向かう。居間にたどり着くと中から話し声が聞こえてきた。

「爺さん、話がある・・・」

青年の声を聞き、祖父は青年を招き寄せる。

「丁度いい所へきたな。九郎、中に入ってきてなさい」

障子を開けると青年の眼に見知らぬ顔と馴染みのある顔が眼にはいつてきた。

「幹久・・・どうして此処にいるんだよ・・・」

幹久は、困惑した顔で青年をみた。

祖父は青年に座れと指示した後、見知らぬ顔の女性と話をしているようだった。

「うちの孫がお宅の、若い衆に手を出したそうで、本当に申し訳ない。手前にできる事なら出来る範囲で差せていただきたい」

若い女性は祖父に向かい話し掛ける。

「お気持ちはありがたいのですが、今回の一件に関して、私共は、責任を取ってもらうつもりは毛頭ありません。非はこちらにありますし、うちでも扱いに困ってた輩なので、お灸を添えて貰っていい仕置きになりましたわ」

祖父は困惑した顔で話を続ける。

「しかし、治療費などもお宅に振りかかるのは納得しづらい。何か出来る事があるのなら言って頂きたい」

若い女性は、祖父に向かい話を続ける。

「高名な綾瀬家当主の方に、そこまでさせる訳にはいきませんわ。唯、うちの輩を叩きのめした人物にお会いしたくて参上した次第ですわ」

「・・・だそうだ。九郎挨拶せぬか」

祖父の言葉に若い女性がこちらに向き直す。背中まで届く長い黒髪に、大きな瞳、凜とした佇まいを醸し出している。その女性の眼は、青年には何処か嬉しそうに見えた。

「只今、ご紹介に預かりました。綾瀬九郎と申します。今回の不始末、誠に申し訳ありません・・・」

女性はうっとりした顔で青年に話し掛ける。

「宮路 真菜と申します。ねえ九郎君、お姉さんと立ち合っても

らえないかしら。それで今回の事は両成敗って事でお願いしたいのだけど」

青年が祖父に眼をやると、祖父は頷いた。

「解りました。では道場の方へ移動して頂きますか・・・」

祖父は門弟を呼び出し案内するように命じた。

居間に祖父を残し、門弟の後ろに付き居間を出て縁側を歩き道場に足を向ける。

道場に向かう途中、後ろからひそひそと、話し声が聞こえた。どうやら幹久と真菜と言う人は話してる様子だった。

「ちよつと、幹久。九郎君凄く可愛いじゃない！ 幹久・・・ゾクゾクしてきたわ」

幹久は冷たい視線で真菜を見ると呆れた顔をする。

「真菜さん、綾瀬は強いツスよ・・・真菜さんでも勝てないかも」

幹久の言葉に真菜は眼を輝かせる。

「強ければ強いほどいいわ！ 屈服させがいがあるもの！ あんな可愛い子が辛そうな貌してるの想像しただけで凄く・・・興奮しちゃう！」

青年は後ろが騒がしいと思いつながら、渡り廊下を抜け、道場にたどり着く。

「道場はこちらです、どうぞ中へ」

門弟が道場の扉を開けると一様に道場へと歩みを進める。
門弟は真菜に近づき案内する。

「奥に着替える場所があるので、そちらをお使い下さい」

「必要ないわ、すぐ終わらせるから」

門弟にそう告げると、壁に掛けてある木刀を二本取り青年へ一本放り投げた。

道場の隅にポツンと残された幹久は溜息をつく。

「何だってこんな事に付き合わないといけないんだよ・・・」

「九郎君、準備は出来てるわ、早くしましょ！」

門弟を挟んで、互いに中央に歩みを進める。

そして火蓋は切って落とされた。

「勝敗は先に二本先取した者となります。両者、互いに礼！ 始め！」

門弟の掛け声が道場内に響き渡る。先陣を切ったのは真菜だった。
真菜は下段に構えると瞬時に疾走し、青年に向かい切り上げる。

「無拍子か、相当な物だな・・・」

青年は瞬時に体を反り交わすと、右足を軸に反転し下段から真菜の首元に木刀を突きつけた。

「一本！」

真菜は驚きを隠せなかった、真菜とて素人ではなかったからだった。

「なんて子なの・・・紙一重で捌くなんて・・・それでも私、剣道、十段よ！」

内心そう思いながらも次こそは、取ってみせると躍起になっていた。

互いに中央に戻り、両者、正眼に構えると切先の攻防を繰り広げながらも先に仕掛けたのは、青年の方だった。

縫い込む様に真菜の木刀を伝い青年の木刀は真菜の胸に突き刺さる手前で止められた。

「一本！　それまで！　勝者、綾瀬師範代！」

真菜は愕然としていた・・・

かつて神童と言われた真菜でさえ青年に敵わなかったのだ。

「驚きました・・・その若さで相当な腕前ですね」

「正直に話すとね私、剣道十段なの。剣道最高位の私をあしらうなんて九郎君、居合何段なの？」

「初段です」

「初段！？　その強さで初段ってどういうつもりかしら！　實力だけなら範士八段は優に超えてるわよ！」

「大会では祖父の影響もあって特例で審査して頂いてるんです。段位を取るつもりは始めから毛頭ないんです。優勝もしてますがマスコミ各社には、祖父が圧力掛けてるので一般には知られて無いんです」

「本当は貴方を叩きのめすつもりできたんだけど、うちの組員が容易にやられた理由がわかったわ。正に天賦の才ね」

「そんな格好の良い物じゃありませんよ・・・」

「どうして？」

「・・・・・・・・」

「言いたくないならいいわ。兎に角、完敗よ！何かあったらうちの組にいらっしゃい、世話してあげるから」

「幹久、帰るわよ！」

真菜は道場を出て行った。

慌てて幹久も後を追う、何か思い出したように戻ってくると制服の上着を投げつけて話しかけてきた。

「面倒かけんなよ！路地裏での事、始末するのに大変だったんだからな！！妹に感謝しろよ！」

そういうと真菜を追いかけて走り出そうとする幹久を青年は呼びとめた。

「幹久、済まない・・・」

「勘違いするなよ！ 妹の為だからな！」

青年を背を向けたまま、言葉を返すと、急いで真菜の後を追いついていった。

／
帰りの車内での事。

真菜は勝負に負けたにも関わらず惚けていた。そんな様子を見てか幹久が真菜に問い直す。

「真菜さん・・・何呆けてんスカ？・・・まさか・・・」

「九郎君って可愛い上に、強いよね。多少影はあるけど、沖田総司みたいでカッコイイ！」

幹久は顔は引きつっていた・・・こうなる予感はしてたからだ。

「綾瀬。真菜さんまで手玉に取るとは・・・しかし、あの綾瀬が俺にお礼を述べるとはな、そっちの方が俺には事件だけどねえ・・・」

真菜は決意したように幹久に命令する。

「幹久帰ったらすぐ、各組長に電話しなさい！ 今後、綾瀬九郎に手を出す様な事したらこの私が許さないって伝えておきなさい！」

幹久はうな垂れながら小声で返事をした。

「組長って・・・俺の精神的負担凄いですけど真菜さん・・・！？」

真菜は幹久の言葉を聞き流すと、真面目な面持ちで車内から空を仰ぐ。

「九郎君は欲がなさ過ぎる。人が成長していく過程で必ず出てくる物を持ち合わせてないなんて、異常だわ」

／

青年は着替えを済ませると祖父のいる居間に足を向ける。

渡り廊下を抜け、縁側を通り居間にたどり着くと襖越しに祖父に話し掛ける。

「爺さん、大事な話があるんだ・・・」

「入ってこい」

青年が襖を開けると、祖父は大きな座卓でお茶を飲んでいた。

「で・・・どうじゃった？ あのお女子おなごは帰ったんじゃない？」

「ああ・・・動きに無駄が無かった」

「そうか。で、話はなにかの？」

「爺さん、まだはっきりと答えは出て無いけど、爺さんが俺を止めてくれた事、武道を利用した事、爺さんが俺を止めてくれた事。」

自分が間違っていた事、その意味が解ったから・・・刀を置く事にする・・・」

「そうか・・・そこまで解ってるのなら後はお前次第じゃの。九郎ついて来い」

祖父はおもむろに立ち上がり、居間を出ると縁側を通り、中庭を抜け、離れ座敷に向かう。

離れ座敷前に着くと羽織からレトロな鍵を取り出すと鍵を開ける。

音を立てて扉が開いた、随分使われてないようだった。

中に入ると部屋は刀の宝庫だった。刀は木箱に入れられ綺麗に整理され積まれていた。

「爺さんここって・・・」

「うちが所有してる刀の倉じゃよ、先祖代々集めてきた縁の品じやな」

「へえ。家の家系ってそんなに長いの？」

その言葉に祖父は呆れた顔をする。

「まあな、お前は物に執着もなければ、此処に来てからも強くなること意外に興味を持たなかったから知らぬだろうがの、四百年は歴史がある家系じゃて、初代当主、姫忠から始まった由所ある家系らしいがの。まあ本当かどうかは知らないがな、かの織田信長と縁があったと言われている」

自慢そうな顔で講釈を述べる祖父の姿に青年は呆れかえる。

「そんなの迷信だろ」

青年は数ある木箱を無造作に手に取ると漆黒の鞘に収まった刀を取り出し、引き抜いた。

「こんな変哲の無い刀、刀剣愛好家の家になら何処でもあるだろう？」

祖父は驚いた顔をして青年に詰め寄る。

「九郎！ その刀どうやって抜いたんじゃ！」

「いや普通に抜けるだろ？ 刀なんだから・・・」

「そうじゃないわい！ ちょっと見せてみい！」

祖父は刀を見るや否や解体し始める、刀身には『実休光忠』と掘り込まれていた。

青ざめた顔をし祖父は青年に向かい、顔を上げる。

「この刀は持ち主を選ぶ刀なんじゃ！ 儂も若い頃そう言われて試したことがある、だが儂には抜けなかったんじゃよ」

「爺さんがそこまで言うなら今抜いてみたらどうなんだよ・・・」

青年は祖父から刀を取り上げると鞘に刀を納刀し、手渡した。祖父は鞘から刀を抜こうとしたが、鞘から刀が抜けることはなかった。その様子を見て青年は祖父を疑いの眼で見た。

「爺さん、芝居じゃないだろうな？」

「馬鹿を言え！ 芝居でこんな莫迦な真似をするか！」

青年は祖父から再び刀を無造作に取り上げて、怪しげに見つめる。

「爺さんの言う事が本当だとして、どうして作りが新刀なんだよ？ 信長が実在した時代なら古刀が主流だろう？ それに鞘だって鉄拵えだけど普通の鞘じゃないか、霸王か魔王か分からないけどそう言う人物が持つならもっと派手じゃないのか？」

その言葉に祖父は静かに語りだした。

「それはの九郎、その刀を持つものは世の中を統べると信じられているからじゃ。かの太閤秀吉もその刀を倉に納めておいた品物じゃ。扱えなかったのか知らぬが、一説には家康もその刀を欲したらしい、それが世に言う『大阪夏の陣』じゃ。結局刀は家康の手には渡らずじまいじゃったがの、ご先祖様が刀を焼き直して見た目では分からぬように仕向けて持ち出したとの事らしいがの、それからずっとこの倉に眠っておったんじゃないよ」

全く信じてない顔で青年は、祖父に質問を投げかける。

「爺さん、その曰くつきの刀がなんで俺に抜けるんだよ？」

「知らぬわ！ 刀が持ち主を選ぶというたじやろう！ まあそう言う事じゃ・・・その刀はお前が持つておけ！ どうせお前にしか使いこなせない品物じゃ」

祖父は肩を落として刀部屋から奥に歩き出した。奥には古い階段があった。

祖父に連れられて階段を上がると甘い香りが微かに漂ってきた。
何処かで嗅いだことのある匂いに青年は懐かしく感じた。

二階全体が部屋になっていて随分と広かった、レトロな机に寝台、
衣桁には真紅の和服が掛けられていて、和洋折衷な部屋だった。

「爺さんこの部屋って・・・」

「雪子の部屋じゃよ」

「・・・・・・・・」

「九郎、今日からこの部屋を使え。今のお前には良い所じゃろう
て、此処で心を休めろ」

そういうと祖父は青年に鍵を渡し階段を降りて行った。
複雑な思いで刀を置き、青年はベットに、くの字型に横たわると
瞼を閉じる。

「懐かしい母さんの匂い・・・好い匂いがする・・・」

まどろみの中、青年の意識は薄れていった。

漆黒の悪意（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

漆黒の悪意

青年はその晩、久々に好い夢をみた。幼い自分を抱えて微笑む母さんの隣に、誰か寄り添っている。

その顔は、雲の様な霧が掛かっていて見えなかった。本当に幸せそうに笑う母さんが印象的だった。

「母さん・・・」

寝ている青年の眼から雫が零れ落ちた。

翌朝、甘い匂いに包まれて目が覚めた。母さんが使っていた部屋をみると、ピンクのカーテン、白いテーブル、ベットの脇にはクマのぬいぐるみ。いかにも女の子らしい部屋だった。母さんが自分とそう変わらない年齢に使ってた部屋だと思えば、複雑な気持ちになった。

起き上がると部屋を出て、母屋おもやに足を向ける。母屋に入ると直接、居間へと向かった。

障子を開けて中にはいると祖父が朝食を食べ終えた様だった、お茶を啜すすりながら、祖父が話しかけてきた。

「九郎、解っておろう？」

「ああ・・・」

この何日か疑問に思っていたことを問いかける。

「なあ、爺さん聞きたいことがある。あの時なんで俺の居場所がわかった？」

「携帯電話のGPS機能じゃよ。お前が帰って来んでな、心配して武道具屋に電話してみればまだ来てないと言われたわい。そこに幹久君から電話があつてな、心配して見に行けば案の定じゃったわい」

「爺さんはアイツがあそこに居るって知ってたのか？」

「大分前からの・・・お前に教えるところくな事にならんと解っていたからの、お前には黙っておいたがな」

「・・・アイツが入院している病院と母さんの墓の場所教えてくれ」

そう言うのと祖父は黙って二枚のメモ用紙を青年に渡し居間を出て行った。

青年は足早に自室へ戻ると、仕度をすませてと玄関へと向かう。

玄関で靴を履き、離れへと向かった。

部屋に入るとクロゼットを開ける。様々なマフラーがあつた。

そこから紺色のマフラーを手取る。

「母さん、借りていくよ。きっと俺はアイツを見たら自分を保てなくなるから・・・」

マフラーを首に巻くと、甘い香りがした。

離れを後にすると、門へと向かい、外へ出る。

屋敷から出ると石畳が道路へ延びていた、青年は道路に向かい歩き出す。道路に出ると、祖父に貰ったメモ用紙を見ながら登り坂を歩き出した。十分程度登ると寺が見えてくる。

「ここか、結構近い場所にあったんだな・・・まあ今まで爺さんに聞いたこともなかったから・・・」

寺の入り口を通り抜け墓地へと足を踏み入れる。墓地は人の出入りを拒むように四方を石垣で覆っていた。まるで人の出入りを拒むような墓で覆われた迷路の道をメモを頼り探していくと、古い墓標があった。そこには安達六郎姫忠の名前も記されていた。

「これが、先祖代々の墓か、初めての墓参りが母さんの墓参りなんて滑稽こっけいだな・・・」

青年は墓の前に座り静かに手を併せる。

暫く眼を閉じ拝んでいると、人の足音が聞こえた。砂利を踏む音が近づいてくる。

砂利の音は青年の後ろで鳴り止んだ。

疑問に思い振り返るとそこには、顔を包帯だらけの男が佇んでいた。

「・・・こっちから会いに行く手間が省けてよかったよ、行きたくもなかったしな！　こんな所に何の様だ！」

青年の顔は憎しみで覆われていた、今にも飛び掛りそうな程の醜悪な顔をしているのに自分でも気が付いていた。

包帯だらけの男は膝を付き、頭を垂れ涙ながらに訴える。

「どうか墓前に手を拝ませて下さい・・・どうかお願いします・・・」

「帰れよ！　此処はアンタが来る場所じゃないんだよっ！！」

青年はそう言うのと睨みつけ、片手でマフラーを握り締める。

「そういやアンタ家族がいたんだったな！ そっちの墓参りはいいのかよ！ こんな所に来る位なら自分の家族の墓参りに行けよ！」

男は心臓を握りつぶしたような苦悶の表情を浮かべ、静かに語りだした。

「私は・・・身内から籍を抜かれ帰る場所が無い人間です。家族の墓にも行きたいのですが、二度と参る事が叶わないのです、此処に居るのは行き場の無くなった唯の死人です。死人に出来るのは被害者の方に償う事しか出来ないのです・・・」

男は頭を伏せたまま微動だにしない。

青年は祖父から言われた言葉を思い出し、怒りを押さえつけながら問いかける。

「爺さんから、アンタの話を聞けって言われたからあの晩の事を少しでも聞いてやるよ」

男は顔を伏せたまま語りだした。

「あの晩私は、会社の同僚と酒を酌み交わし、帰路に着いていました。電柱にもたれ掛かりつい眠ってしまったのです、まどろみの中、周囲は濃い霧で覆われ黒いローブを纏った人物が、私の額に人差し指をつけ聞き取れない言語を口にしたので覚えています、そのあと気が付いたら・・・血の海に倒れていたのです・・・警察に話したのですが信じてはもらえませんでした」

青年の顔は酷く歪んでいた。

「そんな莫迦みたいな話を俺に信じろというのか？ 爺さんに言われて話を聞いた方がいいが、莫迦らしくて耳が腐り落ちそうだ。俺は今すぐアンタを殺してたい！」

「私も最初は、彼方に殺されるつもりでした。でも考え直して思ったのです、彼方が私を殺したら今度は彼方が苦しむ事になると・・そんな思いをするのは私一人で十分だと、事情はどうあれ人を殺めた事は事実なのですから・・彼方にそんな思いをさせる事は絶対にできません・・」

「ふざけるな・・俺の気持ちはどうなる！ 母さんを奪われた俺の気持ちは何処にぶつければいいんだよ！」

青年は我慢できなくなつて男の頭目掛け蹴り上げる瞬間。

「九郎・・その人を許してあげなさい・・」

一瞬、青年の耳に母親の優しい声が聞こえた様な気がした。驚きの余り、足が止まる。気が付けば青年から殺意は消えていた。青年は男を無視し来た道に戻っていく。途中で足を止め背中越しに男に話し掛ける。

「アンタ・・行く所ないんだって言ってたな、此処の坊さん知り合いだから母さんの為を思うなら一生此処で母さんや無縁仏の供養に残りの人生掛けて償え、それで許してやる・・但し一日でも怠ったらその時はアンタを殺す」

男は驚きを隠せない表情をしていた、その顔からは涙が滝のように零れ落ちていた。

「アンタが言った事、正しいよ。俺もここ数日考えて気づいたからさ・・・あと怪我が治るまで無理するな」

男は泣き崩れ、悲鳴に似た声で叫んだ。

それから毎日の様に、青年は深夜に墓に出かけては手を合わせていた。綺麗に墓は手入れされていた。

「・・・これでよかったんだよ・・・母さん」

そう呟くと自宅に向かい歩き出す、そんな日々の繰り返しが日課になっていた。

半年が過ぎた頃だろうか。深夜に目が覚め寝付けない青年は久々に刀を持って道場に向かっていた。

その晩は雨が降っていた、近隣一帯は、濃い霧に包まれ、異様な雰囲気が出ち込めていた。

突然、雷が落ちた。嫌な気配がした青年は墓へと走り出した。

坂道を登り終え、墓で埋め尽くされた迷路のような道を駆け走る。そこで青年はとんでもない物を目の当りにする。

母親を殺した男が古い壺を、全身黒いフードを纏った人物に手渡ししていたのだ。

黒いフードの人物は微かに嗤うと聞き取れない言語の呪文を唱えだした。

唱え終えた瞬間、母親を殺した男は塵になって跡形も無く消えていった。

その光景を目の当りにした青年は、憎しみを露にした。それで全て理解できたからだった。

「お前が全ての元凶か！ 何者だ！」

携えた刀を持って疾風の如く黒いフードの人物に襲い掛かる。
瞬時に間合いを詰めると鞘から刀を引き抜き横一文字に切りつける。

黒いフードの人物は後方に下がり紙一重で交わすと不気味に嗤う。
青年は間髪居れずに刀を上段に持ち直すと、黒いフードの人物に向かい一氣に振り下ろす。

刀が黒いフードの人物に届く瞬間、男の頭上に青白く光を放つ魔
方陣が広がり遮られた。

「くそっ！ なんで届かない！！！」

黒いフードの人物は青年の額に手をかざす。

緑の小さな球体が青年の瞳に吸い込まれていったのを確認すると
口角をあげ嗤った。

「いずれ解る・・・」

黒いフードの人物は見下すように嗤うとそのまま黒い霧の中に吸
い込まれていった。

「待てっ！！！」

残された青年は、悔しさの余り悲痛な叫び声を上げた。

失意の内に自宅に帰った青年は、ベットに横になり深い眠りつ
いた。

翌朝目覚めると、逸早く祖父の元に向かい昨夜の出来事を伝えると、すぐに祖父と墓地に向かい走り出した。墓に到着すると納骨されていた骨壺が一つ少ない事に祖父が気が付いた。

「九郎・・・雪子の骨壺は無事じゃったが、安達六郎姫忠の骨壺がなくなつとる・・・何に使うか解らぬが不味い事になったの・・・」

「爺さん、アレはもう人間じゃない・・・人以外の何かだ」

「お前がそこまで言う相手じゃ恐らく・・・人ではないかもしれぬな」

「九郎、お前はもっと強くならねばならん！ 今日から寝る間も惜しんで実践での稽古を行う・・・わかったの」

「ああ、今度は逃がさない・・・」

それから、数ヶ月なんの進展も無く、稽古に明け暮れる日々が続いた。

次第にアレは夢だったのではないかと思ひ始めていた。その内行き場の無い憎しみの矛先は自分に向けられるようになっていった。

そして居合大会を迎える日に至る事になった。

深遠の騎士と緑の騎士の呪い（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

深遠の騎士と緑の騎士の呪い

気が付けばクロウは、真赤な絨毯で敷き詰められた、聖堂の中にうつ伏せで倒れ込んでいた。

周囲を見渡してみると、色取り取りのステンドグラスに、一二本の支柱、両側には銀で出来た甲冑が剣を胸に抱き、支柱に沿って起っている豪華な聖堂だった。聖堂の奥には玉座があり黒い甲冑が剣を胸に抱き鎮座していた。

玉座の後ろには十字架が吊るされていた、人の形をした白くて、床にまで届きそうな位の金糸が十字架から零れ落ちていた。四肢は鎖で固定されていた。

「！！！」

クロウは驚いた、はりつけ磔られた人物に見覚えがあったからだった。

「ヴェルフィーユ！」

急いで十字架に駆け寄る、玉座の前を通り過ぎようとした時、黒い甲冑は動き出し、剣をクロウに向けて横一文字に斬りつけた。

不意を付かれたクロウは、首を反らし交わすが剣は頬を翳め、血が溢れ出す。

すぐに間合いを取り、臨戦態勢に入る。

「何者だ！ 答えろ！」

クロウの問いかけを無視し、黒騎士は剣を振り上げると襲い掛かる。

「聞き耳持たずか・・・」

振り上げられた剣は異常な速度でクロウに目掛け振り掛かる。
驚くスピードで振り下ろされた剣を避けきれないと判断したクロウは、強引に間合いに詰め寄り両手で黒騎士の柄を力一杯握り締める。

剣はクロウの頭を翳め、頭から生暖かい鮮血の雫が伝わり落ちる。

「くそっ！　なんて莫迦力だっ！　ガウエイン並みか、おまけに
剣撃はランスロットに近い速さか」

黒騎士はさらに力を増し、クロウは片膝を付くほどだった、このまま行けば完全に押し切られてしまうのは明白だった。

「どうする・・・どうしたらいい・・・考えろ」

すでにクロウの腕は限界だった、もう駄目だと観念した時、ヴェルフィーユの声が聞こえた。

「クロウ、その黒騎士を殺しなさい。それは貴方自身の力の源なの！　そいつを殺さないと此処から出られないの！」

その言葉にクロウは、我に返り瞬時に黒騎士に向かい腹部に足を掛けるとそのまま後方に投げつける。

勢いよく黒騎士はクロウの頭上を弧を描くように転がった。

その隙をつき、銀の甲冑が抱え込んでいる剣を手にとると、黒騎士を迎え撃つ。

起き上がった黒騎士は疾走すると瞬時にクロウの間合いに入り込んだ。

「まずい！・・・こいつは俺より数段強い！」

意表を付かれたクロウに向かい、黒騎士の剣は下段から天に向かいクロウの左腕を根元から斬り落した。

クロウの左腕から夥しい血が噴出する、苦悶の表情を浮かべ片膝を付いた。

「そうだ、平伏しろ・・・貴様にはその姿がお似合いだ・・・」

初めて口を開いた黒騎士の声に驚きを隠せない。

「お前は・・・まさか・・・俺なのか」

「そうだ、俺はお前だった・・・だがお前に俺が取って代わる」

「お前は何もできない、だから俺がお前の代わりにこの世を統べる！」

「あの時の黒い闇か・・・」

互いに言葉を交わしえると、黒騎士はクロウに向かい止めを刺そうと頭上へと剣を振り下ろした。

クロウは覚悟を決めると、片手で剣を受け止め力一杯防ぐ、しかし片手ではどうにもならない事はクロウにもわかっていた。瞬時に力を抜くと黒騎士の剣の沿って柄頭を、黒騎士の顔面に叩きつける。意表をつかれた黒騎士は、若干揺らいだ瞬間をクロウは見逃さなかった。

瞬時に左足を下げ捻ると右足で渾身の蹴りで胴体を打ち抜く。そのまま黒騎士は勢いよく吹き飛んでいった。

「クロウ、今がチャンスよ。早く止めを刺しなさい！」

クロウは持っている剣をヴェルフィーユの心臓に向けて投げ放った。

投げた剣は深々とヴェルフィーユの心臓に突き刺さる。心臓から溢れ出た血は剣伝い床を真赤に染上げる。

「クロウ、どうして・・・」

「俺は、お前に用はないよ、俺が大事なのはヴェルフィーユだけだ！」

クロウはもう迷いが無かった。山水の様に澄み切った透明な瞳をしていた。

黒騎士はむくりと起きあがると、疾風の速さで、剣を水平に構えクロウを向かって突き刺した。

貫かれたクロウは、平然として黒騎士を抱きしめる。

「お前は、小さな俺だったんだ、今の俺ならきつと助ける事ができる。お前もヴェルフィーユも・・・だから安心して俺の中に戻れ・・・」

優しく語り掛けるクロウに黒騎士は子供に変わると涙を流し、散々泣きじゃくった後、クロウに抱きつきながらそのまま体に戻っていった。

十字架に磔られたヴェルフィーユは怒りを露にする

「どうして、解った!？」

「ヴェルフィーユは間違っても殺せなんて言葉は口にしないからだ!」

「たったそれだけの事で剣を差し向けたか？」

「ああ、アンタが何者かも大体想像出来てる」

ヴェルフィーユを模った人物は鎖を引き千切ると、悠々と降り立つ。こちらに向かいながら、徐々に緑の騎士へと姿を変えた。クロウは背中越しに緑の騎士と対峙する

「さすがと言うべきかな・・・あの方が目を付けるのも頷ける」

「あの方って言うのは黒いフードを被った奴の事だろ？」

「さてな・・・それはお前の知る事ではない」

「まあいい、アンタが知っていようといまいと自分で探し出すさ。一つアンタに予言をしておこうか。アンタは絶対俺には勝てないし此処で滅ぶって事だけは確かだ」

そう言い放ったクロウは振り返ると緑の騎士を睨みつける。

「片腕で戯言を言ってくれる」

「アンタ如き片腕で十分なんだよ」

緑の騎士は怒りクロウに襲い掛かった。

次の瞬間、クロウは脱兎の如く逃げ出した。

「ふん、大口を叩く割には逃げるのか。臆病者め！」

クロウは走りながら考える。全身鎧だと日本刀でもなければ一撃では無理だ。

剣は甲冑が抱えてる物を使うとしても・・・そうだアレならいけるかも？

但し失敗すれば命は無いだろうな。その為には偽装が必要だ。そう考えたクロウは走りながら、銀の甲冑から剣を五本程拝借する事に決めた。

一本、二本、三本、四本、五本と逃げながら巧に剣を無造作かつ正確に円を描き、床に投げ突き刺していく。

クロウは剣の中央に立ち、緑の騎士を挑発する。

「準備はできたぜ、遠慮なく掛かって来いよ！」

緑の騎士は笑いながらゆっくりと歩みをこちらに進めてくる。

「ふん！　どんな事かと思えば剣の数で勝とうなど片腹痛い」

「やってみないとわかんないだろ！　ああこう言う時は騎士風に言うなら『臆したか?!』か」

緑の騎士は愚弄され、憤慨し剣を振り上げるとクロウに襲い掛かる。

まずは一本剣を引き抜くと、緑の騎士の剣を受け止める。次に瞬間剣は弾かれクロウの手から吹き飛んで言った。緑の騎士の剣はクロウの左腕があった場所を翳めてゆく。

瞬時に右足で二本目をすくいあげ手に取ると緑の騎士の胴を打ち

抜く。しかし鎧に傷を付けるのが精一杯だった。最初から解ってたが切れ味が無さ過ぎなんだよ、西洋の剣ってのは・・・そう思いながら、二本目の剣を緑の騎士の兜に向かい投げ放った。

緑の騎士は剣で兜をかばった。その隙を突き疾走すると、三本目の剣を取りそのまま心臓に向けて投げつけた。

すかさず四本目の剣を掴み取り三本目を投げた場所へ正確に投げつける。

三本目の剣が緑の騎士の鎧に傷を付けると間髪いれずに四本目の剣が突き刺さった。

それを見て緑の騎士は驚くと怒りを通り越し冷静になった様だった。

「なるほど、大した技量だ・・・人間なら死んでるだろうな、殺すには惜しい」

「お褒めに預かり光栄だな・・・」

あれでも駄目か！ 内心焦りながらもクロウはその言葉を待っていた。

「さて、そろそろ終幕だ」

「そう願いたいね・・・」

クロウは五本目の剣を引き抜くと、無謀にも緑の騎士に襲い掛かる。

上段から繰り出されたクロウの剣を緑の騎士は片手で受け止めた。

「くそ！ 片手じゃ力が入らない！」

「当然だろう、だが敵にしては賞賛に値する。片手でよくぞここまでで凌いだ」

そう述べたあと緑の騎士は渾身の力でクロウを斜めに切りつける。瞬時に左肩に剣先を乗せ、右手を上へ突き出すように防いだ。次の瞬間、剣は打ち砕かれた。

勢いよく後方に吹き飛ばされる。柱が体を受け止めてくれたみたいだった。

「もう、打つ手が無い・・・どうせ殺されるなら武士らしく頭を刎ねて殺してくれ・・・」

「いいだろう、貴様は敵ながら見事な腕前だった、敬意を称して望み通り殺してやる」

クロウは、右膝を付き顔を下に向ける、首目掛け緑の騎士の剣が振り下ろされる刹那、

（位置に着いて用意、スタート！）と掛け声をかけて、クロウは柱の傍にある甲冑に向かい全力疾走する。

緑の騎士の剣はクロウの首を捉えることができず空を切って硬い地面に叩きつけられた。

瞬時に甲冑が抱えている剣を引き抜くと、甲冑を足蹴に跳躍し柱に足をかけ飛び上がる。

緑の騎士は剣を引き抜こうと力を込めていた。クロウは緑の騎士の首目掛け全体重を乗せ力を込め剣を振り下ろした。

剣は金属音を立てながら緑の騎士の首を切り下ろした。転がった兜から声が聞こえてくる。

「大した者だ、敵であり騙された私が言うのも可笑しな話だが、

実に心地いい。貴公に一つ助言をしておくでしょう。『一年後』我と同じ死に方をするのは貴公の方だと忠告しておくでしょう。さらばだ強き者よ」

クロウに、讃えると、緑の騎士は塵になり溶けていった。

「アンタ敵だったけど、憎めないな。そんな貴方に俺も敬意を評してこの剣を捧げよう」

クロウは緑の騎士が溶けて言った場所に剣を力一杯突き立てる。

「貴方の事は忘れない、誇り高き緑の騎士よ・・・」

踵を返すとクロウは柱に寄りかかり、疲弊した体を休ませる。

「はあ、疲れた！！ 万策尽きたと演技するのも疲れるなあ・・・」

眩きながら呼吸を整えていると、先程剣を取り上げたある甲冑から呻き声が聞こえてくる。

「うー！ うう！ ううう！」

立ち上がり片手で甲冑の頭を取ると、金糸の髪が溢れんばかりに沸いてきた。

「ヴェルフィーユ！？ なんでこんな所にいるの？」

「うう！ うううう！」

ヴェルフィーユの口には布が巻きつけられていた。布を取るとヴェルフィーユは怒り出す。

「クロウ、なんで私を足蹴にするのよ！ 甲冑なら他にもあるじゃない！」

「いや・・・なんでって言われても何となく気になったからかな・・・」

「もう！！ でもクロウはどうして磔になったのが私じゃないって気づいたの？」

「なんだ・・・見てたのか」

怒ってる様な、嬉しそうな顔で見つめてくるヴェルフィーユにクロウは告げた。

「だって、君は優しいからね、絶対そんな言葉は口にしないとわかってたから、妖精のおねーちゃん！」

ヴェルフィーユは嬉しそうな顔を見るとクロウを抱きしめる。

「いだだだだ！ ヴェルフィーユ甲冑が刺さってる！！ 抱きしめるなら甲冑脱いで！」

「嫌よ！ これは待たせた罰ゲームなんだから！」

そういうヴェルフィーユは顔を赤く染めていた。

二人が抱きしめ遭っていると、玉座に光が注ぎこむ。二人は寄り添いながら玉座に歩みだすと光の中へ入る。すると二人の体はゆつく

りと宙に浮き空に登って行った。

／

クロウは甘い香りと共に目が覚めるとそこにはヴェルフィーユの顔があった。

「俺が寝ている間、ずっと膝枕をしてってくれたのか・・・」
どうやらヴェルフィーユは疲れて寝てしまってる様だった。
今ならキスできるかな？ と邪な思いに駆られたがすぐに掻き消した。

男ならいつか自分で掴み取る物だ。しかし、クロウは困っていた。

「まいったなあ・・・俺が恋するなんて思わなかった」

そう呟くと暖かい体温を感じられる膝枕に体を戻し甘い香りに誘われ深い眠りに落ちていった。

クロウが寝入ったのを確認したヴェルフィーユはクロウを横に寝かせ毛布を掛けると、金糸の髪と共に顔を近づけクロウの口に接吻をした。

「おやすみなさい、クロウ好い夢を」

優しい声で告げて光の粒となって出て行った。

死者復活（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

死者復活

入り組んだ洞窟の中、薄暗い通路の両側に沿って蠟燭の灯りが点々通路を照らしている。

明かりを頼りに進んでいくとやがて木で出来た扉に突き当たる、黒いローブを纏った人物は片手に壺を手にし、扉の取っ手を掴むと部屋の中へ入っていった。

部屋の中は、木で出来た簡素な作りの長テーブルがあり、その上には髑髏や分厚い本や資料が山積みになっていた。

部屋の周囲を囲む様に、樹で出来た本棚にはびっしりと怪しげな本が、ひしめき合いながら並んでいる。

その横の棚には、橙色や緑色の髑髏が並んでいる。髑髏は真つ二つに割れている。

「ほう・・・ヴェルティラックを倒したか。名のある騎士だったのだが奴をも退けたか・・・」

黒いフードを纏った人物は、興味深く髑髏に目を向ける。

「まあいい、替えはいくらでも手にはいる、だがそれぐらい易々とやって貰わねばこちらの計画も破綻してしまうのでな、その為になんぞわざわざご足労頂いたわけだからな」

そう呟くと奥の部屋に向かい出した。そこには大きな長テーブルと大釜があった。

卓上には複数のうら若き乙女の亡骸が綺麗に横たわっている。持っていた壺を床に置き、卓上から亡骸を掴み取ると、骨を残し、短剣で肉を削いでいく。

ローブを纏った男は全身鮮血で染まっていた、その顔は罪の意識など全く感じさせない狂気に満ちた顔をしていた。

解体が終わるとブリキで出来たバケツに肉片を無造作に投げ入れた、そして大きな釜のある場所までゆくと肉片を投げ入れる、何度も繰り返し、釜が一杯になるまで続けられた。

そして釜に火を掛け始めると、壺を持ってきて中に納められている、白い骨を投げ入れた。

「あとは煮詰めるだけか、いい余興になりそうだ。目的までまだ時間が掛かる、余興がなくては面白くないからな・・・最悪、奴が死んでもアレが手の内になればそれでいいだけの事・・・」

黒いフードの人物は邪悪な笑みを浮かべ、部屋を後にした。

／
キアメロット城の地下の牢屋に囚われている青年は、余りの寒さで目が覚める。

歯は寒さで、カチカチと鳴り、震えていた。

「ううー・・・なんて寒いんだ。寝床が石だからか、ベットぐらい備えておいてくれよ・・・」

不満を呟きながら、クロウは昨晚の事を思い出していた。ヴェルフィーユ・・・君は何処から来て何処に帰るのか、ずっと傍にいてくれたらいいのにと柄にもない事を思っていた。

「・・・なんか胸がモヤモヤするなあ。これが恋って奴なのか、気になって仕方ない・・・」

頭を抱えながら毛布に包まると、あっちへゴロゴロ、そっちへゴ

ロゴロしながらずっとヴェルフィーユの事を考えていた。他人がみたら馬鹿その者かもしれないなかつただろう。

突然、お腹がグーと鳴り響く。

そーいや、昨日から何も食べてないなあと思い出し、立ち上がる
と鉄格子に向かい歩き出した。

クロウは鉄格子を掴むと大きな声で牢兵を呼ぶ。

「牢兵さーん！ 腹が空いたんだけど朝食とか出ないのー？」

声は地下牢を響き渡り、牢兵に届くと一人の牢兵が息を切らせながら駆けてくる。

「御呼びでございますか？ クロウ様！」

「うん、腹減ったんだけど朝食出ないの？」

「朝食でしたら、すぐに用意できます。係りの者に伝えてすぐに運ばせますので少々お待ち頂けますか」

満面の笑みでクロウはお礼を述べる。

「ありがとう」

牢兵は膝を付き頭を下げると急いで階段を駆け上がった。いった
その姿をみてかクロウは、牢兵って職業も大変なんだなあと思っ
ていた、こんな何処の馬の骨ともわからない若造に頭を下げ、敬意
を払うのなんて嫌だろうに。

鉄格子から離れると、食事が運ばれてくるまでする事もないので、
柔軟運動をする事にした。

暫く、運動をしていると、汗を掻きはじめてその内着ている、学生

服が蒸れて肌に張り付き気持ち悪くなった。

そろそろ、着替えたい所だよなあと考えていると鉄格子の扉が開かれる音と共に、軽い足音が聞こえてくる。同時においしそうな香りも漂ってきた。

クロウは柔軟を止めて、鉄格子に歩み寄ると、朝食を持ってきた相手に驚いた。

「え・・・女の子・・・？」

長く伸びた栗色の髪に、碧い瞳をしている女の子は、実に可愛らしかった。

「クロウ様、朝食の方をお持ちしました！」

呆気にとられ、考え込むクロウの脳裏にはこういう場合大体がゴツイ兵士が持ってきて、ありがたく食べるんだな！とか捨て台詞を吐くのが相場な気がしてたからだった。

「クロウ様？」

名前を呼ばれ我に返ったクロウは慌てて言葉を返す。

「はい？」

女の子はクスクス笑いながら話しかけてくる。

「驚きました、ランスロット様達と引き分けた御方がこんなにも女性の様な顔立ちをしてらっしゃるなんて、ちょっと想像した御方とギャップがあり過ぎて思わず笑ってしまいました。もっと男らしいゴツゴツされた御方かと思ってたいたのですが」

そう言うと女の子は両膝を付き、鉄格子の隅にある小窓から食事

を差し入れる。

食事は、魚を焼いた物に付け合わせでサラダとスープだった。

クロウは食事を受け取ると食べながら、話し掛ける。

「んーまあ顔立ちは持って生まれたものだから、関係ないと思うけどね、好きで女みたいな顔してるわけじゃないからさ」

その言葉に、女の子は顔を青白く変えて非礼をお詫びする。

「お許し下さい！出すぎた真似を申しました！」

「いや怒ってないから謝らなくていいよ。この顔は俺の大切な人の面影を持ってるから気に入ってるんだ」

クロウの言葉を聞き、安堵し女の子はにっこりと微笑んだ。

「まだ君の名前を聞いてなかった、よかったら教えてくれない？」

「私は、パーシヴァル様の侍女で食事係りを任された、リアと申します。これから毎日クロウ様の食事をお届けしますので以後お見知りおき下さいませ」

「うん。宜しくリア」

優しそうな顔で微笑むリアを見てクロウは、ドキッとしてしまった。

さっきまでヴェルフィューの事で頭を悩ませてた自分が、たったの一晩でこうも変わるのかと思うと少し罪悪感を感じた。

実は惚れやすいのか俺・・・思いながら食事を口に運び平らげた。

クロウが食べ終わるのを終始見ていたリアは関心していた。

「クロウ様は実に、魚を綺麗に食べるのですね、思わず見惚れてしまいました。」

「ああ、俺の国では当たり前な事だよ、魚を生で食べる事もあるしね」

「生で食べるのでございますか・・・!？」

「うん、新鮮でないと無理だけど、結構美味しいんだよ」

リアは驚いて硬直していた。

「まあ国が違えば文化も違うから、当然なんだけど・・・リア？」

「はいっ!!」

「言っておくけど、野蛮人ではないからね、俺をみたらわかるだろう?」

リアはクロウを見つめると顔を染めていた。

「そうですね。とても野蛮人には見えません・・・」

食事を終えてクロウは手を合わせ、ご馳走様でしたと頭を下げた。その姿を見てかリアが疑問を投げかけてくる。

「クロウ様、それはどういう儀式なのですか？」

「ああ、これ？ これは命あるものを無駄にしない為の感謝の礼かな？ 元は魚にしても野菜にしても生きていた訳だから、その命を断って自分の血肉にしてる事に対してのお礼だよ、食べ物で粗末に扱うと神様から天罰が下るからね」

その言葉を聞いてリアは感激していた。

「クロウ様の国の思想はとても崇高なのですね、私達も食事の際、神に十字を切り感謝して頂くのと同じですね」

クロウは優しく笑い頷いた。そして空になった食器を鉄格子の子窓からリアへと手渡した。食器を受け取るとリアは立ち上がり「それではクロウ様、失礼致します」と言い出て行こうとする。

クロウはリアを呼び引き止めた。

「リア、お願いがあるんだ！ パーシヴァルに託けてほしい、俺がいた場所に袋が落ちてなかったか探してほしいと伝えてもらいたいんだ！」

リアは振り返り頷くと去って行った。

／

リアは食堂に戻ると食器を片付けた後、宮廷の階段を上がりパーシヴァルの部屋へと足を向ける。

ドアの前まで行き着き、扉をノックする。

「パーシヴァル様、侍女のリアで御座います、クロウ様から伝言

を承っています」

パーシヴァルは窓辺に立ち、静かに答える。

「入りなさい」

「失礼致します」

扉は開かれリアはパーシヴァルの前に膝を付くとクロウから託つた事を申し上げる。

「クロウ様が倒れていらっしやった場所に袋が落ちてなかったか、探してきて欲しいとの事です」

「そうか、なら早速私自ら出向こう、リア出立の準備をしてくれないか」

「はい、パーシヴァル様」

そういうとパーシヴァルは鎧を身に纏う、リアは兵士に馬の用意をさせる為部屋を出て行った。

／
その頃、洞窟の奥深くの部屋に黒いフードを被った人物は舞い戻っていた。

大釜は、ようやく煮詰まり、釜の中には全裸の女がすっぽりと収まっていた。

「そろそろ、頃合かと戻ってみればいい具合に出来ておるな・・・

「
そう呟くと床に魔方陣を描き、釜から女を抱え上げると魔方陣の中央に寝かせた。」

漆黒の長い髪をしていて実に素晴らしいと黒いフードの人物は興奮した。

そして呪文を唱えだす。

「汝の主は我、汝は我を守る刃となり、時には盾と成れ！汝は我の僕なり！『リジェネーション』」

呪文を唱えたあと魔方陣の頭上にドス黒い霧が天井を覆いつくす。やがて霧は女の口から体内に入り込むと消えて行った。

先程まで魔方陣の中央に寝ていた死体がゆっくりと瞳を開けると、そのまま起き上がる。

「なんと美しい・・・今までの最高傑作だ・・・」

そう言うと漆黒のフードを纏った人物は服を投げつけ、着替えるように命令した。

「私を蘇らせたのは・・・貴方様ですか？」

「そうだ、私が今からお前の主だ、早速だがお前に頼みたい事がある、今からパーシヴァルと言う若者を葬ってもらう。よいな」

女性は服に着替え終わると、黒いフードの人物に膝を付き頭を垂れる。

「主の意のままに・・・」

「お前にはそこにある赤い甲冑を身に着けてもらうぞ、漆黒の髪に瞳では目立ちすぎるからな」

「はい・・・」

「では、狩りに出かけるとしよう」

／
パーシヴァルは城を出ると、城下を抜け、鬱蒼とした森を馬に乗りを走り抜ける。

クロウが落雷と共に倒れていた場所に到着すると、茂みの中に埋もれた、見た事も無い袋が落ちていた。

「恐らくこれだな・・・しかし変わっている、すぐクロウ様に届けなければならぬな」

袋を手にとると、馬に戻り跨ると着た道を走り出す、小高い上り坂の上に赤い人影が見えた。

パーシヴァルは馬を止め、人影に向かい言い放った。

「何処の騎士か、今急いでいるのだ。其処を退いて頂きたい！」

赤い人影はその言葉を見向きもせず、剣を抜くとパーシヴァルに襲い掛かる。

「くそっ！面倒な事になった！」

すかさず馬を下りるとパーシヴァルは剣を抜き、赤い騎士に剣を

向ける。

互いの剣は交差し、鏢迫り合いになる。

「何処の騎士だ！ 名乗りもせず剣を抜くなど騎士の風上にも置けん！」

「死に往く者に語る必要などないでしょう？」

冷たい声に、パーシヴァルは驚いた。

「貴女は、女性か！」

「女だと思っていると足元を救われますよ、パーシヴァル」

赤い騎士は剣を素早く引くと、パーシヴァルの体を崩す。

バランスを崩されたパーシヴァルに向かい赤い騎士は剣を振り下ろす。

素早く体を翻すと両手で剣の先端を持ち赤い騎士の剣を受け止める。

「何だと！これはクロウ様と同じ剣技ではないか！」

「これで終わりにしましょう・・・」

赤い騎士は距離を取ると剣を鞘に仕舞い込むと抜刀状態にはいる。パーシヴァルは素早く立ち上がると構える。

赤い騎士は目にも止まらぬ速さで疾走すると、パーシヴァルの間合いに入り真横に切りつけた。

パーシヴァルは右手に持った剣を瞬時に逆さまに持ち替えると右胴体を剣で庇った、すかさず左に携えていたダガーを引く抜くと、

赤い騎士の首元に突き刺した。

パーシヴァルの剣は折れ、斬撃の勢いで吹き飛ばされる。

短刀を突き刺された赤い騎士は悲鳴をあげ、首から血しぶきをあげ絶命した。

「なんて・・・女だ、クロウ様と同じ剣技を使うとは。昨日のランスロット様とクロウ様の戦いをみてなければ真つ二つは確実だったな・・・」

「しかし、剣を盾にして尚、鎧を突き破るか、幸い傷は浅い。逸早くランスロット様に報告しなければ・・・」

素早く、馬に跨りパーシヴァルは城に戻って行った。

／

赤い騎士が倒れ絶命した場所に、黒いフードの人物は姿を現す。

「まあ目覚めて間もないとこうなるとは予想はしてたが、パーシヴァルを討ち取る寸前まで行った事は強大な力を秘めているのは間違いない。直に体と魂が同化すれば、相当使えるだろう・・・」

そう言うと思いフードの男は再度呪文を唱え始めた。

「『リジェネーション』」

赤い騎士は何事もなかった様に立ち上がると首からダガーを引き抜き、投げ捨てた。

傷口は一瞬で再生し何事もなかった様に、黒いフードの人物と共に霧の中へ姿を消して行った。

逢瀬と恋に落ちた貴婦人（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

逢瀬と恋に落ちた貴婦人

夕闇が迫る頃、王宮の一室に二人の人影があった、窓から差し込むオレンジ色の光は顔を映し出す。

その顔は互いに憂いに満ちた顔をしていた。

「グイネヴィア王妃、どうか私の願いを聞いて頂けないか」

「何故です・・・ランスロット。何故あの者を助けようとするのですか！」

ランスロットは、グイネヴィア王妃に近づくと抱きしめる。

「あの者は、才ある者です、このまま牢に閉じ込めておくのは国の損失になります・・・どうかアーサー王に進言して頂きたいのです」

グイネヴィアはランスロットの耳元で艶かしく囁く。

「解りました、アーサー王に進言しましょう。その代り今夜、私の寝所に来て下さい」

ランスロットは悲哀に満ちた瞳をし言葉を返した。

「わかりました・・・グイネヴィア王妃・・・」

グイネヴィアは、ランスロットを見つめると問いかける。

「ランスロット、何故、悲しげな瞳で、私を見つめるのです・・・」

「……いえ何でも無いのです。夢の事を思い出してしまっただけの事です」

「そうですか、なら良いのですが、余り無理をなさらないで下さい。私はもう貴方なしでは生きてゆけないのですから」

グイネヴィアは、そう呟くとランスロットを優しく抱きしめた。抱きしめられているランスロットは、城内が騒がしくなっている事に気がついた。

「グイネヴィア王妃、どうやら城内で何か遭った様です。今夜、寝所でお待ちしておいてください。必ず伺いますので」

そう告げたランスロットは踵を返し扉の外へ向かう、グイネヴィアは静かに頷くと、ランスロットの背中を愛おしそうに見送った。

グイネヴィアとランスロットが逢瀬をしていた少し前、パーシヴァルはどうか城に着く。

パーシヴァルの脇腹から血がポタポタと伝い落ちる姿を見た兵士は、急いで開門し、馬から下ろすと担架に寝かせ城内に運び入れる。城内に運び入れると、すぐに異変に気が付いた侍女のリアは泣きそうな顔でパーシヴァルへ駆け寄る。

「パーシヴァル様、死なないで下さい！　どうかお気を確かに！」

その姿を見て、パーシヴァルは、やれやれ困った娘だと複雑な顔

で微笑する。

「安心しなさい、死にはしない。それよりこの袋をクロウ様に届けてくれないか？リア」

「わかりました！ 必ずお渡しします！！」

パーシヴァルは安堵し意識が遠のいた。そして自室に運ばれていた。

王宮から降りてきたランスロットは、城内の騒動について侍女を捕まえると抱き寄せた。

「マドモアゼル、一体何があったのだ！ 教えてくれないか？」

侍女は余りの出来事で慌てふためく、目の前には黒髪をなびかせ、憂いに満ちた碧瞳で自分を見つめるランスロット卿がいた為だった。余りの美貌に心臓が鼓動を速め破れそうになったのだ。

「あのっ……パーシヴァル様が、怪我をなされて戻られて……自室に運ばれて……行きました……」

詰まりながら懸命に声を絞り出し終わると、侍女は腰が抜けてしまった。

その様子を案じてランスロットは、兵士を呼び寄せると丁重に介抱するように託けてパーシヴァルの自室へ急ぎ向かった。

パーシヴァルの自室に辿りつく、勢いよく扉を開けパーシヴァルに歩みだそうとした。

「パーシヴァル！！」

次の瞬間、ランスロットは顔が凍りついた。そこにはケイ卿がいた為だった。

「ランスロット卿、騒がしいにも程がありますよ」

「・・・申し訳ない・・・パーシヴァルが怪我をしたと伺った物で・・・ね」

「死に至るような傷じゃありません、今縫合している最中なので静かにしていて貰えませんか」

「それで、パーシヴァルの容態はどうなのですか？ケイ卿・・・」

「今は気を失って眠っています、縫合するには丁度良かったです」

「そうですか、ケイ卿、パーシヴァルをお願いします・・・」

「言われなくともわかっています。先程もガウエイン卿が勢いよく来られましたが邪魔になるので追い払いました」

ランスロットは安心すると、パーシヴァルをケイ卿に任せて出て行った。

自室に向かい、歩き出すと大広間から声が聞こえてきた。

「あの、女狐め！ 何だあの口の聞き方わ！ もう少し可愛くなれぬのか！」

ランスロットは声の主に話しか掛ける。

「ガウエインどうした？何を怒っている？」

振り返りランスロットを見るや否や、ガウエインは詰め寄ってきた。

「ランスロット！お前は腹が立たないのか！ケイ卿の態度に！
なんだあの見下す態度は！」

「いや、ケイ卿はそういう性格なのだ、仕方ないではないか。アレほどの美貌と知識を兼ね揃えているのだ仕方あるまい？」

ランスロットがそう言うときガウエインは憤慨する。

「だから男が出来ぬのだ！アレで可愛らしかったらそれはそれで・・・怖いかも知れぬ・・・」

「だろう？まあかく言う私も苦手ではあるのだが・・・貴公の事は言えぬな」

二人が笑って話していると、後ろから殺意が漂ってきた。恐る恐る振り向くとそこには、銀色の長い髪を左肩で結わえた。薄翠の瞳に、眼鏡を掛けた人物が、袋を一指し指でくるくると回しながら冷やかな眼で見つめていた。

「ケイ卿・・・パーシヴァルの容態はいかがでした・・・？」

「今は良く眠ってます、明日には目が覚めるでしょう。後の事は侍女のリアに任せました。で、お二人は何の話をしてらしてるのかしら？！」

ランスロットとガウエインは、二人揃って競い合うように、その場を足早に逃げ出した。

互いに大広間を抜け、一目散にガウエインの部屋に逃げ込むと大きく息を吸い込んだ。

「死ぬかと思ったわい！」

「まったく・・・寿命が縮まるかと思った」

双方顔を見合わせると笑い出す、声を揃えて言い合った。

「アレでは男を捕まえるのは無理だな！」 「アレでは無理じゃろうな！」

ランスロットが窓辺に目を向けると、日が暮れ外は暗闇に包まれていた。

王妃との約束を思い出したランスロットは、自室に戻ろうと足を向ける。

「どうじゃ？ 一杯やっていかぬか、ランスロット？」

「すまん、ガウエイン今日は用事があったな。そろそろ戻らねばならぬ」

「そうか、では次回にするかの！ 女狐に見つからぬように部屋に戻るといういな！」

笑うガウエインに背を向け、ランスロットは軽く手をあげ出て行った、その瞳は憂いに満ちていた。

／
ランスロットとガウェインが一目散に逃げ出した後、銀髪の美女は、リアから頼まれた袋を携え、夕食を持ち地下牢へと歩みを進めていた。

侍女達が制止したが、ケイ自身見ておきたかったのだ。宮廷に噂される円卓の騎士二人と渡り合った、漆黒の瞳をした不吉な人物に、自らも円卓に名を連ねる者としては、純粹に興味があったからだ
った。

壁に沿って両側に蠟燭の明かりが薄暗い道を照らし出している。

ケイは階段を降りて行くと、鉄格子の前に牢兵が立っていた。

牢兵はケイに気づくと片膝を付き頭を垂れる。

「ケイ卿。この様な所に御用で御座いますか？夕食なら私達で運びますが？」

「今すぐに鍵を開けなさい！！」

牢兵の手によって牢屋への鉄格子の扉が開かれる、中に入ると漆黒の者と噂される人物の元へ歩みを進める。

カッカカと、

小刻みに靴音を鳴らしながら歩みを進めると突き当たりに微かに蠟燭の光に照らし出されている牢屋が目にはいる。

あそこにいる人物、それが円卓の騎士を退けた漆黒の者か、ケイは不安に駆られながら恐る恐る近づくところには、一人の青年が片膝を抱え壁を背に寝ていた。月明かりが青年を浮かび上がらす。

その姿を見たケイは一瞬で心を奪われた。

なんとも形容しがたい今までどんな人物にも感じた事の無い独特

の雰囲気醸し出した青年に。

今まで体験した事の無い速さで胸が高鳴る。

青年は人の気配を感じて静かに目を覚ます。ケイに向かい顔を向けると話し掛ける。

「こんばんは、夜はリアじゃないんですね？」

ケイは、珍しく当惑した。

「ええ・・・侍女の代理で夕食を持って来ました・・・」

「そうですか、もう夕食の時間ですか？ いつの間にか眠っていたので気づきませんでした」

真直ぐケイを見つめる青年の瞳をみて素直に言葉が溢れ出る。

「綺麗な瞳・・・」

その言葉に青年は嬉しそうに言葉を返す。

「貴女のその銀髪も凄く綺麗です、眼鏡も良くお似合いです」

ケイは頬を桜色に染め俯いてお礼を述べる。

「ありがとうございます・・・」

膝を付き鉄格子の隅の小窓から食事を差し出すと、リアから頼まれた袋も一緒に差し入れた。

青年は袋を見ると喜んでお礼を述べる。

「ありがとうございます！ 私はクロウと言います。貴女の名前を伺いたいのですが聞かせてもらえますか？」

「クロウ様、私はケイと言います」

ケイは終始俯いていた、目を合わせてもらえないからだ。

「ではケイ、パーシヴァルとリアにお礼を伝えて頂けませんか？
こんな状況なので自ら赴く事が叶わないので、貴女には失礼だと思いますが、どうか二人にありがとうと伝えて欲しいのです」

「わかりました、伝えておきます・・・」

小声で答えるとケイは走り去って行った。

鉄格子の扉を潜り抜け、全速力で自室に戻って、ベットにうつ伏せになり呼吸を整えてから冷静さを取り戻すと呟く。

「地下牢には・・・本当に気高い怪物がいたわ、何だろうこの気持ち・・・」

ケイから溜息が紡ぎだされる。

自分の気持ち的理解できないまま、その晩は過ぎて行った。

／

深夜、皆が寝静まった時刻、王宮のとある寝所に向かうランスロットの姿がそこにあった。

その貌はやはり、憂いに満ちていた。

禁忌の魔法（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

禁忌の魔法

キャメロット城の奥深く、幽閉されている青年は大きなあくびと共に朝早く目が覚める。

「相変わらず、寒い・・・まあ体を動かせば基礎代謝もあがって暖かくなるかな」

昨日夕食と共にケイが差し入れてくれたバックから、鞄付きの木刀を取り出す。

クロウは、木刀を床に置くと、朝日に向かい深々と礼をする、木刀を右手に持ち、つま先床に付きたてた状態でゆつくりと体を起こすとベルトの隙間に木刀の反りを下向きにし柄を押えながら差し込む。

ゆつくりと木刀を引き抜くと一瞬にして真横に切りつけると、右手を返し両手で上段から自分の臍へその辺りまで打ち下ろす。

摺足すりあしで狭い牢の中を歩いたり走り回ったりして体を暖めると、最後に木刀を納刀し、敵を想像しながら抜刀し斜めに切り上げ、右手を返すと両手でそのまま首を刎ねた。木刀を肩に掛け右斜めに振り下ろし血振りをすると静かに木刀を鞘へと収めた。

突然、廊下から拍手が響き渡る。

クロウは鉄格子の方に眼を向けると、そこにはリアが立っていた。

「クロウ様、格好いいです！ それはどういう剣技なんですか？」

「なんだ、見てたの？」

「はい！ クロウ様、集中してらっしゃって話しかけても返事な

いんですもの」

リアが傍にいる事に気づかないほど集中してた自分に、本当に剣術馬鹿だなとクロウは思った。

「リア、昨日はありがとう、一応ケイに託けてあるんだけど聞いたかい？」

「はい。朝早くいらしてパーシヴァル様と私にクロウ様が礼を述べてたと伺いました、ですが、少しケイ様いつもと違う感じがしました」

「ケイ様ね・・・やっぱり円卓の騎士だったか」

そういうとリアは不思議そうな顔をして聞いてきた。

「昨晚何かあったのですか？」

「うん、リアの代理で随分と綺麗な人が来たけど、物腰といい洗練されてて侍女らしくないなと感じてね」

その言葉を聞いてリアは頬を膨らました。

「それって私が洗練されて無いって事ですか！？　クロウ様！」

「そういう意味じゃないよ、リアは可愛らしくて凄く女の子らしいけど、ケイ卿は動きに無駄が無かった、実に戦闘経験が豊富な感じがしたんだ、戦闘に置いて無駄な動きは命取りになるからね。効率よく体を動かさないと命に関わる問題なんだよ」

その言葉にリアは照れながら、思い出したかの様に昨夜の出来事を伝える。

「クロウ様、実は昨日パーシヴァル様がクロウ様の探し物を探して戻られた時、怪我をなさって戻られたのです。先程、目が覚めたパーシヴァルが言うには、赤い騎士にやられたと申しておられました」

「赤い騎士？」

リアは厳しい面持ちで言葉を続ける。

「何でも、その赤い騎士はクロウ様と同じ剣技をお使いになられたとの事でしたが、なんとか仕留めたと申しておりました」

クロウは顔を強張らせる。赤い騎士ということだ・・・パーシヴァル程の騎士に傷を負わせるなんて普通の居合レベルじゃまず難しい。俺以外にもこの世界に迷い込んだのか？何かが可笑しいとクロウは違和感を感じていた。

「リア、パーシヴァルの容態はどうなの？」

「傷自体問題ありません、一週間ほど安静にしていれば回復するとケイ様が仰っておられました」

クロウは安心して顔を緩ませる。

「そうか、なら良かった！俺のせいでパーシヴァルに何かあったら申し訳が立たないから・・・」

リアは俺の気持ちを察してか元気づける。

「さあ、クロウ様、朝食にしましょう！ パーシヴァル様も朝食をおいしそうに食されてました。このステーキ肉を冷めないうちに頂いて下さい！！」

そんなリアを見てクロウは口元を緩めると微かに微笑する。なるほど、パーシヴァルが手元に侍女として置いておきたい訳だ。

リアは床に置いたサーバーを鉄格子の小窓から中に入れると料理の説明を شدした。

「サラダにスープ、ステーキ肉です！ ここで問題です、この肉は何の肉でしょう？！」

クロウは見た事の無い肉質に眼を近づける、おいしそうな匂いが鼻孔を擽る（くすぐる）。

「んー見た事無い肉だなあ・・・リアこの肉なんの肉？」

「兎ですけど？ クロウ様は食べた事が無いのですか？」

「ウサギ・・・」

あの愛らしい兎か、月には兎さんがいるんだよう！ なんて母さんがよく言ってたなあ。そんな風に思いながら食べてみるかと思いきる恐る口に運んでみた。

「！？・・・うまい、リア旨いよこれ！」

あつという間に全て平らげると、いつもの様に手を合わせる。
鉄格子からサーバーをリアに受け渡すとリアはにっこり笑い去って行った。

リアが去って行った後、クロウは脳裏に一つの考えを抱いていた。

「うちの流派を使う赤い騎士、持ち去られた骨壺、そして黒いフ
ード人物、材料は揃ってるが死者を生き返らせるなんて可能なのか・
・魔法を使うヴェルフィーユなら知ってるかもしれないな」

そう呟くと再び立ち上がりクロウは体を鍛え始めた。

／

早朝、皆がまだ目覚める前、ランスロットは寢所を出て自室に戻
ると、シャワーを浴び匂いを洗い流しながら俯き呟く。

「・・・いつまでもこれを繰り返すのは好ましくないな」

その瞳は愁いを宿していた。

シャワーを浴び終えるとランスロットは、着替えを済ますとパー
シヴァルの部屋に向かった。

部屋の前まで来て、ノックをする。

「パーシヴァル、容態はどうだ？ 入るぞ！」

「ランスロット様どうぞ中へ」

部屋の中は綺麗に整理されていた。

丁度四人が掛けれそうな円形のテーブルと椅子があり、部屋の隅
には膨大な本が並んでいた。出窓には花瓶がありバラの花が活けて
あった。出窓付近にベッドがあり、パーシヴァルは寝ている様だっ
た。

ランスロットはベットに向かうと椅子に掛ける。

「調子はどうだ？ パーシヴァル・・・」

「大した事ありません、ケイ様が仰るには一週間程度安静にしていれば治るそうです」

ランスロットは心配した顔で問いかける。

「一体何があった？ お前程の手練が痛手を負うのは実に信じがたい」

「その事で、お話があったのです、クロウ様に託って落雷の落ちた場所へ探し物を探索していたのですが、城へ向かう最中、赤い騎士と出会ったのです、その者は騎士として名乗りもせず剣をこちらに向けてきたのです。そこまでなら珍しい話でもないのですが、その騎士はクロウ様と同じ剣技を繰りだしたのです。ランスロット様とクロウ様の戦いを見てなければ恐らく今、私は此処にはいなかったでしょう」

「クロウと同じ剣技だと！ 異界の者・・・か、しかし甲冑姿なのは何故だ、何処かの騎士なのか？」

「おそらく誰かに仕える騎士でしょう、しかもその騎士は女性でした」

「ほう・・・で討ち取ったのか？ パーシヴァル」

「はい。手加減できる相手ではありませんでした」

「お前が無事であったならそれでいい、暫く静養しておけ。お前

を失うと私も困るからな」

「勿体無いお言葉、痛み入ります」

そういうとランスロットは部屋を出て行った。

自室に帰る途中、侍女のリアに偶然出くわした。

リアは膝を付き畏まると頭を下げる。

「ランスロット様、我が主のお見舞い恐悦至極にございます」

「いや、無事で何よりだ。リア、パーシヴァルを宜しく頼む」

「はい、お任せください」

満束そうな顔でランスロットは自室に戻っていった。

自室に戻るとランスロットはベットに横になり赤い騎士について考えていた。

「異界の者か・・・一体どこから来ているのだ」

そう呟き朝も早かった事でランスロットは深い眠りに入っていた。

／

王宮の謁見の間での事、グィネヴィア王妃はアーサー王に向かい進言していた。

「アーサー。どうか地下牢にいる青年を牢から出して頂けないですか？」

「何故、その様な事を申すのだ、グィネヴィア？」

「彼は罪を犯した訳では無いではないですか・・・」

「わかっておる。だが信用に値するかどうか見極めねばならぬ、その日が来れば、いずれ牢から出す事も考えておる」

「せめて、牢ではなく円卓の騎士同様に宮廷の部屋を与えてあげて下さい・・・」

その言葉にアーサー王は傍に控えている黒いフードの人物に問いたです。

「・・・マーリンどう思う？」

「得たいの知れない輩です、まだ時期では無いでしょう。暫くは現状維持で宜しいかと存じます」

「そういうことだ。グィネヴィア、この話は仕舞いにする。わかったな」

そう告げると、アーサー王は謁見の間を出て行った。

グィネヴィアは唇を噛み締めていた。

／
クロウは夕食を終え、いつもの様に壁にもたれ片膝を抱えて誰かを待っているように小さな鉄格子からこっそり貌を出す月を見上げていた。

すると頭上に蛍の光に似た小さな光の粒がひらひら落ちてくる。
次第に集まり人の形を模ると、一瞬強い光を放つと光の中から人が姿を現す。

「待ってたよ、ヴェルフィーユ」

その言葉にヴェルフィーユは頬をほんのり赤く染め、クロウの隣に腰を下ろした。

「待っててくれたの？ クロウ」

「うん、君に逢いたかったのもあるけど聞きたい事もあったね。
でもやっぱり君に逢いたいのが一番の理由かな」
ヴェルフィーユは照れながら言葉を返す。

「クロウ、変わったね。もう瞳に黒い影が無くなった」

「君が助けてくれたから・・・」

「それは違うわクロウ、貴方は自分の力で勝ったの、私はただ背中を押しただけ、過去を振り切ったのは貴方自身の力」

「俺にはもう何も無いと思ってた、でも確かな物があつたんだ。
誰かを守りたいって言う気持ちだが、母さんを助けられない自分が憎くて、気が付いたら自分を憎んでた」

「でもそれは間違いだと気づいたんでしょ、それだけでも大きな違いよ」

「そうだね、実際母さんを殺した奴は、あの人じゃなかった。大

きな過ちを犯す所だった。君が教えてくれたんだヴェルフィーユ、君が・・・」

クロウは自分が羽織っている毛布の中にヴェルフィーユを包み込む。

「風邪を引くといけないから・・・」

ヴェルフィーユの貌は高揚して紅葉の様に染まっていた。

「ねえ、クロウ聞きたい事って何？」

「実は昨晚、友人が俺と同じ剣技を使う騎士に怪我を負わされて、療養中なんだ、その友人に手傷を負わせれる人間は家の門弟にはいないからさ、他にも此処に迷い込んだ人間がいるのかなって考えてたりしてるんだけど」

「それはないわ・・・」

クロウはそう言いきったヴェルフィーユを見つめる。

「どうして？」

「クロウにはまだ秘密」

クロウは困った顔をし話を続ける。

「じゃあ俺以外の人間がこの世界に迷い込んでない事を前提で考えるよ。例えばの話なんだけど、無くなった人間の骨を使い死んだ人間を生き返らせる方法ってあるのかな？」

ヴェルフィーユは貌に緊張が走る。

「クロウ何故そんな事を聞くの!？ 死者を生き返らせるのは神への冒瀆なの!」

「ヴェルフィーユ落ち着いて聞いて、ヴェルフィーユも知ってると思うけど母さんを殺した人物は覚えてるよね?」

「うん・・・クロウの深層過去で見たわ」

「直接手を下したのはあの人だったけど、あの人には操られてただけだった」

「どういう事なの?」

「俺がこの世界に迷い込む前、夜中に霧がたちこめて不審を感じた俺は母さんの墓に向かったんだ、そこには母さんを殺した人物と、黒いフードを被った人物がいたんだ、母さんを殺した人物は、男が呪文を唱えると塵の様に姿を消したんだよ、そう緑の騎士の様にね。そして黒いフードの人物は俺の古い先祖の骨壺を携えて霧の中に姿を消したんだ」

ヴェルフィーユは考え込んでいる様子だった。

暫くして口を開くと衝撃的な言葉を口にした。

「クロウ、結論から言うと特殊な物があれば可能だわ。例えば、聖遺物を媒体にして人間を構築する元素を集めれば不可能じゃないわ・・・でも例え復活できたとしても過去の記憶を持たない、ただの死人と同じ扱いになるわ」

「それって生前の記憶を覚えて無いって事？」

「そうなるわ、命じたままに動く死人だけど生命活動はしてるから表向きには人間と変わらないの、ただ生きてた頃の記憶が無いだけ」

クロウは一つの結論に行き着く。

「そう仮定すると安達姫忠しかありえないか・・・」

「アダチヒメタダ？」

ヴェルフィーユは難しい貌をして悩んでいた。

「発音しにくいんだろうから無理に理解しなくていいよ、俺の家の始祖って事」

「赤い騎士の姿をしたのも髪と瞳が黒いから、目立ちすぎると推測できるし、納得できる」

「どちらにしろ、いつかは黒いフードの人物と相見えるのは確かだよ。緑の騎士の件もあるし奴が此処にいるのは間違いなさそうだ」

不意に金糸が頬を撫る。クロウに寄り掛かりヴェルフィーユ寝息を立てていた。

そんなヴェルフィーユをみてクロウは呟く。

「君はいつも突然現れて俺が気が付けば消えてるね、本当神出鬼没のお姫様だ。だけど初めて会った時、俺は君に始めましてと言わなかった理由が今になってわかるよ。母さんが殺された日、君は確

かに俺の傍に居たんだから・・・」

優しく微笑むとクロウも眠りに付く事にした。

翌朝、目覚めるとやはりヴェルフィーユの姿は何処にもなかった。それから三カ月の間、クロウはヴェルフィーユの姿を見る事はなかった。

黒いフードを纏う者（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですので読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎しております。

黒いフードを纏う者

キャメロットに聖霊降臨祭日が訪れていた。

朝早くから、皆一様に忙しく、城下を始め、城内でも祝賀ムードでざわめき立っている。

侍女達は嬉しそうに料理を運び、騎士や兵士は互いに肩を組みその日だけは愉しそうに祝杯を挙げていた。

そんな賑わうキャメロット城へと漆黒のローブを纏い仮面を着けた人物は足を踏み入れようとしていた。

城門の前まで来て兵士に呼び止められる。

「止まれ！ 貴様は何者だ！」

声を荒げて兵士は槍を漆黒のローブを纏った人物に向ける。

「私は、隠者です。アーサー王に謁見を願いたい、重要な事をお伝えしなければなりません、どうか取次いで頂きたい」

「貴様の様な不気味な輩を通す訳にはいかぬ、早々と立ち去れ！」

漆黒のローブを纏った人物は兵士に跪くと懇願する。

「どうか、お取次ぎを頂きたい・・・」

城内の窓辺からその光景を見ていた、黒いローブを纏った人物は城門へと降りて行くと兵士に語りかける。

「私が招いた者だ。御通しなさい」

兵士はその声の主に振り返り跪き、頭を下げる。

「これはマーリン様。失礼しました、そうとは知らず無礼の数々お許しください」

マーリンは優しそうに笑うと兵士を労う。

「よい、祝賀ムードで城内は浮かれておるが、そなたは律儀に務めを果たしておる、実に立派な事だ。」

「ハッ！」

マーリンは、漆黒のローブを纏った人物を城に招き入れると謁見の間へ向かい案内する。

謁見の間へと真っ直ぐに伸びた豪華な絨毯をマーリンと隠者は突き進んでいく。やがて謁見の間へと辿りつくど扉を守護する騎士に向かい王への謁見を願い出る。

騎士は、謁見の間に入ると暫くして戻ってきた。

「どうぞ、マーリン様、アーサー王がお待ちです」

マーリンと隠者は謁見の間に通されると、マーリンは王の傍らに、隠者は王の御前に跪く。

アーサー王は、隠者に向かい問いを投げかける。

「この様な日に何用だ？ 漆黒の隠者よ？」

マーリンはアーサー王に向かい耳元で囁く。

「この者は未来を見通す事の出来る者でございます、私の知人で

す」

「それは真か？　ならば信用に値するのだな、マーリン？」

「はい」

アーサー王は漆黒の隠者に向き直し再度問いかける。

「隠者よ、そなたは未来を見通す事ができるらしいな？　話を聞いてやろう、その前に仮面を脱ぎ素顔を晒せ、出なければ話を聞くに値せぬ」

漆黒の隠者は仮面を少しずらす。

アーサー王はその顔をみて驚く。

「アーサー王、どうかお許し下さい。とてもお見せできる顔ではないのです。どうか仮面を着けたままで語る事をお許し願いたい」

アーサー王は酷く後悔した。

「漆黒の隠者よ、辛い思いをさせて済まなかった、そなたの予言を申してみよ」

隠者は一步前へ歩み出ると、膝を付き、頭を垂れ申し出る。

「アーサー王。僭越ながら申し上げます所、今年こそある者が現れ、その者はいつか『聖杯』を手にキャメロットへ持ち帰るでしょう。それが私の予言で御座います、それを逸早くアーサー王にお伝えしたくマーリン殿に助力して頂き参った次第です」

アーサー王は玉座から立ち上がり驚嘆すると隠者に問う。

「それは真か！」

「はい、神に誓って嘘偽りの無い事実で御座います」

隠者に近寄りアーサー王は労いの言葉を掛けると騎士を呼び隠者を手厚く持て成す様に支持した。

すると隠者はそれを拒みアーサー王に申し出た。

「アーサー王、どうかお許し願いたい。私はこの予言の為だけに城に参ったのです、すでに世捨て人となった私は人と係わる気は一切ないのです。どうかお許し下さい」

そう述べるると隠者は城の外へと出て行った。

その頃、地下室に閉じ込められたクロウは城内の異様な雰囲気にも困惑していた。

いつもならリアが夕食を運んでくれる時間なのに、朝飯も運ばれてこないし城内は早朝から騒々しいし、遂に俺の公開処刑が決まったのかと思っていた。

クロウは毎晩月を見上げては月齢を数えていた。月の周期は約三十日で新月から満月、満月から新月に変わる事を知っていたクロウは、ヴェルフィーユが三カ月姿を現さないと言う事をしっかりと把握していた。

そして今夜は新月の晩だった。

「ヴェルフィーユ、一体何処にいるんだ・・・」

クロウはお腹を空かせ、孤独と戦いながら、時間は過ぎていった。

その晩、吉報を知らされたアーサー王は円卓の騎士を集め祝杯を挙げていた。

「皆、今日は聖霊降臨祭だ、この円卓に集う者、上も下もない、同士達よ。この祝日を共に分ち合おう！」

そう言うのと皆で祝杯を挙げていた。

侍女や兵士、騎士達も円卓を囲い一緒になって歌い踊っては、宴は深夜まで行われた。

皆一様に疲れ果て、そのまま深い眠りに着く深夜。一人の侍女によって、アーサー王は肩を抱えられ寝所へと運ばれていった。

／

深夜になりクロウはいつもの様に片膝と抱え、冷めた壁に寄り掛かり、鉄格子の小窓から月の見えない空を見上げていた。

明日で自分の人生も終わりを告げるのかと思いつながら、自分はい体何の為に此処にいるのか、そんな事を考えていた。

「こんな時でも腹は空くんだな・・・死ぬ前に米が食べたかった」

一言呟き、星が敷き詰められた夜空を見つめっていると鉄格子の廊下から蛍の様な光が漂いながら入ってくる。光の粒はやがて少女に姿を変えた。

それを見たクロウは思わず嬉しいような声をあげる。

「ヴェルフィュー!!」

ヴェルフィーユは、静かに瞳を開けるとクロウを見て疑問を投げかける。

「・・・クロウ？ 貴方いつから女の子になったの？」

「ヴェルフィーユ何を言ってるんだ！ 俺は男だ！」

ヴェルフィーユはクロウの顔を食い入るように見つめる。

「クロウ、髪が伸びてることに気づいてないの？ 誰が見ても女の子に間違われるわよ？」

「・・・は？」

クロウは自分の髪を手で触ると髪は胸まで伸びていた。

自分でも全く気が付かなかった。確かバッグの中に短刀があったなと思い出したクロウは短刀を取り出すと髪を束ね削ごうとした。

「待ってクロウ、その髪型でいて！ だって凄く可愛いんだもん・・・」

クロウは一瞬呆氣に取られると言い返す。

「邪魔になって仕方ないじゃないか、それに可愛いって何・・・」

ヴェルフィーユは頬を染めながらポケットから絹で出来た赤いリボンをクロウに手渡した。

「私の使ってるリボンをクロウにあげる。それで髪を一つに束ね

て！」

「あのね、ヴェルフィーユ楽しんでない？ それより今まで一体何処で何をしてたんだよ！」

不満を口にしながらクロウは髪を後頭部で一つに束ね結っていた。その言葉に、真面目な貌でヴェルフィーユは話しかけてくる。

「クロウから死体を生き返らす話を聞いてからずっと、この三ヶ月調べてたの、それでわかった事があるの・・・」

「何がわかったのさ？」

「いい？ よく聞いてこの城にはマーリンと言う魔法使いがいるの！ 結論から言うと彼はもう死んでるのよ」

「まさか・・・！」

「そのまさかよ・・・今城内でよくない事が起きてるの」

「クロウは戦闘の準備をして、私は補助に徹するから」

クロウは頷くとバッグから、朱袴に白色の着物、白足袋に雪駄、黒い籠手を取り出す。

「ヴェルフィーユ頼みがあるんだ、すぐに牢の入り口から俺の刀を持ってきて欲しい」

「わかったわ！ 少し待ってて」

ヴェルフィーユは鉄格子をすり抜け出て行った後、クロウは素早く着替えを済ませる。

刀を抱えてにヴェルフィーユは戻ってくるとクロウに手渡す。

「クロウいつの間に着替えたの？」

ヴェルフィーユは不思議そうにクロウを見る。

「ヴェルフィーユ、君はそんなに俺の裸が見たかったの？」

その言葉にヴェルフィーユ全てを理解し、俯き頬を染めていた。

「クロウの意地悪・・・」

クロウはニヤ付きながら質問する。

「それより、牢兵はいなかった？ 鍵はなかったかい？」

「今日は聖霊降臨祭だから、皆、宴に参加してるわ、鍵も牢兵が持ってるはずよ。クロウにも解る様に説明してあげる！ 聖霊降臨祭って言うのはイエスが奇跡の起こして復活した五十日目に聖霊が降り立った日の事よ」

「・・・そうなの？」

「そうなの！ 兎に角急いで！ 何か起きてるのは確かだから」

「わかったよ、仕方ないから鉄格子を斬るしかないか」

クロウは刀を鞘から抜刀すると鉄格子を真横に斬りつけると刀を

持ち直し上段から左斜めに切り落とし引き抜くと鞘へ刀身を静かに納める。鉄格子は一瞬、間を置き、カランと音を立て転がった。牢から出ると牢屋への入り口の鉄格子も同様に斬りおとし、一直線に階段に向かい駆け上がる。

「さすが名刀だ、刃こぼれ一つ無い」

そう呟くとヴェルフィューの案内で魔力を感じる方向へ導かれる。

「相手の魔力を辿ると言う事は、恐らく私の存在もばれてるわね・・・」

「ばれると不味いの？」

「クロウ、私は追われてるのよ、生まれたときからね・・・」

「でも、大丈夫。どんな時も必ずクロウが助けてくれるから、だからもう逃げるのはやめるの」

「どんな時も君を助けると必ず約束する。だけど今は姿は消していた方がいい」

互いに話しながら走っていると、やがて大広間に突き当たる。そこには大勢の騎士、兵士、侍女達が眠っていた。

クロウは騎士に駆け寄り叩き起こす。

「おい！ 起きろ！ くそ、死んだように眠ってる」

「クロウ眠りの魔法が掛けられてるのよ、術者を倒さないと目が覚めないわ」

大広間の先に人影が見えたクロウは走り出す。ヴェルフィーユ不可視の魔法を掛け姿を隠し浮遊する様にクロウの後を追う。

銀髪の髪が踊るように舞い走っている人物に追いつくとクロウは手を掴む。

「ケイ！ 何処に向かつてる！」

その言葉にケイは恐る恐る振り向くとそこには見た事の無い服装をした女性がいた。ケイは高圧的な態度で言葉を返す。

「貴女は誰なの！ 私を誰だと思ってるの！ その手を放しても
られないかしら？」

クロウは苦虫を噛む表情で訴える。

「ケイ！ 俺だよ！ クロウだよ！！」

ケイは驚き、赤面する。クロウはケイの肩を両手で掴むと質問を投げかける。

「それよりケイ聞きたい事がある、一体何があった？」

「実は、王を始め、皆で祝杯を挙げていたのですが、酒を飲んだ者は、皆一様に寝たままいくら起こしても起きないので」

「ケイ・・・自室に籠ってろ！」

「嫌です！ 円卓の騎士としてこの事態を見過ごすわけには行きません！」

・・・どうする、相手はおそらく・・・安達姫忠を連れているはずだ。

ケイは強い、だけど恐らく敵わないだろう。

味方は多い方がいいがケイは女性だ・・・くそ！他の円卓の騎士は何してるんだ！

「ケイ！　ランスロットやパーシヴァル、ガウエインはどうした？！」

「皆、眠って起きません、私は酒ではなく葡萄の果汁を頂きましたので・・・アルコールは脳に悪いので飲まなかったのです。ただ見た事の無い侍女がアーサー王を連れて寝所の方に向かったのを見かけたので後を追いかけてたのです」

「なるほど・・・ケイは此処に残って皆を介抱してくれ！相手は危険だ！」

「ですが！」

クロウは珍しく感情的になって怒った！

「ケイ！　君の事を想って言ってるんだ！　頼むから此処で皆を介抱してくれ！死ぬかもしれない事になる、君を巻き込みたくないんだ！」

ケイはその言葉に素直に従うと大広間に戻って行った。戻りながら呟く、どうか御武運を・・・

「ヴェルフィーユ、魔力を感じる方向に案内してくれ！」

「わかったわ・・・」

ヴェルフィーユの声に導かれて、豪華な王宮へと足を踏み入れる、そのまま階段を駆け上がると寝所の部屋への道は階段に沿ってまっすぐ伸びていた。

左側に扉が眼にはいる、ヴェルフィーユはクロウに一番奥の方から強い魔力を感じるわ！と言い放つ。

更に奥へとクロウはひた走ると右側に扉が見えてきた。

「此処か？ ヴェルフィーユ！」

ヴェルフィーユは不可視状態を解除すると頷き、再び姿を消した。クロウは扉のノブを回し寝所へと足を踏み入れた。

部屋の中は、真赤な絨毯が引かれ、窓辺に天蓋付きのベット、傍に豪華なテーブルに部屋の隅には大量の書物が本棚にびっしりと収められていた。壁には剣が飾られていて、すぐ下には暖炉があった。寝ているアーサー王の傍には侍女が、短剣を携えてが佇んでいた。何処からもなく声が響き渡る。

「随分と長くこの日を待ちわびたぞ・・・漆黒の者」

何も無い空間から黒いフードを纏った人物が姿を現す。

「待っていただと？ どういう事だ！」

クロウは厳しい貌で言い放つと、黒いフードを纏った人物は歩き出しながら言葉を続ける。

「マーリンと言う人物の体が必要だった、時を遡る事のできる魔

力を得るには私だけの魔力では厳しいのでね、このマーリンと言う男は膨大な魔力を有してはいるが何分、人間とインプの間に生まれた者だ。魔力の使い方が下手すぎる。折角持ち合わせている魔力が勿体無いだろう？だから殺して奪った！この男は実に無能だった、亡くなったニムエと言う恋人を生き返らせてやろうと告げたら利用されてるとも知らず、力を貸してくれた、だから逢わせてやったのだ。ニムエの骨から魂の無い人形を作り出しマーリンと引き逢わせたのだ。するとどうだ？涙を流し喜びニムエを抱きしめた。その瞬間、愛するニムエ自身の手で心臓を抉りださせてやった」

クロウは冷静に答える。

「貴様・・・神になったつもりか！」

黒いフードを纏った人物は更に愉しそうに言葉を続ける。

「貴様の母親を故意に殺害し、この世界に貴様を導いたのは私だ！お前には、この世界に来てもらわないと困るのでな！今宵は貴様に最高のプレゼントを用意してある。絶望と言う名のな」

そう告げると漆黒のフードを被った人物は、骨を残し砂のように崩れ落ちた。部屋に男の声が響き渡る。

「せいぜいと愉しんでいけ！貴様を闇に落とす事は失敗したが、聖女を確認できたのは収穫だった」

男の声が去った後、侍女がアーサー王に向かい短剣を振り下ろす。クロウは鞘から小柄こづかを引き抜くと侍女の手に投げつけた、小柄は侍女の手に刺さり短刀は床に転がった。

異変にアーサー王は目を覚ます。どうやら魔法が解除されたようだった。

侍女はアーサー王の傍から素早く離れるとゆっくりとクロウに向

かい歩みだした。

手からポタポタと血を流しながら、小柄を引き抜くと放り投げる。壁へと投げつけられた小柄は乾いた金属音をたて床に転がり落ちた。

薄暗い部屋の中、蠟燭の明かりに侍女の姿は映し出される。

赤いドレスを身に纏い、黒髪は艶やか光沢を放って胸元で揺れていた。

瞳はクロウと同じ漆黒の瞳をしていた。

残酷な真実（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

残酷な真実

淡い蠟燭の灯りが部屋中をぼんやりと照らし出す。

薄暗い、部屋の中をこちらに向かって歩き出す人物が徐々に姿を明確にしていく。

漆黒の髪は光に照らされて艶めいていた、瞳は真珠の様な光沢を漂わせる。

やがてゆつくりと姿を現した人物にクロウは全身の力が抜けていく。

真紅のドレスを身に纏う人物に幼い頃の記憶が蘇る。

そして侍女の姿を見て驚愕の顔をし表情を歪める。

刀を持つ手は力を失い、手元からするりと抜け落ちる、ガシャンと絶望の音を立て床へと転がった。

真紅のドレスを身に纏う人物は、優しそうな顔で近づいてくる。クロウは突然の光景に戸惑う。

「嘘だ・・・母さんの筈が無い・・・」

侍女は優しく笑うと、クロウに話かけた。

「貴女は誰？ 私を知っているの？ でもそんな事どうでもいい事よ、私は主の命に従い貴女を殺し、アーサー王を殺すだけ」

昔のままの優しい母さんの口から冷めた言葉が響き渡りこだまする。

悪夢を見ている様だった、何故母さんが此処にいるのか？クロウは理解できなかった。

ただ理解できるのは自分の母親が目の前に存在していると言う明

白な事実だった。

「母さんの姿で、母さんの声で、殺すなんて言うな！ お前は誰だ！」

「母さん？ 貴女は私の娘なの？ 例え貴女が娘だとしてもなんの感情も湧かないわ」

侍女は疾走すると、壁に掛けてある剣を舞うように飛び掴み取る。静かに鞘から剣を引き抜きクロウへと向けると素早く駆け抜け、クロウに向けい剣を振りかざす。

クロウは一瞬で転がった刀を反転し掴み取りと、瞬時に抜刀し剣を受け止める。

刹那、侍女は刀身沿って剣を滑らせる、剣は鏢に突き当たり停止した。

即座にクロウの胸に向かい突きを放つ。

クロウは咄嗟に判断し、左足を軸に体を反転させ素早く避ける。

侍女は追い撃ち掛け真横に剣を薙いだ、クロウは必死に刀身で剣を押さえつける。

侍女の剣技を視る限り、予感確信に変わっていく。

「本当に・・・母さんなのか!？」

侍女は答えない。唯優しい笑みを浮かべ、口元を歪ませていた。

その姿は、最早人間らしい感情など持ち合わせてなかった。

押さえつけていた剣が徐々に浮き上がる。

浮き上がる刀を見てクロウは呟く。

「どういう理屈だ！ 女の力じゃない！」

「死になさい！ 九郎！」

侍女の言葉にクロウは瞳孔が開き驚く、何故俺名前を知ってるんだ？

この人は記憶が無い筈なのに何故、今俺の名前を口にした・・・？
クロウは剣が刀身を浮かせる力を利用し、剣を中心に刀を滑らせ
掻い潜ると侍女右側面から斬りつける。

侍女は瞬時に避けると跳躍し、間合いを取る、足元にある小柄を
足で救い上げ手に取ると、クロウの貌に打ち放つ。

飛来する小柄を一瞬でに薙ぎ払うと、真紅の侍女へと疾走し跳躍
すると刀を上段から振り下ろす。

侍女へ打つ下ろされた刀は軌道変え片手平手突きとなり真紅の侍
女の右肩を貫いた。

侍女は右肩から血を流し右膝を床につく。

利き腕を殺された侍女は腕から流れ落ちる鮮血と共に手から剣が
滑り落ちる。

跪いた侍女にクロウは疑問を投げかける。

「母さん・・・本当は記憶が戻ってるんじゃないか？」

「私は貴女を知らない・・・でも懐かしい様な気がする」

その貌には人間らしい表情が戻っていた。

「貴女の剣戟を受けるたび、頭の中で声がする・・・九郎は大切な
宝物だと声が響くの・・・」

クロウは刀を床に突き刺すと侍女へと歩み寄る。

不安定な母さんに近づくと言う事は、最悪の場合自分は殺されるだろうと覚悟を決め母さんの肩を抱いた。

「母さん、覚えてる？ 俺がよく母さんの言いつけを守らなくて、コタツの中で頻繁に寝てたの」

クロウの言葉に侍女は頭を抱え苦しみだす。

「母さん！ 負けないでくれ！ 奴の魔法に！ 母さんは強いじゃないか！ 俺の為を思い、死に行く時でも声を決して挙げる事をしなかったじゃないか！」

クロウの瞳から涙が溢れ出す。

涙はクロウの頬から顎を伝い、侍女の頬をポタポタ濡らす。

少しずつ頬を伝う涙により記憶が蘇る、侍女は静かに記憶を取り戻した。

「九郎・・・本当に大きくなったわね？ 仮初の体であっても、もう一度大切な宝物を見ることができるようなんて夢にも想ってなかった・・・」

「仮初の体？」

「九郎、この肉体は罪のない若い子の血肉から形成されてるの・・・骨は母さん自身の物だけど・・・
沢山の命を使い私を蘇らせた人物は、故意に貴方と戦わせたのよ・・・」

クロウの顔は憎しみの感情で覆われる。

「駄目よ、クロウ憎しみで振るう刀は決して何も成し得ない、身

を滅ぼすだけよ・・・」

母さんにたしなめられてクロウは気づく。

そうか。そう言うことか・・・奴は俺と母さんを戦わせる為に骨壺の中身を入れ替えたのか・・・

母さんは悲しそうな顔でクロウから離れ立ち上がると、剣を鞘に収め居合拔きの構えを取る。

黙ってクロウも床から刀を引き抜くと刀を納刀する。

ああ、知っていた。

母さんはこのまま生を選ぶなんて図図しい考えなんて抱かない人だって事を。

自分の命を復活させる為、多くの犠牲を払った体で生き永らえるなんて考えない人なんだと解っていた。

母さんの想いに応えクロウは静かに覚悟を決めると静かに抜刀状態に入った。

「母さん、この一撃で決着を着けよう。苦しむ母さんの姿をもう見たくないから、これで最後にするよ。本当はもっと話したかった、もっと甘えたかった！ 母さん最後に会えて嬉しかった。さようなら母さん・・・」

両者の間合いが円を描きながら縮まっていき、重なり合う瞬間互いに刃を繰り出す。

引き抜いた刃は交差しぶつかり合い、拮抗する。

その刹那、クロウは刀に向かって鉄拵えの鞘を寸分違わぬ誤差で刀に叩きつけた、拮抗していた刃は鞘が刀を押し出し、母さんの剣を切り裂き胴体を上下に切り離れた。

引き裂かれ床に倒れ込んだ母さんを眼にした瞬間、クロウその場に立ち竦む。

「九郎・・・本当に強くなったわね・・・母さんねこれでも全国大会に優勝した事があるのよ」

クロウは駆け寄り母さんを抱きかかえる。母さんは安らかな貌で九郎の頬を優しく撫でると静かに話し出す。

「九郎は母さん似ね・・・その黒袴も着物も私が使ってた物よ。お父様が九郎に託したのね・・・きつと私が居なくなって寂しかったのかしらね。私の面影を九郎に重ねてたのかも知れないわ・・・本当、母さんは親不孝者ね・・・」

クロウは黙って母さんの話を聞いていた。

母さんは瞳を閉じて、小さな声で話すと、

「このまま静かに九郎の胸の中で眠らせて欲しいの・・・それだけで十分幸せなのよ。残念な気持ちはあるけれど愛する息子に抱かれて死ぬのは幸せな事だわ」

母さんは口から血を吐きながら話し続ける。

「母さんはもうじき死んでしまうけれど、この悲しみを乗り越えてもつと強くおなりなさい・・・そして大切な人を守り抜きなさい！それが・・・綾瀬家に生まれた者の使命でしょう？ だから・・・決してもう自分を恨んでは駄目よ？ 九郎は優しいからきつと自分を責めるでしょうけど・・・憎しみからは何も生まれないの・・・わかったわね？ 九郎。これが本当に最後になるからちゃんと伝えておくわ、母さんは貴方を愛してる。次に生まれ変わっても母さんの子供として生まれてきてね・・・」

母さんの手は力なく床に落ちると静かに息を引き取った。

突然黒い霧が現れると母さんを包み込み込むと吸い込まれていく。クロウは焦る、もう二度と奴に、母さんを利用させたくないからだ。

「ヴェルフィーユ！ 母さんの魂を救ってくれ！ お願いだから！」

クロウは初めてヴェルフィーユに見せた事の無い貌で懇願する。ヴェルフィーユは姿を現すと、涙を流しながら頷く。

魔方阵を展開したヴェルフィーユは、クロウに雪子を円の中心に寝かせる様に指示を出す。

準備が整うとヴェルフィーユは静かに言葉を紡ぎだした。

「聖ジョージと月の天使ガブリエルの名において盟約する！ 因われしこの者の魂を天界へと誘いたまえ！」

言葉を紡ぎ終わるとヴェルフィーユは右手を頭上に掲げた。

ヴェルフィーユ手から水が溢れ出す。

水を雪子の全身にかけると引き裂かれた体が再び繋がり再生した。ヴェルフィーユは最後に呪文を唱える。

「呪われし体と魂に永久の安息を与え給え 『リカバリー』」

眩しい光に部屋全体が覆われる。

母さんを包み込んでいた黒い霧は、光によって消し飛ばされた。

光の中に女性の様なシルエットが浮かびあがると、母さんを抱きかかえ閃光の彼方へ姿を消して行ったのをクロウは見たような気がした。

眩い光が静まり視界が戻る頃、母さんの姿は何処に存在しなかった。

ヴェルフィーユは、安堵した瞳でクロウを見やる。

「クロウ、安心してこれでもうユキコの魂は天界に昇って往ったわ」

「今のは一体・・・」

「天界において高位に座する熾天使ガブリエル様よ」

膝を付き顔を伏せているクロウにヴェルフィーユは背後から抱きつく優しく包み込む。

「クロウ、今は思いつきり泣いていいの・・・悲しい時は思いつきり泣きなさい」

「ヴェルフィーユ・・・」

クロウはヴェルフィーユの言葉に押し殺した感情を露にすると、号泣した。

泣きつかれ深い眠りに誘われる。

クロウと雪子の決闘を見届けたアーサー王は、ヴェルフィーユに向かい跪く。

「聖女ヴェルフィーユ、貴女もどうかお休み下さい。クロウは手厚く持成します故」

ヴェルフィーユはアーサー王に向かい、言っただけ。

「クロウと一緒にじゃないと嫌よ!」

アーサー王は困った顔をして聖女に申し上げる。

「仰せのままに致します」

クロウを抱きかかえるとアーサー王は王宮の一室に向かった。

目覚めると、クロウはふかふかのベッドの上に寝ていた。

周囲を見渡すと、高級木材で出来たテーブルに、光沢を放つ木造の椅子に、部屋の隅には本棚があり本がお互いを押し合うように詰められていた。

ベッドのから少し離れた位置に暖炉があり、炎がパチパチと音を立て燈っていた。

不意に甘い香りが鼻孔を擦る、金色に輝く髪がクロウの貌に纏わり付いていた。金糸の主はすやすやと寝息を立てクロウの横に寝ていた、その姿は可愛らく、天使の様な雰囲気醸し出していた。ヴェルフィーユをみて呟く。

「ヴェルフィーユ、母さんの魂を救ってくれてありがとう」

クロウは寝ているヴェルフィーユに視線を投げかける。

君は一体何者なんだ？ 人智を超えた奇跡を体現し、天使を使役する不思議な女の子。

人なのか天使なのか、そんな問いを投げかけていた。

この世界に召喚されるまで天使や悪魔なんて信じてなかったけどヴェルフィーユの姿を見て信じてしまう自分がいる事に気が付いた。そんな自分に若干の違和感を感じつつクロウは横になると再び眠

りについた。

クロウが寝息を立て始めた後、金糸の髪をベットに豪快にばら撒き寝ている少女はそっと瞳をひらく。

体を起こし左右、色の違う瞳でクロウに視線を注ぐ。

「クロウ、今日は辛い試練だったね、きっと貴方はこれからもっと辛い思いをしもっと強くなる。そしていつか戦う事になる、その時は私を殺してね・・・クロウ」

悲しい顔をして少女は蛍の光に似た形に姿を変えると窓の外へと舞い上がって行った。

円卓への挑戦と侍女（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

お気に入り登録された方々ありがとうございます。

円卓への挑戦と侍女

コン！コンコン！

扉を叩く音で目が覚める。

太陽の日差しが窓から射し込み眩しかった。

「もう朝か、ヴェルフィーユ！ 起きてる？」

目を擦りながらベットの脇に目をやると残り香だけ残してヴェルフィーユの姿はなかった。

「やっぱりいないか、きっと夜には逢えるだろう」

体を起こし、扉の方向に目を向ける。

コンコン！ 扉から音が響き渡る。

「クロウ様、お目覚めで御座いますか？」

聞き覚えのある声が耳届く。

「どうぞ！ 今起きた所です」

声の主は扉を開けると部屋に入ってくる。

カッカカッと、

規則正しい靴音を鳴らしながら、緑のドレス着こなし、手にはサーバーを持っている。

太陽の光を浴び透き通る様な、銀髪を胸元でひらひら揺らしていた。

「ケイ!？」

クロウは驚いて声を上げる。

「はい？ 何でしょうクロウ様？」

ケイは、テーブルまで歩いていきサーバー置くとベットの前で片足を付け跪く。

「どうしてケイが、俺の朝食を運んでるの?!」

「今日から、クロウ様の侍女を仰せつかったケイで御座います、宜しく願います」

「ええ！ ケイが？ どうして？」

ケイは立ち上がり、クスクス笑う。

「私では御不満でしょうか？」

クロウはベットから起き上がり雪駄を履くと椅子へ腰掛ける。

「いや、不満なんてないけど円卓の騎士のケイがどうして俺の侍女を仰せつかったのかと疑問に思ったただだよ」

「私から志願したのです・・・」

「どうして又？ 俺は身分の無い一介の奴隷だよ？」

その言葉にケイは振り返り厳しい口調でものを言う。

「クロウ様、貴方様はいずれ円卓の騎士になれる方なんですよ？！ 少しは自覚していただけないと困ります」

クロウは哑然とした。今なんて・・・言ったの？

「昨夜、賊から一人でアーサー王を守られたとの話で、早朝円卓の騎士が集められました。今城にいるのは私にガウェイン、パーシヴァル、ランスロットの四名ですが時期に、他の騎士達も城に集う事になるでしょう」

クロウは、理解できなかった。

「どうして、そんな事になったの？」

ケイは立ち上がりテーブルの脇に立つと料理の説明をし始める。

「クロウ様、先に料理の説明をさせて頂きます。今日の朝食は、ジャムの実を蒸した物と、焼き魚、サラダとコンスープで御座います。食べながら構いませんのでお聞き下さい」

「うん、じゃあ遠慮なく頂きます」

「実はですね、以前からクロウ様を牢に閉じ込めるのは皆反対していたのです。朝方アーサー王自らがクロウ様に爵位を与えると申し上げた事が話の始まりで御座います」

クロウは銀のスプーンを手にとるとジャムの実をすくい口に入れる。

あつ！ このジャムの実って白米みたいな味がするなあと思いな
がらケイの話に耳を傾けている。

「私たち四騎士はそれで納得したのですが、円卓に座するには、今
の所空席が無いのが現状です。それで十三番目の椅子ならどうだろ
うと言う話になったのですが、この席にはもうガラハド卿がお座りに
なっているので新たに円卓を設けるという話になったのです」

クロウは朝食を食べ終えるといつもの様に手を合わせた。

「それで、俺が新しく設けられた椅子に座らせられると言う事？」

ケイは厳しい面持ちで言葉を述べた。

「ですから二人の騎士と戦ってもらいます。その際、全ての民衆
の前で戦ってもらいます」

クロウは困った顔でケイに問いたです。

「・・・本気で言ってるの？」

ケイは真剣な眼差しでクロウを見つめてながら言葉を返す。

「戯言でこの様な事を申し上げません、民衆、円卓の騎士、王の
前で認めてもらわなければ椅子に座る資格は無いのです。アーサー
王もマーリン程の者が倒された者ならば、いつ国がその者の手によ
って滅ぼされるとも限らないと申しておりました。ならば、早急に
円卓の騎士の強化を図らねばならぬと仰っていました」

クロウは呟く。

「力には力か。抑止力ね・・・その話断るよ」

ケイは目を見開いて驚く。

「一国の領主なれるのですよ？　加えて円卓に連なると言う事は、騎士なら最高の名誉です」

「家の家系は、私欲の為に刀を振るうべからず、家訓なんだ。俺は一介の武士だから弱き人々を守ればそれでいい、だから円卓に座る気も無い、座らなくとも人を守るからね」

ケイはその場で片膝を付き、顔を伏せる。

「クロウ様、お願いです。どうか円卓に座る為の試練を受けて下さい。今この国は昨夜の賊に狙われてるのです、最悪の場合、賊の手により国中の民が犠牲になるのです、貴方の言う弱き人々を守るには円卓の騎士となり、一丸となってその賊から民を護る事ではないでしょうか？」

その言葉にクロウは考えさせられる。

どちらにしろ、俺は奴を追わないといけない。

円卓の騎士の名誉や騎士道には興味は無いけど、奴の手で母さんの様な犠牲者を出したくも無い。

昨夜の事にしても奴を迎え撃った結果、俺一人じゃ何も出来なかった。

結局、母さんを救ったのはヴェルフィーユだし、俺はただ母さんを斬っただけだ。

一人じゃきつと何も出来なかった、結局未だに無力なんだ。

一人で何でもできると過信してたんだ・・・

なんて、愚かなんだ。

なんて、無力なんだ。

なんて、思い上がってたんだ俺は――

クロウは顔を伏せ、ケイに言葉を交わす。

「ケイ、その円卓の試練いつから行われるの？」

「今日の午後から行われる予定で準備を進めています。ですから・
・」

ケイの言葉を遮るようにクロウは言葉を返す。

「ケイ、今すぐ準備に取り掛かる。お風呂に入りたんだけど準備
できる？」

ケイは部屋の片隅にある扉に足を向けて歩みだす。

カッカッカッと、

規則正しい靴音を響かせるとノブを捻り扉を開ける。

そこには入浴の支度が準備されていた。

テーブルから遠目でケイに視線を注ぐ。

「えらく準備がいいな・・・」

クロウへと振り返り満面の笑みでクロウを見つめるケイがいた。

しぶしぶ黒袴を脱ぐと赤い着物が膝まで垂れる。リボンを解くと

長い黒髪は背中まで届き、日本人特有の美を現していた。

その姿を後ろから見ていたケイは膝を付き何故か鼻から鮮血を垂
らしていた。

顔を横に向けたクロウはケイを流し見る。

「ケイ、どうかした？ 血が出てるようだけど何かあったの？」

「違います、先程鼻を打ちまして・・・時期に治まりますので心配なさらないで下さい」

ケイは食器を片付けますので。と言い残し扉を閉め出て行った。
クロウは浴槽に浸かり三か月分の汚れを洗い落とす。

「きもちいい！ やっぱ日本人は風呂だよなあ」

浴槽から出たらタオルが用意されていた。

タオルで体を拭くと颯爽さつそうと朱染めの着物に袖を通し、角帯を巻きつけると黒袴に足を通す。

着替えが終わった頃。

静かに扉が開きケイがそっと顔を覗かせる。

「クロウ様、髪を左肩で結んで頂けないでしょうか？」

ケイに左肩で結ぶように指示されたのでめんどくさいのもあって横で結んでみた。

満足そうな貌で微笑むと浮かれ顔でケイは部屋へと戻っていった。

風呂場を出て部屋に戻ると、ケイが刀を両手で持ち立っていた。
クロウは、ケイの手から刀を受け取ると帯びに差し、下げ緒を帯びに結びつける。

「クロウ様、それでは参りましょうか」

クロウは、ここ数日でケイへの印象が変わりつつあった。

最初は、お堅い感じの才女と言う感じだったが、今見るとなんだか可愛らしい女性だなと感じていた。

「ケイ、試練の会場まで案内してくれ」

そう告げた後、ケイの後ろについて部屋を後にした。

王宮を出て、中庭を通る辺りで、金髪碧眼の長い髪を首元で結んだ青年を見かけた。

年齢は俺とそう変わらないくらいか？

高貴な雰囲気醸し出し、青年は木々に魅入られたように見上げていた。

少しランスロットに似てるなと思うながら青年を横目にクロウは会場へ向かった。

白い外套と銀槍（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

白い外套と銀槍

高い塀に囲まれた豪華な城、キャメロット。

クロウは城門前にいた。

何ヶ月ぶりかの外へ出ると天高く空を見上げる、閉鎖されたあの牢屋から出て外にいる事を嘸み締めた。

「外だ！ 外！ こんなにも空は蒼くてこんなにも高い！ 今まで気が付かなかった！」

外を出た喜びを肌で感じていた。

ケイは兵士に厩うまやから自分の馬を連れて来る様に命じるとクロウをたしなめる。

「クロウ様は、余程、屋外に出られた事が嬉しいのですね？ でも今からが重要なのですよ！ 浮かれるなどは申し上げませんが、気を引き締めて下さらないと困ります・・・」

少し気抜けした声で話し掛けた。

クロウは、余りの嬉しさについて周囲の目を忘れてしまって、はしやぎすぎたと反省し、顔を引き締める。

「ずっと牢の中だったから。外感覚忘れてしまって・・・ごめん」

「いえ、私の方こそ言い過ぎました。クロウ様の心情を察してあげられず・・・」

二人が会話をしていると厩から一匹の黒い馬が複数の兵士の制止を振り切り、猛り狂い突っ込んで来る。

ケイは声を荒げて兵士に叫ぶと、クロウにすぐ逃げるように言い放った。

「クロウ様、お逃げ下さい！ 兵士よ！ 一体何が遭ったのです！？」

単身引きずられ投げ出されそうになりながら兵士は答える。

「ケイ卿の馬を出そうとしたら、先日森で捕獲した馬が柵を破壊し、突然暴れだしたのです！」

黒い馬は遂に最後までしがみついていた、兵士を投げ出すとケイに怒りの矛先を向け突進していく。

クロウは、ケイの前に飛び出すと黒い馬に向かい跳躍する。

一瞬で鎧あぶみに足を掛けると跨り、素早く手綱を握りしめる。

黒い馬はクロウを振り落とそうと前足をバタつかせ空へと咆哮する。

振り上げられた前足は、ケイへと振り下ろされる瞬間、クロウは手綱を渾身の力で右に引っ張った。

前足は、ケイの体一個分逸れ、大地にその足を着けると、尚もクロウを振り下ろそうともがく。

「ケイ！ 離れてろ！ 踏まれたら唯じゃ済まない！ 君にもしもの事があつたら俺も困る！」

ケイは急いで距離を保つと、兵士を抱えて城門入り口まで避難すると、クロウの身を案じる。

馬は先程よりも、荒々しくクロウを振り落とそうと前足や後ろ足

を交互に振り上げる。

「この！ 馬鹿馬！ 大人しくしろ！」

クロウは、馬に罵声を浴びせると強引に言う事を聞かせようと手綱を左右に引っ張り挙げる。

余りの暴れようにクロウは振り落とされると、石床に叩きつけられる。

「くっ！ 痛ってえ」

石床に叩きつけられる寸前、咄嗟に受身を取った事でクロウに大事はなかった。

数人の槍を持った兵士によって黒い馬は囲まれる。

黒い馬は悲しげな瞳でクロウは見つめる。

兵隊長が、兵士に向かい号令をかける。

「やれ！ 使い物にならん馬など必要ない！ 仕留めろ！」

クロウは立ち上がると声に怒気を纏わせ、兵隊長に向かい声を荒げる。

「待て！ その馬を殺すな！」

兵士達はクロウの声に気押されると槍を収める。

兵隊長は不愉快そうな顔でクロウを罵る。

「女が出る幕じゃない！ 引っ込んでろ！」

クロウは不快な表情で言葉をぶつける。

「誰が女だ！ アンタに興味はないんだ、俺はこいつと話してるんだよ！」

女に愚弄されたと勘違いした兵隊長は、クロウに殴りかかった、左手で男の腕を軽く弾くと右足を力強く踏み込み間合いに入り、男の胸を右の掌で打ち抜いた。

兵隊長はその場で蹲り、悶え込む。

クロウは静かに黒い馬に近づくと、瞳を合わせる。

「そうか、お前外に出たかったんだな？ 安心しろお前は自由だ。何処にでも行けばいい・・・さっきは馬鹿馬なんて言ってごめんな」

「ケイ！ 開門して馬を外に放せ！」

そう伝えた後、クロウは優しく黒い馬の頬を撫でる。

黒い馬は城門に向かい直し、暫くすると四肢を付き、つぶらな瞳でクロウを見つめる。

「乗れって言うのか？ お前はもう何処にもいけるんだぞ？」

ブルブルつと唸るとその場を動かない。

「ああ、じゃ今からお前は俺の愛馬だ」

クロウは黒い馬に跨ると、手綱を握り、ケイに乗れと合図した。ケイはクロウに駆け寄ると馬に跨ると、蹲る兵士長に言い放った。

「貴方、今から兵士に格下げ。兵士長は・・・そうね貴方を任命

するわ」

ケイに指を指された兵士は、驚いていた。

「何故ですか！ 私の様な者が兵士長に任命される資格などありません！」

「貴方はもう少し自信を持ったほうが好いわね？ この馬の手綱を最後まで放さないかった事は賞賛に値するわ。この下衆な兵隊長だった男より遥かに資格があります。後でアーサー王に伝えておきますから貴方が今から城門の指揮をなさい」

兵士だった男は膝を付き、頭を下げるとお礼を述べ、他の兵士に隊列を組むように指示を出した。

城門の壁に沿って両側に兵士を連ねると槍を胸に抱くように号令を掛ける。

「開門せよ！ クロウ様とケイ様の出立だ！」

兵士長になった顔付きは、先程とは打って変り、厳しい顔つきをしていた。

クロウを見上げる貌は、瞳に涙を浮かべていた。

「クロウ様！ あの日の事は一度も忘れておりません。御武運を祈っております」

クロウはその言葉に初めて城門を潜った時の事を思い出した。

「ああ、行ってくる！ 兵士長就任おめでとう！ 余り無理するなよ」

兵士長は、膝を付き頭を下げると馬に乗り走り出したクロウ達を見送った。

／

馬は力強く疾走する、堂々として流麗な姿をしていた。差し詰め、馬の王と言った感じだろうか。

「ケイ！ 振り落とされないようにしっかりしがみついてろ！」

ケイは貌を鬼灯の様に赤く染め、クロウに抱きつくとうっとりとした表情を浮かべていた。

鬱蒼とした森を抜け、城下にたどり着くと、信じられない程の民衆や兵士が密集し騒然としていた。

民衆達は、クロウ達に気が付くと海を切り裂いた様に割れていく。群集と言う海が割れた先には、大きな四角い石床の舞台が用意されてた。

石床の舞台を俯瞰するように小高い石作りの^{たかどの}高殿には豪華な椅子が用意され、王と王妃が座っている、王の左にガウエイン、王妃の右にランスロットが立っていた。

クロウは馬から降りると、ケイの手を取り、馬から降ろす。

決して騎士としての振る舞いを民衆に見せるための物ではなく、ケイは円卓の騎士であろうと女性である事に変わりないと言う配慮からの行動だった。

その姿に民衆や兵士達は歓声を上げる。

「クロウ様！」

「素敵！」

「女みたいな御方だな、あれで円卓の騎士を倒せるのか？」

民衆達の間で色々と会話が交錯している。

ケイは、馬を兵士に託すと、丁重に扱うように指示する。

「この馬は気性が激しいから、注意して扱いなさい。それとクロウ様の愛馬だから粗相の無いように！」

舞台の向かいには白い外套がいでうを頭から被り立っている人物が二人佇んでいる。

正体がわからないクロウは、不気味な思いに掻き立てられる。

アーサー王は豪華な椅子から立ち上がると民衆達に言葉を述べる。

「これから始まるの戦いは、この者が円卓に相応しいか否か、皆で決める審査。国の行く末を決める国事、どうか皆で見極めて欲しい！」

そう言うのと豪華な椅子に座り、ケイに向かい合図を送った。

ケイは静かに、舞台に登ると中央に立ち開催の言葉を民衆に向けて挨拶をする。

「宰相でもある、円卓の騎士に名を連ねるこのケイが審判員を務めさせて頂きます。不服のありましたら申し上げてもらって結構です。異論はありませんか？」

会場は静まり返り、民衆はケイに注目する。

「異論はないようなので、私が審判員で事を進めさせてもらいます、両者前へ！」

白い外套を纏った人物は兵士から銀色の槍を受け取ると堂々と舞台に上がる。

「さあいつでも掛かって来い！ 異界の者！」

その言葉にクロウは静かに舞台に登ると、中央に向かい歩き出す。ケイを中心に両者が顔を合わせる。

「では、これより審査を始めます！ 勝負は先に一本先取した者を勝者とします、では正々堂々と始め！」

白い外套を纏った人物は、合図と共に威風堂々外套を脱ぎ捨て、正体を現した人物にクロウは、息を呑んだ。

九頭の蛇（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

九頭の蛇

白い外套が風に漂い、舞台に舞い落ちる。

姿を現した人物は、腰まである金髪に濃い碧眼、兜などはなく、腰までの銀の甲冑を身に着けていた。

長い金髪が風になびく、凛々しい青年だった。

隻腕と言う以外は――

舞台を取り巻く民衆から歓喜の声が響き渡る。

「ベディヴィエール様！」

「銀槍のベディヴィエール！」

「ベディヴィエール様！ 頑張って！」

口々に民衆は、ベディヴィエールを讃える。

クロウの耳には民衆の声は聞こえてなかった。

目の前にいる人物、それが隻腕の騎士だと言う事実には驚き、同時に不気味で仕方なかった。

こんな大舞台に隻腕、しかも円卓に名を連ねる人物だ。

余程の技量でなければ片腕で槍を自由に扱えるはずがない。

こういう場合、大抵は片腕でふざけるなど憤慨する事もあるだろう。

だが、クロウは違った。

抜刀すると素早く身構えた。

ベディヴィエールは槍を左手で円を描き振り回すと、態勢を取りクロウに声を掛ける。

「なるほど、実力を見抜く力は持ち合わせているみたいですね。憤慨するかと思ったのですが」

「生憎、俺の目は節穴じゃない。貴方が只者じゃない事は肌で実感してる」

クロウは、額から冷や汗を流していた。

「自己紹介はまあ、後で構わないでしょう？ 此処で死ぬようなら必要ない事だからね」

そう呟き、爽やかに笑うとベディヴィエールは槍をクロウに向け胸を突いてきた。

瞬時に後ろに飛び避けると、距離を保つ。

「好い反応だ。しっかり槍を目で捕らえてる」

ベディヴィエールの言葉にクロウは答えない、なぜなら槍使い相手には三倍の技量がないとまともに戦えないからだった。

クロウはどう攻めるか、悩んでいた。

これ程の手錬に対して自分の剣技が通用するのか？自信がなかったからだった。

（まずいな・・・強敵だ！ 簡単には倒されてくれないだろうな。どう攻める・・・）

クロウが思案しているとベディヴィエールは疾走し槍でクロウを薙ぎ払う。

刀で槍を弾くと、八相に構えベディヴィエールへ向かい突進していく。

間合いに入り込んだクロウは、八相から切り上げようとした瞬間、

嫌な予感がして後方に飛び後退する。

目前を銀の蛇の様な影が降ってきた。

先程までクロウがいた場所に目をやると銀の槍が深々と突き刺さっていた。

「今のは何だ・・・!？」

ベディヴィエールは槍を引き抜くと口角をあげニヤリと笑う。

「簡単な事さ。弾かれた槍を遠心力に任せて背中に隠し剣を振る要領で左手が頭上に到達した時点で、石突を逆さに持ち替え君に目掛けて突いただけさ」

クロウは、ベディヴィエールの左腕に目をやると、体に似つかわしくない腕をしていた。

「なるほど。理に敵ってる訳だ、しかし簡単に言ってくれる」

今のは腕力だけでは到達できない領域だ。

しなやかで体の軸がしっかり出来てないと繰り出せない。

しかも、隻腕でやってのけるなんてどう言う大幹をしてるんだ！

民衆は目の前の攻防に皆呆然としていた。

顔から笑みを失くすと、ベディヴィエールはクロウに言い放った。

「君が、今のを避けるとは予想してなかったよ！　これから本気で君を仕留めに掛からせてもらう！」

クロウの表情は歪む。

今まで本気じゃなかったのか！ 爺さんに言われたとおり槍での実践も想定して置けばよかった・・・

ベディヴィエールは突進すると槍を連続で突いてくる、余りの速さに一突きに見えた。

クロウは必死で刀で捌く、七突きまでは捌ききったが、残りの二突きは捌ききれなかった。

八突き目は頬に掠り、頬から血が伝い流れ落ちる。

九突き目はリボンを掠め、リボンは切り裂かれひらひらと石床に落ちる。

リボンで束ねていた、髪が風に舞い扇子のように広がる。

クロウは、頬から伝う血を左手拭うと、瞳に怒りが込み上げる。

ヴェルフィーユから貰ったリボンを切り裂きやがって！

「運よくかわしたね？ 次で仕舞いにしよう」

「ああ、いい加減アンタの顔にも見飽きたこれで最後にする・・・」

「

クロウの言葉にベディヴィエールは冷徹な顔で答える。

「君は円卓に名を連ねるべき人材じゃないよ」

「何とでも言え。その蛇みtainな槍捌きも次で終わりだ・・・」

クロウは下げ緒を素早く解くと鞘を左手で握りしめる。

ベディヴィエールは、素早く突進すると先程の業を繰り出した。

七突き目まで刀と鞘で駆使して打ち払い、八突き目を大きく弾いた。

ベディヴィエールは一瞬笑い、弾かれた槍を頭上からクロウに向けて振り下ろした。

金属音が鳴り響く。

「ベディヴィエール。貴方が先程と違うやり方で仕留めに掛かるのは、解っていた。だから、俺も代償を払った」

クロウの右手から血が滴り落ち、石床に小さな血の水溜りができていた。

槍の矛先は刀の柄頭で押さえつけられていた。

クロウは八突き目を鞘で払った瞬間、右手の刀を反転させ^{はひか}て握りしめて受け止めていた。

ベディヴィエールは言う。

「私の真似をしたばかりか、私を誘導したか！　だがまだ終わってない！」

ケイが割ってはいる。

「そこまです。この勝負もう終わってます、ベディヴィエール卿」

ベディヴィエールは興奮しケイを睨みつけると問います。

「何処が終わってる！？　相打ちじゃないか！」

ケイは呆れた顔をし、それに気づかないんですか？　と視線をベディヴィエールの左側面に向ける。

ベディヴィエールはゆっくりと右を向くとそこには鉄製の鞘が顔

に当たる手前で止められていた。

鞘を見たベディヴィエールは静かに笑い、クックックと声を漏らした。

槍を石床に突き刺すと、左手で頭をかかえた。

「参った、降参です。他の卿が認めるのもわかる」

クロウは鞘を下ろすと刀を静かに納める。

「ベディヴィエール卿、代償を払わないと貴方に勝てないと思いました。貴方が隻腕でなければ間違いなく私が負けてたでしょう」

クロウの言葉にベディヴィエールは驚く。

「隻腕であろうとなかろうと君には勝てないよ。その技量と判断力にはね。その上、敗者である相手を持上げるとは、僕も認めるよ君を」

ベディヴィエールはそう言うところクロウの左手を取り高々掲げて宣言する。

「僕は、この者に負けた。この者が円卓に連なる事を僕は認める！」

ベディヴィエールが宣言した瞬間、民衆から割れんばかりの喝采が沸きあがる。

民衆は口々に言葉を口にする。

「やっばクロウ様が勝つと俺は踏んでたね。ランスロット様とガウェイン様が認めた相手だぜ！」

「私、失神しそう。クロウ様素敵すぎるわ・・・」

「でも、次がどうなるかはわかんないだろう？ 次勝てないと円卓に迎え入れられる事はないんだぞ？」

民衆の喝采の中、ベディヴィエールはクロウに名前を尋ねる。

「君の名前を覚えてくれないだろうか？」

クロウは膝を付きベディヴィエールに名を明かす。

「クロウと言います。ベディヴィエール卿」

「クロウ、起ち給え。君は強者であり僕が敗者だ、跪くのは僕の方だよ」

ベディヴィエールの言葉にクロウは立ち上がる。

今度はベディヴィエールが跪き、名を告げる。

「クロウ様、ベディヴィエールと申します。以後お見知りおき下さい」

ベディヴィエールは立ち上がると元居た場所へ颯爽と戻っていた。

階段を降りるベディヴィエールに、民衆から割れんばかりの拍手が送られる。

ベディヴィエールは白い外套を纏った相手とすれ違い様に話しかける。

「右手は、殺しておいた。君なら勝てるんじゃないかい？ まあ

相手が万全であれ君に敵うとは思えないけどね。だけど僕はクロウ様を応援するよ」

ベディヴィエールの囁きに、白い外套の主は一瞬、表情を歪めたようにだった。

ケイはクロウに駆け寄ると手を掴み血で染まった右手の傷をみる。

「クロウ様、すぐ手当てをしないと・・・」

「大丈夫だよ、そこまで深くないから」

「でも！」

「ケイ。次で最後だからこのまま戦わせてくれないか！ この程度で弱音を吐くようじゃ奴には敵わない！」

ケイは心配した顔でクロウを見据えると戦いの続行を決める。

「次の審査を行います。次の者前へ！」

白い外套を纏った最後の相手は舞台に静かに登るとクロウを見つめた。

希望の光と対峙する天才（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

希望の光と対峙する天才

高台から舞台を見下ろし、アーサー王はクロウの戦う姿を見て、ガウエインに話しかける。

「ガウエイン、今の攻防を見てどう感じた？」

王の問いかけに、ガウエインは答える。

「判断力、意志力、覚悟、どれをとっても賞賛に値しますな」

アーサー王は、ランスロットを見て頷くと、ランスロットは一瞥したのち直立不動で、質問に率直に述べた。

「クロウの戦い方は、確かに優秀です。ただ私から見ると己の身を省みてない戦い方で危険だと、見受けられます」

アーサー王は、両者の言葉に耳を傾け、確かにランスロットが言った事も一理あると考えていた。

昨晚の襲撃事件に対しても、そうだったからだ。

「クロウは、一人で戦う事に固執している。円卓の騎士に迎えるにはまだ早いのかもしれぬ。だが早急に強化を図らないといけないのも又、事実ではある」

アーサー王の言葉に、舞台を望める石作りの一室は、静まり返る。こういう時に、マーリンの助言があればと一瞬思ったが、今までマーリンを頼り過ぎた為に、賊の侵入を許した事を思い出し、真実を話し始めた。

「昨晚の賊だが、マーリンに成り代わり、私に助言をし国を操っていたのだ。私がクロウを牢に閉じ込めたのも、マーリンだった者が指示したからだ」

突然の言葉に、グイネヴィアを始め、二人の騎士は驚いた。

「では、アーサー王自らの判断ではないのですね!？」

グイネヴィアは、アーサーに問いかけた。

投げかけに応じるように、辛そうな顔で答える。

「私は、早朝マーリンだった者から、突然伝えられた。落雷が落ちた場所にランスロット騎士団を向かわせてほしいと、その時はマーリンが助言した事だ、何か意味があると思っていた。実際はどうだ？ マーリンはその者の手によって殺害され、マーリンは賊に操られていたに過ぎなかった・・・事実、私はマーリンを本物か見抜けなかったのだ」

アーサー王は頭を抱えると、自責の念に駆られ俯く。

その姿を見て、グイネヴィアは慰める。

「アーサー、それは仕方無いことです。別人なら見抜く事も出来るでしょう。でも賊は、マーリン自体を操っていたのです、貴方に非はないのです」

二人の騎士もアーサー王に、体を向けると同様にうなづき、ランスロットは友人として話しかけた。

「一番近くにいて、マーリン殿と接しているアーサー王が見抜け

なかったのです、我等が見抜けるはずがありません。アーサー王、貴方に非は無い」

続けて塞ぎこんだ王に、膝を付きガウエインが話しかける。

「アーサー王、この世界にクロウが現れた事に、一連して賊の関与があるようですな。賊が何を考えて行動しているかはわかりませんが、クロウを中心に何か好くない事が起きようとしていますな。クロウを円卓に招くのはこのましくないかも知れませんか」

ガウエインの言葉に、グィネヴィアとランスロットは、トドメを刺すなど心の中で叫んだ。

アーサー王は玉座に座りなおし、

「クロウが、好ましくない？ 確かにそうだな。普通ならそう考えるだろう。だが、クロウには闇がつきまとう反面、常に傍に光が存在しているのだ。私の見立てでは、光はどうやらクロウに恋をしてしまっているようだ。光あるところに闇があり、闇があるところに、光がある。私は信じてみようと思うのだ、クロウとその光を・・。形あるものはいつか滅ぶ、永遠など無いのだ。だが、絆と言う物は、時が過ぎ去っても確かに人々の心に残る物だ。だからこそ、その絆にかけると私は決めたのだ」

そう言ったアーサー王は、実に王らしい威厳を放っていた。マールンと言う呪縛を振りほどき以前とは違う風格を醸し出していた。アーサー王の迷いのない言葉に、グィネヴィアは心を痛めた。一瞬、ランスロットを見上げて、舞台に顔を戻し、舞台を見据えた。

民衆の見守る中、白い外套に覆われた人物は、外套を脱ぐと姿を現す。

金髪碧眼に、金色に輝く長い髪を首元で束ねている。腰には剣を携え、優美な姿をしていた。

その顔は、髪の色こそ違えランスロット似の美しい顔をしていた。

（ああ、ランスロットの息子か……。円卓の騎士を一筋縄で倒すのは無理だ。円卓に名を連ねる人間は皆、天才と断言していい。しかもランスロットの息子か、最後にジョーカーを引かされた気分だ）

舞台を取り囲む、周囲からは若い娘達を中心に、黄色い声が沸き立つ。

「キヤー！ ガラハド様！ そんな漆黒の者やっつけて！」

若い娘の掛け声に、反応してクロウびいきの乙女も声を上げる。

「クロウ様！ ガラハド様を倒して！」

ケイは、両者の黄色い声に不愉快に感じていた。

まあ、ガラハド卿の事はいいにしても、クロウ様に目をつけたのは、私が先なのと言った風に表面上はあくまで、審査員として装っているが、クロウひいきの女性をうっとおしく思っていた。

クロウは、刀を引き抜き石床に突き刺すと、膝を付きりボンを拾いきつく繋ぎ合わせる。

鮮血は掌^{てのら}から、舞台へと雫となり落ちていて、とても刀を握れる状況ではなかった。

クロウは、刀を握り締めると、左手と口を使い、リボンで柄と拳を強く固定した。血に染まっていくりボンを見つめながら祈る様に心の中で呟いた。

（ヴェルフィーユ、どうか俺を勝利に導いてくれ！ この局面を切り抜けるだけの加護をどうか！）

ケイは、両者の状況を判断すると確認する。

「ガラハド卿、準備はいいですか？」

ガラハドは、ゆっくりと剣を引き抜くと構えて答える。

「いつでもいいですよ。ケイ卿」

クロウは、ケイを見て首を縦に振ると舞台の中心に立ち、ガラハドと相まみえる。

ガラハドは、クロウを見て興味深い顔で嬉しそうに言う。

「先ほどの戦い、拝見させて貰いましたが、いい参考になりました。お陰で僕の勝利は揺るぎ無いものになりました。ありがとうございます
ざいます」

クロウは、ガラハドの言葉を聞き流し、平常心を保つ様に心の内で思う。

（そんな安っぽい挑発に乗るか！）

ケイは、ガラハド卿の挑発を警告すると、両者の間に割って入り

手を掲げて、

「これより最終審査に、入ります！ 始め！！」
と言うと掲げた手を振り下ろした。

合図と共に、クロウの右腕にガラハドの突きが放たれた。

クロウは、滑る様に左に紙一重で避けた。刹那、剣は軌道を変え、クロウにめがけ水平に襲いかかる。

咄嗟の判断で、刀で受け止めると、ガラハドは両手で力任せにクロウを追い詰める。

拮抗した状況下で、クロウも右手に左手を添えて力任せに対抗する。

「利き腕を殺された、状況下でたいした力ですね。感心します」

ニッコリ笑うとガラハド卿は、素早く剣を引くとクロウの背後に回り込んだ。

バランスを崩された、クロウは前のめりになりながら何とか踏みとどまる。振り向いた直後、クロウの顔めがけてしなやかに突きが放たれていた。

クロウは思わず声を上げる。

「まずい！ 避けきれない！」

反射的に、左腕で攻撃を防いだが、剣はクロウの上腕部分に突き刺さり、血は剣を伝いガラハドの柄を濡らす。

ガラハドは、剣を引き抜くと雄弁に語りだす。

「貴方は、突きが苦手な様なので多様さしてもらいました。貴方の戦い方も参考になりました。片手でよくやったと褒めてあげましょう。降参したらどうです？ もう両手とも使い物にならなくなっ

「た今、戦えないでしょう？」

クロウの左腕は、だらりと垂れ下がり、鮮やかな朱色の着物は血で色濃く染め上げていた。ポタリ、ポタリと着物の袖を伝いまっ白なキャンバスへと、色をつけていく・・・。

刀と右手を縛り付けていたリボンは、解け掛かっている今にも刀は、手から離れようとしていた。

ケイは、状況からみて続行は不可能だと判断し、終了を告げようと声を上げようとした。

クロウは、ケイを見つめて言う。

「まだやれる。今のは一本じゃないし、致命傷でもない」

冷静を装い、ケイに告げる。

ケイは、心配した面持ちで反論する。

「ですが、状況的に勝ち目は薄いです。それより傷の手当をしなければ・・・」

「無理なら降参するさ。まだ勝ち目はある！ 利き腕を完全に殺された訳じゃないだろう？」

勝ち目はある・・・？ そう自分に問いかける。

あるはずが無い、こんな状況で勝ち目があるなんて、嘘だった。ほぼ完全に、両手は死んでる。唯一、多少利き手が動く程度だ、我ながら可笑しかった。こんな局面でハッターなんて言う自分が不思議だった、けれども勝てるとはいい切れないが負けるとも感じてなかった。

ガラハドは、クロウの言葉に静かな怒りを覚えた。

「この状況でよく、そんな事が言えたものですね！ まあいいでしょう。死んでも恨まないで下さいね、僕は、一応忠告しましたからね」

冷たくクロウに言葉を投げつけると、距離を取り構えた。

クロウは、対照的に刀を、石床に突きたて、リボンを左手に握り、右手で構えをとった。

そんなクロウを見て、ガラハドは怒りをぶつけるように話かけた。

「剣士が、剣を手放してどうするつもりですか！ 君は愚者か？ 剣より強いものがあると言うのか！？」

今までの余裕を漂わせる口調とは対照的にガラハドは語尾に怒気を纏わせた。

クロウは、口元にうっすら笑みを浮かべると、ガラハドの神経を逆撫でし挑発する。

「ガラハド卿、剣がこの世界で一番強いなんて思わない事だ。貴方こそ『愚者』なのか？」

ガラハドは、貶された事で、誇りが汚されたと感じ、冷めた表情でクロウに走り出し襲いかかった。

渾身の突きを、殺意を込めてクロウの胸へと正確に狙いを定めて繰り出した。

クロウは、ギリギリまで引き付けて、右足を軸に左足を下げかわすと、左足をひねり素早く右膝でガラハドの右手を叩き上げた。

剣は手元から投げ出されると、石床に弧を描いて音を纏わせ転がっていく。

「なんだって!？」

驚きで冷静さを取り戻した、ガラハドの目前には、クロウの左足が迫っていた。

右膝で剣を叩き落とした後、右足が地面に着くと同時に軽く跳躍し左足をあげると、ガラハドの顎に狙いを定めて上から下へ振り下ろした。

左足は、ガラハドの顎を正確に打ち抜くと、ガラハドは意識を刈り取られその場に膝をつき倒れこんだ。

見た事も無い攻防を目の当りにした民衆は、驚いて声が出ない。ケイが、倒れたガラハド卿に近づき、腰を降ろして体を揺すったが微動だにしない。瞼を親指で上げると瞳は白目をむいていた。

ケイは、声を張り上げて兵士呼び寄せると、ガラハドは二人の兵士に抱え上げられると担架で舞台から退場していった。

決着がつき、クロウは安堵からその場にへたり込み、大きな溜息をついた。

「満身創痍だよ、ヴェルフィュー。また君に救われた・・・リボンが解けてなかったら多分負けてたよ」

そう小声で呟くと、左手に握りこんだリボンを見つめる。

ケイは、クロウに肩を貸し立ち上がらせると、大きな声で民衆に勝者の宣言を轟かせる。

「勝者。クロウ卿! 私^{わたくし}の判断に異論がある者は、歩み出てもらっても結構です! 異議をお持ちの方はどうぞ申して下さい」

民衆は、ケイの言葉に静まり返ると、皆互いに顔を見合わせた後、大きな声で歓喜の声を上げた。

城下の若者からは驚きの声があがり、

「なんだよ！ 今の技！ 見た事ねーよ！！」

乙女達からは黄色い声が飛び、

「クロウ卿、なんて素晴らしいの！ 最後まで勝負をあきらめない、あの姿勢・・・」

兵士や騎士の間からは、尊敬の羨望の眼差しを受けていた。

「あの方こそ、円卓に相応しい方だ・・・」

会場は、一気に加熱し、クロウを讃える掛声が響き渡る。その光景を見てクロウは、少しだけ微笑むと、俯き眩く。

「ああ・・・自分を憎む事で強くなったけど、そんな汚らしい物じゃなかったんだ・・・自分が思っているよりずっと綺麗で、人こんなにも感動させるものだったんだ。母さんが言った意味が今は少しだけわかる気がする・・・ありがとう母さん・・・」

クロウはそのまま、意識を失った。

その光景を高所から見下ろす。アーサー王は民衆の前に姿を現すと、大きな声で高々と宣言する。

「今、この時から漆黒の者。クロウを円卓に連ねる事をここに宣言する！ 今宵は皆！ 大いに騒ぎ、祝福し、この日を祝おう！」

そう述べた後、踵^{きびす}を返し、王妃と共に、玉座を後にした。
ランスロットとガウェインは、お互い顔を見て笑ったあと、拳を突き出しお互い合わせた。

小声で、ランスロットは言う。

「ガウェイン、クロウを厄介者呼ばわりしたが、あれはどういう意味での発言だったのだ？」

「そう言っておいたほうが、後々有利になると思ってな？ そう言うランスロット。お前こそクロウの戦い方は危険だと言ったがあれは本心か？」

「ああ言えば、王の本心がわかるだろう？ こうなる事だとは半分賭けだったがな、我が息子をくだすかどうか、少しばかり不安があったよ。何せ剣は天才的だからな」

互いに本心の確認をしあうと、王の後をついて高台を後にした。

／
アーサー王達が、会場を後にした頃――

舞台からクロウを下ろすと、リアが急いでかけて来る。

ケイはリアと一緒に、救護室の簡易式ベットにクロウを横に寝かせて、怪我の様子を見ていた。

手の傷は、大した物じゃないなんて嘘を言って・・・少し深いじゃないですか！ と憤慨していた。

腕の傷は、ちょっと深いけど以前の様に動く判断すると、紐で脇を強く縛りつけ、慣れた手つきで正確に縫合していく。

数分で縫合し終わると、肝心な利き手の掌に取り掛かる。

幸い、血は止まっていた。

紐を解き、右手首を圧迫すると、棚からジャムの実で作られた度数のキツイ酒を取り出し、鉄で出来た器に注ぎ込む。

その中に、クロウの右手をつけ、凝固した血液を溶かしていく。固まった血液が溶けるまで、リアが簡易式ベットを、逆卜の字形にあつらえた。

リアは、ケイに質問する。

「ケイ様、どうして勝者を決める時、クロウ様に『卿』とつけたのですか？　まだ円卓の騎士だと認めてもらってないのに・・・」

「初めて、この目で見るまで信じられなかったけど、本当に凄いなと思ったからよ。私が凄いと思った者を、皆が凄いと思うとは限らないけど『卿』をつけて呼ぶ事で民衆にアピールできるでしょ？　その後の事は民衆と王が決める事だもの。私の独断でそう呼んだだけよ」

リアは、ケイの質問に納得すると心配そうな顔でクロウを覗き込む。

「ケイ様？　クロウ様、大丈夫でしょうか？」

ケイは当然といった様子で傍にある椅子に腰掛けると、リアの質問答える。

「私が、何としても元通りにして見せます！」

ケイの様子を見てか、ハハアンと言った顔つきでケイを見て、

「ケイ様？　もしかして・・・クロウ様が好きなんですか？」

突然の質問にケイは顔を真っ赤にして動揺する。

「何言ってるの・・・そんなワケ・・・そうよっ！　スキなの！
親友だから言うけど、他人にばらしたら絶交よっ！」

ケイはクロウの顔を見つめて、答えると腕を組みリアを冷やかしかかる。

「所でリア？　貴方の想い人は、今この時、何をしてるのかしら？」

リアは、ウツとして、困った顔で答える。

「円卓の拡張をアーサー王から任ぜられて、今朝からずっと工房に籠りつきりです・・・」

「そう。ご苦労様。さぁリア、ここからが本番よ。集中して取り掛かるわよ！」

ケイは椅子から立ち上がり、クロウの右腕を押さえつけて置くようにリアに頼んだ。

こうして、ケイとリアの治療によって無事、掌の縫合は事なきを得た。

唯、一つだけケイには引っかかる事があった。

クロウが、左手に硬く握りこんでいる拳から顔を覗かしてる真紅のリボンの事だった。

希望の光と対峙する天才（後書き）

最近、作品について思っても見なかった事を言われたのでやる気が出てきます。

正直、以外でした。

この場を借りて、感謝をすると共に読んでくださる方。
応援して頂ければ幸いです。

契りの夜（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

契りの夜

俺は、輝く光の中で、白銀のドレスを身に着けた、背中にはえた六枚の翼を惜しげもなく広げた金髪の女性に話しかけられていた。

右手に持つ剣を胸もとで抱き、左手にはユリの華を一輪。

抱いた剣のうえに交差するように立っていた天使だった。

天使は、俺に何か告げていたが上手く聞き取れなかった。

「盟約を交わしなさい・・・」と、だけはどうにか聞き取れた。

ゆっくりと遠のいていく天使を、必死に追いかけて質問を問いかける。

「待ってくれ！ 貴女は誰なんだ！？ 俺は、誰と盟約を交わせばいい！？」

遠のいていく天使は、白い大地から翼を優雅に広げて飛び立つと、澄み切った空へ浮遊し、俺を一瞥してみると目が眩むほどの光を放ち消えた。

まばゆい光を、俺は左腕でかばう、光が治まったのと同時に腕を下ろし、静かに瞼まぶたを開いて、視界を取り戻すと、石作りの天井が目に飛び込んできた。

「今のは、夢か・・・夢にしてはリアルだったな」

目覚めた俺は、体を起こそうとしたが、左腕と右掌に激痛が走る。余りの激痛に、俯き顔をゆがめた。不意に左手に視線がいく。握りこんだ左手をゆっくりと開いて見ると血で真紅に染まったりボンが顔を覗かせた。

「ああ・・・そうか。俺は戦ってたんだったな」

記憶を辿りながら思い出そうとした、ふいに甘い香りが鼻を刺激する。

傍らに目を向けるとケイが、ベッドのシーツに銀髪を豪快にまきちらし寝ていた。

「ずっと、俺の看病をしてたんだな・・・きつと疲れてるだろうに」

自覚の無いまま、優しい笑顔を浮かべて微笑むと、白い布で覆われた右手で頬を撫^{なで}でて一言、つたえる。

「ありがとう。ケイ」

俺は、何とか体を起こすと、ケイを起こさないようにベッドから出る。

ケイの体を心配して、ベッドからシーツ抜き取り体を覆い、静かに部屋から出た。

蝋燭で照らされた、赤い絨毯がまっすぐ伸びた広い廊下を進んでいく。

突きあたりを右へ曲がると、豪華な大広間が姿をあらわす。

大広間は、中心部分が四角い吹き抜けになっていて、吹き抜け部分をふちどる手すりは、金で装飾を施されていた。

手すりから、眼下に中庭が見えた。

もう誰もが寝静まった。闇の深い時間帯に俺はある場所へ静かに歩を進める。

「なんだか、いつもより静かな夜だ。夜の香りがして心地いい」

手すりに沿って階段を下へ降りていくと中庭へと足を踏み入れる。

「初めてここを、ランスロットとガウェインと共に謁見の間へ向かったんだったな・・・」

俺は、階段に挟まれた謁見の間の扉を一瞬見て、懐かしそうに微笑む。

そして、中庭に美しく咲き乱れる木々や花達へと顔を向ける。

「こんなに静かで寒い夜でも、しおれる事なく立派に咲き乱れる。ガラハドが瞳を奪われるのもわかる」

中庭を惜しみながら出ると、階段の隅にある牢へと続く道を降りていく。

薄暗い道を、微かな温かい光を頼りに下へ、一步ずつ、確実に歩んでいく。

確かな一步を踏み出すたび、髪は背中で揺ら揺らと、ユラメク。

やがて、地下牢の入り口へと辿りつく、鉄格子に目を向ける。

鉄格子は、二等辺三角形のようにポツカリと牢への道を開けていた。

「俺が斬ったままだな。当然か、母さんと対峙した時から数日しかたっていないもんな」

俺は^{また}瞼を閉じて、母さんを思い出す。

本当に、この世界に來たことは、今思えば幸運だったのかもしれない。

幼い時から、運命を翻弄されてきたけれど、俺はここで大切な人

を見つける事ができた。

きつと何か、意味があつてこの世界に来たんだろうと、今は確信している。

それが、あの漆黒の者の計略のだとしても————。

鉄格子の棚にある毛布を手にとり、俺は鉄格子をくぐると、突き当りの幽閉されていた牢屋の前で足を止めた。

「ここで初めてパーシヴァルが泣いて、リアに会って、その晩にケイと話をしたんだよな」

数ヶ月も前の事だけど、昨日の事のように思い出す。
突き当たりの格子窓をみて、

「そして・・・ここで、綺麗な沢山の蛍のように輝く光を見たんだ。そしてソレは。」

俺は、言葉を止めて牢へと入り、壁に背中を預けると毛布に包まり、握り込んだ左手をひらいて考える。

盟約とは、誓いの証。

本来なら、俺はアーサー王に誓いを立てないといけないんだろうな、円卓の騎士になるんだから。

でも・・・俺は騎士じゃない。

騎士と武士、確かに似通っている、理念も、信念も・・・だけど俺は————！

自らの血で真紅に色を変えたりボンを見つめながら、独り静かに語りかける。

「盟約を・・・か。そんなの関係ない。もう俺の中で誰と結ぶか

なんて決まってる。怒りっぽくて、ちよつと泣き虫で頼りになって、でも、漆黒の者に追われる不安の日々を過ごしてるのに、ヤセ我慢して強がってる。不思議な瞳をしたキレイでカワイイ女の子。俺は彼女を守りたい！　それが今の俺が望む事だから・・・」

口に出した言葉は、まっしろな吐息となって静かに昇ってゆく。顔をあげ、視線を吐息に注ぐと、目の前に、温かで包み込むような優しい光が溢れ出す。

光の中から、少女は現れて俺に話しかける。

「待ってたわ・・・クロウ」

「待ってた？」

「ええ・・・きつと来てくれると信じてたから・・・」

「寒いのに、こんな所で待ってるなんて、風邪を引くと大変だよ。ヴェルフィーユ・・・」

俺は、自分の纏ってる、毛布を少女の肩に掛けた。

少女は、色の違う左右の瞳で、俺を上目使いで不安そうに見つめて質問を投げかける。

「クロウは、ずっと私を守ってくれる？」

「死んでも守るよ」

俺の言葉に少女は、頬を膨らませて怒り出す。

「クロウは死んだらダメ！　ずっと私と一緒にいるの！　それに

死んだら私を守れないじゃない！」

確かにそうだと俺は、心の中で笑う。

「ああ。ずっと一緒にいて、君を守り抜くよ。神とこのリボンに誓う」

俺は、左手を開いて、リボンを少女に見せた。それを見て嬉しそうに微笑むと毛布のマントから右手を差し出す。少女は声を震わせて、緊張した声で俺に言う。

「盟約を・・・証を立ててほしいの・・・」

俺は夢を思い出した。ああそう言うことか、これでここに來た意味が出てくる。

かつて少女がこの場所で運命を口にした時から、運命とは決まってる道なのだ。この先どんな困難がまちうけていようと、かならず少女を護ると決意した。

俺は、覚悟を決めて膝を付くと、少女のまっ白で綺麗な手を取り誓いのキスをする。

その姿を見た少女は、嬉しそうに顔を火照らせて、左手で十字を切ると力強く言葉を紡ぐ。

「聖ジョージと熾天使ガブリエルの盟約に基づき、今、証は立てられた！ここに聖ヴェルフィユを守護する聖騎士が誕生した事を、神々に宣言する！」

少女が宣言すると、頭上から神々しい光に包まれた。

光の中で俺達は、数人の人影に囲まれた、女性のようなシルエットの人物は、盟約は交わされたと告げた後、光と共に去って行った。

薄暗い牢に月明かりが射しこみ、少女を照らし出す。

不意に小さな白い雪が、少女の上に降り注ぐ。

小さな鉄格子の窓から、まるで祝福するかのように雪が漂ってくる。

少女は、金糸の髪をなびかせ、赤と碧の瞳に涙を滲ませて嬉しそうに優しく、見た事もない貌で微笑んだ。

その光景は、神秘的に綺麗で心を驚づかみにされる。
鼓動が尋常じゃない速さで高鳴る。

少女は、左手の掌を差し出して、

「クロウ。リボンを私に取れない？ 宝物にするから・・・」

俺は血で染まったりリボンを少女に渡し、告げた。

「ヴェルフィーユが望むなら」

少女は綺麗な瞳を閉じて涙を流すと、大事そうにリボンを抱きしめる。

ふたたび、静か瞳をひらくと、さくらんぼのように、ほんのりと頬に色をまとわせる。そして――

「ありがとう。クロウ・・・それから・・・実はね。ずっと前からね・・・クロウの事が・・・」

少女は、口ごもっていつもと違い、歯切れが悪かった。
何を言うかは、予想できた。なぜなら俺も、そう伝えようとした

からだった。

「ああ・・・ヴェルフィーユ。それは俺から言うよ・・・」

少女は、真剣な顔で俺の言葉を待っている、視線はどうやら俺の口に注がれてるようだ。

俺は立ち上がり、男は損だなど思いながら優しく微笑んで言葉を紡ぐ。

「俺は、ヴェルフィーユを愛してる・・・」

青年から紡がれた言葉は、少女の心に清らかな水のように染み渡っていった。

涙を浮かべる瞳は、まるでルビーやサファイヤのように輝いていて、瞼をとじると真珠のような涙が少女から溢れ出た。

わっ、と泣き出すと毛布を投げ捨て、青年の胸に顔を埋めて号泣した。

青年は、包み込むように抱きしめると、痛んだ右手で優しく少女の金色に輝く髪を撫でる。

「ヴェルフィーユ、もう独りで無理をしないで。君が傍に居てくれたように今度は俺が、君を支えるから」

少女は、青年の言葉を聞き、一段と声を張り上げて泣くと恥ずかしいのか悪態をつく。

「馬鹿馬鹿馬鹿！！ クロウの・・・バカ！！！！」

こうして二人だけの時間は、粉雪が闇を白く染めるかのように、
深深と降り注ぎ終わる、明け方まで静かに、おごそかに、雪が溶け
るように過ぎ去って行った。

本心

明け方の城内に、人影が映る。

人影の主は、周囲を警戒しながら自室に戻ろうとしていた。

謁見の間の扉の上には、小さな円卓をかたどった時計がある。

針は早朝、五時を示していた。

侍女たちがあわただしく朝食の準備をしている時間帯。

誰にも見つからないように、大広間への階段を上っていく、大広間から自室へ戻ろうと影の主は急いでいた。

「早く部屋に戻らないと・・・ケイに見つかる！」

長い黒髪を揺らしながら、自室に繋がる廊下に足を踏み入れようとした。突然、後ろから背中をつかまれた。

影の主は、ビックリした。

（もしかして・・・ケイか!?!）

錆び付いた機械のように首だけ振り返ると、大柄の背の高い騎士が立っていた。

橙色のマントをまとい、銀の帷子かたびらに、背中から大剣がヒョッコリと顔を出していた。

その顔は、金髪碧眼に顔を覆うように髭を蓄えていた。騎士も驚いた顔で、影の主をみると微笑んで話しかける。

「いや、済まない。見違いだ。一瞬侍女かと思ったんだが変わった姿をしているし忘れてくれ」

影の主は、尋ねる。

「貴方は、誰ですか？」

問いかけられたら答えないといけないと言う顔で、騎士は話し始めた。

「私は、エクトールと言う。なに、そのサロンで紅茶を飲んでいたんだが空になってしまってたね。侍女らしい姿を見たので、おかわりを頂こうと思つてのことだよ。どうやら君は女性ではないみたいだな、名前を伺ってもいいかな？」

影の主は、エクトールを見上げて答えた。

「クロウと言います、エクトール卿。今、急いでいるのです。それで俺にあった事を内密にしておいてくれないでしょうか？」

エクトールは、右手であご髭を触ると目を細めながら言う。

「いいだろう、クロウ。なにがあつたかは聞かないが、呼び止めてすまなかつた。早く行きなさい」

エクトールの言葉にクロウは軽く頭を下げて、自室へと続く廊下に足をむけて足早に去っていった。

クロウの姿をエクトールは神妙な面持ちで見つめて、大広間のサロンの椅子に腰掛けると、溜息をついた。

「彼が噂の、新しい円卓の騎士か。あのコの言うとおりだな」

と、呟いて空になった紅茶のカップに、テーブルに備えてある水

差しから水を注ぎいれて人差し指でグルグルとまわした。
カップの中の水は、円卓と運命の輪を示すように渦を巻いた。
エクツールは、しばらくカップに視線を落として考えていた。

クロウは、自室の前で立ち止り祈った。

「どうか、ケイが起きていませんように・・・」

恐る恐るドアをあけて覗き込むと・・・ケイは昨夜のように眠っていた。

クロウは、ホッとしてケイを起こさないように自室に入ると静かにベットに横になった。

その瞬間、ケイが目をあけてクロウに覆いかぶさった。

クロウは、驚いて目を丸くして覆いかぶさったケイを見つめると、銀髪を垂らしたケイの瞳から雫がこぼれてクロウの頬を濡らした。

甘い香りを纏わせながら悲しそうな声で、静かに問いたです。

「昨晚は、どこにいつてらっしゃったんですか・・・」

驚いた！ ケイが泣くなんて思っても見なかった。

クロウはそう思っていた。

何故？ 怒るのはわかる、だけど泣くとなると別だ。何故泣いてるのか不思議でならなかった。

「えっと、ケイ。俺はさっき起きてトイレに行ってただけだよ」

咄嗟に言い訳をするも嘘が苦手なクロウは、ケイの口から伝えられた『昨晚』と言う言葉にハッと気が付いたがもう後の祭りだ。後悔

した。

ケイは、涙をボロボロ溢し、悔しそうな顔でクロウを見つめて言う。

「全てを聞こうとは言いません。ですが私には嘘をつかないで・・！ 私は貴方の侍女なのです、円卓の騎士である前に一人の女性なのです・・・」

クロウは、申し訳なさそうにケイに話しかける。

「ケイ。君が昨晚俺を、介抱してくれたことは本当に感謝してる。でも君が泣いてる理由わからない。怒られるならわかる！ だけど何故・・・君は泣いてるんだ？」

「本当に貴方は可笑しな人。ここまで言ってどうして気が付かないんですか！ 鈍感にも程があります。貴方が現れてから、私の優先順位は変わりました！ 以前は、円卓の騎士であることが一番の誇りでした。だから男性に負けないように努力を重ね、ここまで登り詰めた！ でも・・・貴方を見てからの私は、おかしくなっちゃった！ 貴方を見るだけで気持ちが安らいで、貴方を見ただけで心臓がドキドキして。きがついたらいつの間にか貴方を目で追いかけていた！ 今も私は・・・円卓の騎士であることに誇りを持っています。でも、今の私の一番の誇りは、貴方の侍女である事なのです・・・」

クロウは突然の、ケイの告白に言葉が出ない。

ケイがまさか・・・そんな風に俺を見ていたなんて・・・

「ケイ・・・俺には！ 大事な人がッ」

そう告げようとした矢先、クロウの口は閉ざされた。

クロウはあまりの出来事に、目を大きくあけ、瞳孔がひらいた。銀髪から甘い香りを漂わせ、瞼を閉じて自らのくちびるでクロウの口を優しく閉ざしていた。

ケイはゆっくりと、瞼をあけてクロウを悲しそうに見つめてポツリと呟いた。

「ごめんなさい。私はクロウ様を愛してしまいました・・・もう侍女ではいられません、今から新しい侍女を世話係にします・・・」

涙を流しながら言う、ケイは儂げな表情でとても綺麗だった。

そう言い残して足早に部屋から走って出て行った。

残されたクロウは、唇に手を当てて呆然として考える。

俺はどうしたらよかったのだろうか。

慰めたらよかったのか？ いやそんなことしたら侮辱もいいところだ。

「ヴェルフィーユを愛してしまった俺には、ケイの気持ちに答えてあげる事ができない・・・」

クロウは、このままでいるのは嫌だと思う自分がある事に気が付いた。

どうしていいかわからず、浅い眠りに入ってしまった。

本心（後書き）

とりあえずメモ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430y/>

封印聖女

2011年12月30日16時49分発行